THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿二年 第六號

（第二百九十號）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

眞宗信徒生命保險株式會社

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし

●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり

●利益配當附保險の契約を爲す者は最も公平の方法に依り計算したる利益金を得べし

●掛金割增（年增契約）の代りに保險金控除（或ル年限內ニ死亡セバ）の新法あり

●當會社は本願寺保護の下に全國に渉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり

●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし

●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角　（電話　七貳貳番）　**京都本店**

東京市京橋區南傳馬町三丁目、壹　（電話本局五壹八番）　**東京支店**

大阪市東區大川町御靈筋角　（電話東壹貳五參番）　**大阪出張所**

廣島市紙屋町（秦　忠兵衛方）　（電話　六〇八番）　**廣島出張所**

中央公論第二十二年第六號目次

▲公論 （一……二五）

南清に企業すべし……社論

趣味論
大學論……福本日南

大己貴神と徳川慶喜公……文學博士 上田萬年

迷信の排除に就いて……文學博士 三上參次

▲海外新潮 （二六……三五）

▲佛國南北の優劣▲中央亞細亞に於ける三國の商戰▲獨逸の陰謀▲北熊國の英國往訪

▲說苑 （三六……七九）

一葉女史

○一葉女史……半井桃水

○一葉女史の作品……佐藤紅綠

○一葉女史に就いて……島崎藤村

○たけくらべ……幸田露伴

○一葉女史……上田敏

○一葉女史の作物……島村抱月

○一葉女史に就いて……岩谷小波

○一葉女史の作物……德田秋聲

○故一葉女史……後藤宙外

ベルサイユの庭園……文學博士 箕作元八

東西比較 楊柳美觀論……畔柳芥舟

高山樗牛

○故高山林次郎君の天才に就いて……田中喜一
○亡兄高山樗牛……齋藤信策
▲海内思潮（七九……八二）
▲落後者の天地▲國語と思想との關係▲無責なる任聘告▲東西學校卒業者研鑽比較
▲詞藻（八三……一三一）
鴨（小説）……佐藤紅綠
ネギ一束（小説）……田山花袋
鏡（小説）……柳川春葉
和歌……尾上柴舟選
俳句……大谷繞石選
▲評論（一三二……一三六）
武勳の半面……梧窓子
戰爭と宗教……松城生
▲文藝時觀（一三六……一四〇）
思想と形式……磯のや
文壇時言……小蚊子
▲雜纂（一四〇……一四四）
我輩も猫である……小室白也
▲新刊批評數件（一四四……一四八）

此日進月歩の競爭場裡に一日早く新書を讀みて新智識を得たる者は一日の勝利を得たる者なり

松岡農相題字
大隈伯爵序文
臺灣總督府事務官
圖師庄一郎君著

賜天覽

家

出版界稀有の好評

第五版

上製 定價金壹圓五拾錢
並製 同 壹圓貳拾錢
郵税八錢 新領土拾四錢
（實價は何地にて購求せらるゝも低減せす）
五部以上本社申込に限り税不要前金御送附なき分は引換小包にて送本す
爲替 爲替は本社申込は谷中三崎町郵便局振込の事

家を重んし家を愛するの慣習は吾建國以來の國風にして武士道の淵源も全く此重家愛家の慣習に胚胎せり本書は此見解より(一)**祖先、墳墓、宗教、儀式**を説きて一家の由來、信仰、崇遠の觀念を喚ひ(二)家長、配偶者、尊卑親屬婢僕の責任本分を説きて一家の**要素**を**純潔**ならしめ**親族關係同族會議、同族財産制**に其一族枝葉の連結を計り(三)**家憲、家政、豫算收支**に據るへき典範準則を示し(四)**一家道德**に於ては品性、忠實、慰安、修養の根本思想は勿論元氣、細心、謹儉、勞働等**致富立身**の秘訣より嗜好娯樂の改善に及び以て**大國民**の將來の**方針一家百年の大計青年立志の資料を示し**(五)日誌、年中行事、家事記錄、書翰、衛生、災害豫防、食事、服粧には實驗典例より保身整家の要道を擧け(六)**世襲財産**の積立及ひ各種の**貯蓄、負債整理**等の問題には**家事經濟**の**眞髓**を發揮して一々明細の表を挿み(七)**子弟教育**は一家繼嗣の必要より**教育資金**の積立表に及ひ一切餘すなく(八)官職公職、準公職、其他の營業には準據すへき法則より**醫師辯護士**の時弊に及ひ(九)進んて**社交、慈善、公德公共設備**に入りて現下の積弊、富豪の**眠**を**鐘醒**し(一〇)**住所**は居間、書齋、庭園、運動場の趣味より便所臺所の設備迄を切論し(一一)**圖書**は讀書の嗜好より其整理に及ひ(一二)富豪の遺産處分には**破天荒**の**快文字**を埋め趣味津々全篇何れも警世の金言なり

發行所 東京谷中本村 **經營社**

大賣捌所 神田表神保町 **東京堂** 神田一つ橋通 **有斐閣**



第二十二年
第六號
(第二百十九號)

南清方面に企業すべし

(一)

近時我が國人の滿洲に往くもの幾んど向背相踵ぐ、曾て我が國民の征戰に從事するもの百萬人、總て其の土を踏みたるが故に、今も則ち相踵で行くといはゞ、是れ唯だ古戰場を憑吊するものゝみ。

南滿洲鐵道既に我が有となれる以上、而して旅順大連の我が租借地たる以上、而して韓國の安全を保障せざるを得ざる以上、滿洲を開發するの經世上必要なると素より多言を要せず、滿洲を以て我が勢力範圍と爲し、列國をして之を承認せしめたる以上、其の經營發達の等閑にす可らざること亦絮說するの要あらず。

然れども商工業上の利益を得るよりいはゞ滿洲の如きは寧ろ多くの望みを繫ぐに足らず、多く望みえ

属すべきは却つて南清に在り。

〔二〕

南清の富源は言ふまでもなく楊子江流域にあり、楊子江は世界有数の長流にして、上海より遠く成都に溯るまで、唯だ萬縣宜昌の間僅々三百廿浬の間は所謂三峽の險なるも、之を除けば舟楫の便極めて大にして、一千八百浬の間に優に船舶を上下せしめ得べく、此の本支流の廣大なる流域は、地味豐饒にして所謂沃野千里に連り、物產甚だ多くして戶口稠密なる都市到る處に多し。楊子江は淸國の大動脈にして、淸國は楊子江を除けば幾んど生命なく、又活動なしと稱するも過言に非ず。

若し之を滿洲に比較せんか、比喩聊か酷に過ぐべきも、滿洲は猶ほ我が奧州斗南半島の如きのみ、地積必らずしも小なるにあらずと雖も、風物荒寥として滿目頗ぶる悽愴なり、而して南淸は我が近畿中國の如く、肥沃にして殷賑、幾んど無限の富を藏す。

〔三〕

楊子江流域の廣大なる、我が日本の面積に幾倍す、若し日本人口の半數約二千五百萬を茲に散布せば、恰かも庭上に初雪を降らせしに過ぎずして、雪花幾んど數ふるにも足らざるべし。記せよ、此の廣大なる地積は、總て豊沃にして無限の富を藏する天府なることを。

夫れ個人の勞働を要すべき地方は、滿洲の如く人口稀薄なる處をも可とすべし、若し資本を放下する

場合には戸口稠密なる南清の如き地方を妙なりとするを論を俟たず。

南清には揚子江の外、更に廣東河の流域あるとを忘る可らず、廣東河には、東江、西江、北江とありて水量多く流域長し、之を揚子江に比すれば素より小なるも、而かも揚子江に比較すべき價値は十分に在り。

夫れ列國人中最も勇敢に率先して世界の利源を探討し開發するものは英國人なり、故に英國人の最も多く往く處は世界の最良なる地方とす、北米合衆國加奈陀然り、印度然り、濠洲然り、南阿然り、而して揚子江流域と廣東河流域とも、また清國中英人の最も多く到る處にして、滿洲には則ち殆んど無し、利源の滿洲に少くして而して南清に多き、此の一事に徵するも明々白々ならずや。

〔四〕

日本人は清國を富國と稱す、甚だしき誤見なり、否、吾人は清國を富國といふに同意するも、清人を以て富民と爲すを謬れりとするのみ、即ち清國は富國にして貧民なるものなり、夫れ富國にして貧民なり、必らず特種の事情なかる可らず。

之を人口の點よりいはゞ、清國の密度は日本に及ばず、即ち富の分布上當然富民ならざる可らず、然るに實際貧民なるは何ぞや、清國政府民を富まさゞればなり、省毎に税制を異にし、省毎に關税を設け、省毎に貨幣秤量を異にす、加之政府嚴令を布きて貨物の輸出入に干涉し、以て消費供給の平均を失はしむればなり、抑も斯の如くにして如何ぞ民を富ましむべけんや、國中到る處に天與の富源あるも、國民

之を開發するヿを得ざるのみ、偶々富豪あるも、政府官民の迫害を怖れ、悉く外國人保護の下に趨りて開港場にのみ滙集する也、換言すれば、是れ清國政府自から富豪を驅逐して外國の檐下に走らしむるなり、富國にして而して貧民なる原由は實に玆にあり。

日本人は乃ち進んで此の富國貧民の間に入るべし、其の唯一の武器とするものは則ち資本と技術とにして、此の二者を以て賃銀低廉なる清國の勞力とを調和せしめば、成功期して俟つべきのみ。

清國には近時利權回收の論聲頗ぶる高し、然るも是れ愚論のみ、此の愚論の結局は清人自から其の利源を招かず、己れも利せずして而して又他をも益せざらしめずといふに歸着す、我が官民は毫も斯の如き愚論に顧慮すべき要あらず、記せよ、楊子江の本支流々域には十數ヶ所の開港場あり、此の開港場は條約の明文によりて清國政府之を奈何ともす可らず、其の頑冥なる官民もまた將た奈何ともす可らざる天地なるヿを、我が日本國民は宜しく進んで此の天地に起業すべし、唯だ勞働は不可なり、資本家往くに非ざれば斷じて不可なり。

〔五〕

南滿洲鐵道を我が有としたるは、實に近來の快事なり、此の鐵道と相結托せば、我が事業は十分に經營せらるべし、國家は宜しく其の經營に力を盡さゞる可らず。

而かも同時に南清の利源をも開發するヿを忘る可らず、國家は宜しく大資本家を慫慂し鼓舞して以て南清に大事業を計畫せしむるを要す、日本人は戰に勇にして平和の商工に怯なりや、戰に勇なる素より

不可なし、而かも同時に商工業にも勇ならざる可らず。

吾人をして忌憚なく言はしむれば、楊子江流域に於て日本人の活躍せるもの唯だ獨り上海に於ける三井物産會社あるのみ、然るも是れ三井物産會社の活躍にして日本商工業者の活躍にはあらず、上海に於ける三井物産は他の日本人に何等の利益をも與へざるなり、故に吾人は大規模の起業會社を創設し、企業に、金融に、土地に多くの方面に渉りて以て小資本家の後援たるべきものあるを望む、三井物産假令活躍するも到底之を期待す可らず、正金銀行に至ては幾んど惰眠せるものなり、之を茲に望むは寧ろ愚のみ、彼は僅かに日本人の爲替取組を以て唯一の能事とし、幾んど他事を顧念せざるもの丶如く然り、即ち企業、金融、土地の三者に小資本家を援けて以て大に其の驥足を伸ばさしむべきもの、新たに大規模の起業會社を創設するの外なき也。

吾人は敢て小資本家といふ、然り、大資本家は多くは怯懦にして進んで事を營む能力に乏しきも、小資本家は勇敢にして進取の氣象に富めり、否、勇敢進取するに非ざれば小資本家は能く生存し得ざるのみ、楊子江流域の廣大なる處に我が利權を完全に樹立せんと欲せば、素より此の勇敢にして進取の氣力に饒かなる小資本家を保護し活躍せしめざる可らず、單に大資本家のみにては十分に事業を經營するに足らず、大資本家は寧ろ背後に在て以て小資本家を保護すべきのみ、吾人清國に於て日本人が一のジャーデンマヂソン會社を有せざるを遺憾とす。

近時内地に於ける企業熱頗ぶる盛なるも、曾て南清の富源を開拓せんとを企圖せしものあらざるは何

ぞや、吾人は思ふ、楊子江流域及び廣東河流域に於て、大に富源を開發せんと欲せば、少くも南滿洲鐵道會社と略々同等の額を以て、即ち一億圓以上の資本を擁する大會社を創立せざる可らず、吾人茲に於てか國家に希望する所なきを得ず。

我が國民が多くの利益なき滿洲に往くは、主として南滿洲鐵道あるがため也、是れなければ恐らくは多く往くものなかるべし、故に楊子江流域及び廣東河流域の如き豐富なる地方にも、南滿洲鐵道會社の如き國家の保障を爲すものあらば、其の十分に成功すべきや瞭として火を視るよりも明かなりとす、

【六】

吾人は國家に望むの序を以て、更に我が南清艦隊の擴張を望まんとす。

商業は多く軍艦旗の下に發達す、軍艦旗の在る處多くは商業あり、是れ歐米人が幾んど不磨の格言と做す所のもの也、殊に清國人の如きは軍艦旗を望見して其の國威の大なるを想像するの常にして、僅かに一隻の自國軍艦あるがため、物貨の賣行平生に二倍し三倍すると珍らしからず。

眞に我が國の商工業をして南清地方に活躍せしめんと欲せば、國家の保護を要するは素より論なく、南清艦隊の擴張の如き亦實に其の一たらずんばあらず。

思ふに國家經營の點より南清艦隊を今の如くに止むると洵に餘儀なき所なるべし、然れども將來永遠の計圖を打算せば、淺吃水の砲艦を多く製造して、遠く長江の上流に溯航せしめ、本支流沿岸に於ける重要なる開港場には、幾んど我が軍艦旗の影を絕たしめざると、經世家の必らず同意する所なるべし。

趣 味 論

（一）

甚だしい哉今の我が國民の趣味の下れるとや、渾厚雄大なるものは輕薄孱弱となり、瀟洒飄遠なるものは卑俗下劣となれり、蓋し舊趣味亡びて新趣味未だ興らざるが故か、抑も又國民の氣象漸く低下せるか、吾人は今其の卑近なる二三を指摘して以て汎く反省を促すの太だ無用ならざるを思ふ。

（二）

吾人の祖先の趣味を査するに、多く文獻の徴すべきなく、僅かの二三の美術建築に就て其の一端を彷彿するに過ぎず。

蓋し奈良朝の建築、彫刻諸技は、主として之を唐より傳へ、而して唐は支那古來の技術に加ふるに、所謂希臘式印度式を以てしたるが故に、意匠多くは雄大渾厚なりき、隨つて我が奈良朝の趣味は雄大渾厚なりしが如し、古都の佛寺佛像は即ち其の證にして、正倉院の御物また然らざるなし、之を歌謡に視るも萬葉の雄渾なるは、到底古今千載の整齊なるも而かも狹小なると同一に談ず可らず。

平安朝に至て、趣味は一般に純日本化したるが如きも、其の趣味や整齊、優美、精粹、巧慧に於て勝さるも、雄大の風氣は幾んど視る可らず、藤原式の清麗なるも、而かも天平式の雄大なるに及ばざるは其の徴ならずや。

鎌倉時代、室町時代に至ては更に降れり、江戸時代に至て更に甚だしく降れり、之を江戸時代の諸美術に考ふるに、技巧の妙殆んど前古を壓して、整齊粹美盡さゞるなきも、然るも雄大渾厚の風は全く覩るべからず、鎌倉時代及び室町時代には宋と屢々音問を通じて僅ほ多少大陸の風氣を受け、而して織豐兩氏より德川の初世までは、南蠻より遠く西歐とも交通して、人心の雄偉なる、時に宇宙を吞吐するの槪ありしも、一旦鎖國主義を執りて太平を謳歌せる以來、玆に益々純日本化して一般の趣味は整正、粹美、淸麗を主として、而かも悉く其の頂點に近きまでに進步し得たりと雖も、氣魄の雄大渾厚なるものに至ては、索然として全く盡きたるに似たり

〔三〕

明治時代に至ては、一切の舊物を破壞すると共に、整正、粹美、淸麗の殆んど極致を得たりし江戸式をも擧げて粉碎し盡したるも、然るも新式未だ成らず、遠く歐米の文物を吸入せるも、而かも其の氣象の渾厚雄大なるものは多く之を傳ふるに至らず。

玆に於てか一般の趣味は、雄大より淸洒となり、淸洒より卑俗となりて、今や殆んど見るに足るものなし、否、滿目俗惡にして嘔吐を催ふすべきものゝみ。

〔四〕

近時紳士淑女にして茶の湯に耽るもの少からず、其の主客双者相對して娛み、若くば三四五六のもの相接し相語るの興は乃ち之あらん、然るも全家族若くば多數の知人相會して談笑するにはあらず、僅か

に禮法の末節に拘々として窮屈氣につゝましく相向ふのみ。記せずや、茶の湯の弘く行はれたるは戰國時代にして、當時の諸將多くは廣漠なる山野に滯陣し、若くば百疊敷二百疊敷の大殿に起坐して、興趣の索然たるに辟易し、自然に四疊半の茶室に籠り、一輪の花、一縷の煙、苦茗を喫して以て閑寂を娛みたりしものなることを、當世の紳士淑女等平生六疊八疊の狹苦しき室中に蹲踞し、猫額大の庭園を眺めて、而して四疊半の茶室に茶事を樂むと稱す、偶々以て其の氣魄の古人よりも遙かに矮小なるを示すのみ。

〔五〕

我が國民の一般に嗜みて、殆んど國民的樂器の如くなれるものは實に三味線なり、而して聽け、其の音調必らずしも單一ならざるも、而かも低小にして多く聽くに堪えず、僅かに四疊半の爪彈か、又は六疊八疊に微吟の友とするに適するのみ、是より稍々上品にして且つ音高き琴と雖も、到底十人以上にて聽くに適せざるもの也。

其の謠ふ處も亦多くは咽聲鼻聲の混淆にして、殆んど一種の低吟のみ、四疊半、六疊、八疊、十二疊には適せん、少しく多人數の聽くものとしては甚だしく不適當なり、長唄然り、清元常盤津然り、越中最も然り、僅かに大薩摩の稍々歐洲の歌に類するも、唯だ一曲一調のみ、五分時間以上に渉ることなし。之を歐人が直ちに腹肚裏より迸出する高音を以て謠ひ、ピアノ、オルガンの如き雄大なる聲調を好むに比すれば、其の趣味の細小なる、殆んど月鼈の差あるにあらずや。

〔六〕

近時譜紳の好んで建築する家屋を見るに、門戸亭榭多くは田舍源氏式を理想とするもの丶如く、德川氏末造の大奥に於て用ひられたる庭園亭榭を作りて、其の式大抵は待合茶屋的なり。

希臘印度と秦漢の諸式を集めて一體を爲せる唐朝傳來の天平風の如き、宋元禪僧の風を模したる鎌倉式江戸式の大名家屋の如きは今の譜紳の夢想せざる所にして、唯だ狹小なる多くの客室をヤ丶コマしく造るのみ。

其の趣味の少にして而して卑き、寧ろ嗤ふに堪えたりと謂べし。

〔七〕

今や富豪及び富豪に阿附する人々の間には、書畫骨董の流行頗ぶる盛なりといふ、然り、吾人は敢て流行といふ、未だ嗜好と看るに至らざれば也。

憚かりもなく之をいへば、彼等は未だ芳崖の眞價をすら認むる能はず、僅かに容齋、海屋の名を喋々し、或は文晁、應擧、探幽、光起より、遠くは雪舟雪村を好むといひ、甚だしきは唐宋人の筆跡を嗜むと稱するも、其書品の巧拙、書格の高低をすら知らず、僅かに落款の眞贋をのみ心として、苟くも雪舟探幽の眞作といへば、其の作の風庸見るに足らざるも亦千金萬金を惜まず、之を高く揭げて揚々得色あり貫之定家の式紙といひ、利休の炭斗、遠州の柄杓といひ、若くは何々の彫刻、何々の銅器といふ、必らずしも風韻あるに非ず、雅致あるに非ざるも、唯だ其の異物の世に少きを誇るがために、乃ちまた爭

ふて之を求め、求めて而して之を誇示す。
其の趣味の俗惡なる、殆んど噴飯すべきのみ。

〔八〕

古の藝妓は、其の風姿の婉にして粹なるを欲し、意匠慘澹、時に千金を一擲して顧みざりしといふ、今の藝妓は比較的に妖艶なるものならんも、其の姿態の婉にして粹なるもの〻如きは、物色するも得べからず、況んや貴婦人をや、又況んや貴婦人以下の一般婦人をや。

然るも彼等の多くは其の服裝姿態を華美ならしむるに冷淡なるものに非ず、彼等は古人の夢想だもせざりし金剛石、紅玉、猫眼石等を身邊處々に煌々たらしむるなり、西班牙の紅脂、巴里の香水を用いて以て其の嬌姿冶容を裝はんとするなり、彼等は之がために換言すれば煌々たるもの、芬々たるものを得て以て其の火の如きヴアニチイを滿足せしむるがため、十年獻身したる神聖の敎育界を去りて、成金の株屋に嫁したるあり、然るも看よ彼等は胸間に金蛇の蜿蜒するが如き時計鎖りを纒ふにあらずや、左右の指には光輝燦然たる多くの指輪を穿ちて、雙手の覓に百指千指ならざるを恨むが如くなるに非ずや、其の提ぐる處の嚢、携ふる處の傘また又悉く金光銀光を放ちて歩一歩殆んど金瓶銀瓶の動くに異ならざるに非ずや、然るも彼等は單に斯の如きに甘んぜず、盛夏一衣を襲ゆる倘ほ堪えざる時に方ても、手袋を穿め襟卷を絡ふて倘ほ足らずとするに非ずや。

然れども其の婉にして粹なる婦人の嬌態に至ては、漠焉として覩る能はず、蓋し彼等が斯の如く高價

の物を多く身邊に蒐集する所以のものは、必らずしも婦人の婉容粹態を作るがために非ずして、唯だ其の所有の金銀珠玉襟簪手袋の多きを誇らんとするのみ、其の心事の賤しくして趣味の卑俗なる、全く嘔吐すべきのみ。

〔九〕

近來出版の盛なる、前古未曾有と稱す、文運の隆盛之をして然らしめしか、然り、之れあらん、然れども細かに世上讀書の趨向如何を一考せよ。

今最も多く賣るものは、曰く成功の捷路を敎ふると廣告する書册也、曰く致富の要領を示すと廣告する書册也、曰く、男女互ひに歡心を得る所以を説くと廣告する書册也、曰く肉慾を恣にするに於て多くの害を去り益を受くるとを吹聽する書册也。

果して然らば、今の讀書子は、成功のためのみ、致富のためのみ、男女性慾を恣にせんがためのみ、唯だ是のみ、然り、唯だ是れのみ。

眞に娛樂として讀書し、讀書に依て遠く千年の昔に遊び、若くば心神の暢慰を得、若くば職業以外の智識を收むるといふが如き、高尙なる目的を以てするものは甚だ少し、是れ亦趣味の甚だしく卑俗する一の徵證たらずんばあらず。

〔十〕

米國人の趣味は多く金銀に在り、獨逸人は節儉に偏して、粗野に過ぎ、伊太利人は放縱にして卑猥に

に近し、若し其の趣味の卑俗なるを諷するがために、また卑俗なる比喩を以てせん乎、米國人は洋妾也、獨逸人は村婦也、伊太利人は莫連女也。

露國人は概して雄大也、然るも趣味と稱すべき程の多くを有せず、我が同盟國たる英國人に至ては堅實也、佛國人は洒落にして粋也、一は樸茂にして一は輕浮なるも、尚ほ雄大の氣魄を失ふには至らず、吾人思ふに遠く希臘羅馬の風尚より、近くば唐宋の嗜好を探り、更に露國の雄大、英國の堅實、佛國の粋美を交へて、其の長を取り短を捨てば、始めて尊ぶべき趣味を視ん乎、吾人は俯仰して轉々近時擧世の趣味の汚卑俗惡なるを慨すると深し、竟に叙して玆に至れるのみ、必らずしも一世を惡罵して快となすものにはあらず。



公論

大學論

福本日南

漢の陸賈高祖に對して陛下馬上を以て天下を取るも豈に馬上を以て治むべけんやといへるは千古の名言といはざるべからず。歐洲の學者亦之と同様のことをいへり。名はしかと記憶せざれど、劍よく百國を拂ふも想なければ塊然たる頑鐵のみといへり。一國を經紀するも文明を增進せしむるも畢竟國民の思想如何にあり。殊に今日の世界はフイリップ二世の世界にあらず。那翁一世の世界にあらず。國民國をなすといふ世界なる以上は國民の思想を能ふ丈け暢達せざるべからざるは論なし、何れの國に於ても大學を必要とするの理以て見るべし、想の發揮者は講座也、想の傳播者も亦講座也。而して其講座の集合が所謂大學也。政治にも外交にも法制にも經濟にも大學は愈々益々必要となれり。試に外政の上よりいはんか、他國を合せて之を自國に同化せしめんとするには必らず合せられたる國の人民の思想を合したる國のそれに同化せざるべからず。之れ古今同一のことなりと雖も、就中國民主義の發達し來りたる今日に於ては思想を同化するの一事其最も必要なるを見る。所謂パンアメリカニズム。パンゼルマニズム。パンスラヴニズム。などいふも畢竟此同化主義をいふ也。而して此思想を同化せしめんとするには、最高の智識を同化せしむることが必要中の必要事也。夫れ故に近古以來歐洲の諸國に於ては他國を占領するや否や其地に大學を作る。二三の例をいへば、英國が佛國の一部、ノールマンヂーを占領したる時は先づカンヌの大學を起し、西班牙が和蘭を占領したる時も亦一大學を起したり、最も近き例を擧ぐれば獨逸が佛蘭西よりアルサス、ローレヌを割取するや否やストラスブルグの大學を起せり。ストラスブルグに遊べる

人は知れるならんが、此二州を獨逸に占領したる當時にありては此地の人民獨逸に對して非常の敵愾心を有し機會あらば再び佛蘭西に返したしと願はざるものなかりき、然るに三十餘年後の今日に至ては氣風大に變はり、獨逸に於て之を維持すること左程困難ならざるに至れり、といふは、右のストラスブルグ大學に非常の力を用ひて、各種の分科大學を並立せしめ、二州の子弟の高等の智識を次第にゼルマン化せしめたるの致す所也。これ大學の外政上必要なる例證なりとす。

更に内政の上より見るも政治上に於ける大學の効用は毫も外政に於けるそれに減ぜず。否な啻に之に減ぜざるのみならず、一層著しき効果あり。那翁一世が蓋世の英雄を以て歐洲を席捲するに當て、普國は一時殆んど殘破し盡されたるといふもよかりき。其戰亂の眞最中に於て、殊に危急存亡の眞最中に於て、ホーヘンゾルレン家は宮殿を捨てゝ大學の校舍に充てられたる位也夫れ故に普は一方に於て那翁より本國を打くづさるゝ傍らに、其一方に於て本國を復興するの準備次第に出來つゝありき。結局普が佛に勝て今日の隆運を來したるの基因は多く大學の力也といふて可也。これ大學の内政に及ぼす効果の適例也。

獨り之のみならんや。一の政治主義を本國に樹植し行くにも又大學の力に俟つこと至大也。例へば英國に於て保守黨の子弟は大概ケンブリッヂに入る。ケンブリッヂ大學は恰かも保守主義を英國に普及する一大機關となれるの觀あり。之が爲めに保守黨の勢力自由黨のそれよりも優れたるの有樣となりしを以て、自由黨も之に恐れてロンドン大學を起したり。今日保守黨、自由黨の二黨を以て、英國の政界を兩斷して互ひに相下らざるも要するにケンブリッヂ、ロンドン兩大學對立の結果といふて可ならん。

以上は外國の例なるも、之を我國に見れば一層其効果適切なるを知るに足る。明治政府が所謂開國主義の國是を遂行し得て今日に至りしといふも、帝國大學を作りし結果といふて可也。思へ。維新の諸元老は漢高祖までには至らずとも、其幕下の韓信や彭越や、英布

や、盧綰に相當すべし。此等の連中が明治政府を立ては立てゝ見たるも所謂馬上を以て天下を取れるにて、取りし翌日より馬上を以て天下を治むる能はざることを痛切に感じたり。政治に法制に新智識の必要に迫られたり。是に於て大學を起して、此新智識を養成せざるべからざるに至りたり。帝國大學已に然り、其他の私立學校に於ても亦同一也。福澤氏の慶應義塾、大隈伯の早稻田大學、よし今日の如く充分にはあらざりしにせよ。福澤流のユーテリタリアニズム、大隈流のリベラリズムは確かに此大學によつて國内に傳播せられたるを疑はず。見るべし、大學の外交内政其他經濟等に及ぼす影響の大なることを。

人あり、往々帝國大學の弊を說く、慶應義塾大學の弊を說く、早稻田大學の弊を說く。成程弊もあらん、されど利は其弊に勝つ。若し此等の諸大學今日まで日本に無かりしとせば、日本の思想界は極めて幼穉にして極めて混沌なりしに相違なし。彼の學閥なるものゝ起て、官途を占領し、恰かも帝國大學一手販賣の觀をなせるが如きは予をしていはしむれば、是れ寧ろ自然の結果也。學閥を賞して成るべく學閥を作れとの意には非るも、同類相扶くるは人間の自然にして大勢上奈何ともし難き也。況んや前述の如く帝國大學なるものが今の所謂元老連の相續人を作らんが爲めに創立したるものなるに於てをや。故に帝國大學が學閥を立てゝ官途を遮斷することを潔しとせざるならば、宜しく之に對抗するもの、今一歩を進めていへば、之よりも優越なる民間大學を起して帝國大學が產み出す人物よりも遙かに優等なる人物をドシ／＼產み出すべし。三年五年、或は七年、若くは十年は過去の惰力によつて帝國大學が今日の地位を壟斷するやも知れねど、それに勝る人物が出れば結局之に座を讓らざるべからざる事となるべし。帝國大學を矢釜しく責むる暇あらば民間大學を一層盛にする方に力を用ひんことを望む。近頃早稻田大學などが年一年と發達して儼然たる大學の面貌を備ふるに至りしは誠に喜ぶべし。但し今日現存する位の大學の數にては不足也。日本國民多數の高等の智

議を發するに足らず。といふは今日の日本の社會は中央集權の社會也。政權は勿論、人物も事業も、富も資本も、學者も學生も皆中央に集中す。かゝる有樣にては眞に健全なる日本國民の發達を見るを得ず。又健全なる日本帝國の發達を見るを得ず。外のことは暫らく措き大學のとのみをいはんか。大學が已に中央に集中し居るを以て學者も亦中央に集中し居る。從て大學より身を起さんと欲するものは悉く笈を負うて中央に馳せ集らざるべからず。扨中央の生活は甚だ高價なる生活也。中央に子弟を留學せしむるは父兄の負擔甚だ重大也。若し一家の子弟三人とすれば、三人が三人皆中央に出して大學に入るゝ譯にゆかず、一人を入るれば殘る二人は中學程度て止まるといふ有樣は府縣到る處同一也。若しこれが其所在に於て手近く家より直ちに大學に通學せしむるを得ば三人が三人共に入學せしむること左程困難ならず、已に三人が三人共に入學せしむるといふ有樣となれば、其三人の朋友たるものも亦一所に大學に赴くことゝならん。故に若し相當の大學が、我國内に廿ケ所もあらば、大學の門より出づる學士の數は今日に幾十倍するならん。此點に於て予は地方分權を主張するもの也。成るべく多く地方に大學を起さんことを希望するもの也。

又近來歐洲に於て大學の社會に對する任務といふことがなか／＼矢釜しき問題也。大學其物は單に學生を製造するといふに止らず、大學として一般社會に利澤を及ぼすものならざるべからずといふ説が歐洲社會の輿論也。從て英國の諸大學の如きは近十餘年此方面に向て大に力を盡す如くなれり。其方法として地方を勸誘して幾多の團體を作らせ、大學より助教授乃至高等の學生を派出し、所謂巡回教授をなさしむる也。かくの如くして大學に就くこと能はざる中等以下の社會を導く也。之れが非常なる効果を奏し、婦人社會、乃至腰辨當流の小役人會社員、若くは勞働社會等に非常の利澤を與へつゝあり。現に英國の如きは本國を三分してケンブリッヂ、オクスフォード、及びロンドンの大學が之を分擔し、其學區の住民を導く也、從て巡

學校の生徒――生徒といへば語弊あるかも知れねど、巡回學校の學籍にあるものは數十萬に及ぶ。面白きことには近來は鐵道の工夫、炭山の炭掘、或は造船所の船大工などより立派なる技師を續々出すに至りたり。斯くの如きことは我國に於てもあらしめたきことゝ思ふ也。然るに現在の有樣にては大學の教授は恰かも山寺に御座る禪宗の和尙さんの如く、大學の中に立て籠て徒らに高い〳〵を極め込み、利澤を社會に蒙らしめんなどゝは夢にも思はぬやう也。かくの如くにして大學の社會に對する任務の濟むものか、濟まぬものか、學者先生に對して甚だ失禮なるも、チト考へて頂きたきものと思ふ也。

以上は我國の大學が大學として社會に對する任務を放擲し居るを責めたるなるが、今一つは學者自身が個人として社會に對する任務を怠て居ること也。米國大統領ルーズベルトがアイデアル、アメリケンを著はして盛んに此事を論及せり。其論旨に曰く、學者なるものは同じ國民の中にて智識の分量を多く授かれるものにして、いはゞ智識の問屋なり。若し宗教的意味よりしていへば多く天惠に浴して居るもの也。問屋は物を卸さゞるべからず、天惠あるものは之を分たざるべからず、かくありてこそ初めて學者の學者たる有難さはあるなれ、若しこれなければ、カソリックの坊主が山寺に立籠りてバイブルを讀み、讃美歌を唱ふると同一也と罵れり。予も至極贊成也。見よ、今の日本の學者殊に大學邊のプロフェッソルの連中が天下の物識己れ一人といふ顔附にて、社會に利澤を及ぼすことを更に勉めざるの有樣を、尤もあんまり播き居ると、ヂキに種が盡きるといふ心配もあるべけれど……。

予は此問題について感ずる所あり、下手ながら、大學論、殊に大學の社會的任務の方面について、近々愚見を述べんと考へつゝあり。今は只大體の話に止め、餘は他日を期せんと欲す。

大己貴神と德川慶喜公

文學博士　上田萬年

去る三月官命にて出雲に赴き、松江より宍道湖を渡り、杵築に住きて出雲大社を拜し、更に歩を返して伯耆の境より美保神社に詣て、それより歸途に就きたるが、此行昔時の出雲の歴史、文明等に關して利益を得しこと少からず、頗る興味を覺えたりき、中に就きて大社の祭神大己貴の神の御上を研究し、その御事蹟を近代の歴史に求めて著く德川慶喜公のそれに似るものあるを感じたれば、玆に一言その點を語らんと欲す。

日本の古史を按ずるに、その文明には三個の中心點ありしが如し、第一は出雲第二は大和にて第三は日向なり。歴史に徵するに右の中出雲が最も我日本の國家の經營に重要なる位置を占めたる如く、從つて、天孫が日向に御降臨あるに就きても、先づ出雲との交涉始まり、武甕槌神、經津主命が武力を以て大己貴神に協商せらるゝに先ち、早くも天穗日命等が出雲に下り、能く兩者の調和を試みられしことあるなど、その關係たる頗る古きものあり、更に出雲と大和との間にも、昔は拓殖上並に姻戚上の關係あり、今の山城、大和、紀伊などに幾多出雲族の人民集まり居りしが如く、それ等の原因より、天孫始めて日本に降臨せらるゝに當り、先づ第一に出雲民族との御交涉ありしやに思はる。

元來出雲種族は山陰諸國のみならず、北陸諸國にまて拓殖の手を伸ばし居り、從て前述せる如く今の近幾地方とも關係多かりしものにて、その勢力たる頗る盛大なるものありしが如し、大己貴神の御事蹟より見ても此神は武文兩道の神に座まし、諸國の諸神より十分敬意を表せられ給ひしを知る、そは現に葦原中國を親ら領すと言はれしこともある程にて、實際の權力を掌握せられし點は明瞭なるが、さるにも拘らず、天孫の御降臨に當り、高天原より數回の御交涉あり、最後に武甕槌、經津主兩神の御交涉あるに當りて、その御

事代主神と御相談の結果、干戈に訴らず全土を天孫に奉られしの一事は、如何にも清く高く、潔き御性格を仰ぐを得、此點實に最近の歷史に於て、德川慶喜公が、六百年に亘る幕政を一朝にして抛たれ、三百年の長き德川の政權を返上して王政復古の大事業を翼賛せられしに酷似せり、此清く高き御心事によりて幾百万の生靈は當にその赴くところを知り、余生を幸福に送り得たるなり。

此大己貴神の御國讓りの御事蹟を仰ぐに付け、吾人の更に切に感ずるところは、素盞雄尊以來御事蹟を仰ぐに付き吾人の更に切に減ずるところは、夫の天孫種族は正しく出雲種族の正系にして、天孫の此日本を御支配あらせらるゝは遂に爭ひ得ざる道なること深く信じ來られしによると信ずる點なり、恰も是れ皇室の尊嚴なることと朝權の尊ふべきことを、水戶家數代の歷史によりて熟知せられし慶喜公が、能く維新の際に處して進退を誤られざりしと同一ならんと思ふ。

更に興ある點は此德川家に對して明治の朝廷より優遇を賜はれると同じく、我日本の帝國は上古に於ても彼の大己貴神の子孫に對して最も優遇を極められたる一事なり、例へば神武天皇綏靖天皇の如き、孰れも此大己貴神の子孫に當らせらるゝ方を皇后となし給へるにて、實に皇室とは深き重き關係を維持せられたるなり、之を裏面より察すれば恰も後世の公武合體にも似るものにて、日本の統一上當時の政略上又已むを得ざりしこととなるやも知れず。

されど此政權返上といふことは、偶ま大己貴神と慶喜公との類似を示し、帝室が等くその子孫を優遇あらせらるゝ點の類似を示せるものなるが、その事實の巨細に亘りては全然別種の見界に立たざる可からず、即ち稍詳言すれば、德川幕府なるものは決して當時の出雲政府と一概して見るを許さゞるなり、此點は尙ほ別に詳述を欲すれば此處には省いて言はざる事としぬ。

之を概括するに、大己貴神も德川慶喜公も、一に國家の大道によりて進退を定められ、民衆の幸福のみならず、皇運の伸長に消極的に奏功せられたる點は、吾

人の中心より敬慕して措かざる所なりとす。(文責在記者)

迷信の排除に就いて

文學博士 三上參次

人智の未だ開けざる時代に在りては、人々に迷信多かりしこととまた言ふをまたざるなり。試みに我邦の史を繙けば其災祥の記事の極めて多きに驚くべく日月の蝕、星辰の變、雷震、風雨草木、金石の妖より珍禽奇獸の出現の記事に至るまで、應接に遑あらざるを覺ゆるなるべし。その中には我が大和民族固有のものも尠からざるべしといへども、支那思想の傳來するに及びて、愈その熾を加へたるものなる事もとより論なし、支那に於ては漢書の天文志五行志を始めとし歷代の史書に陰陽五行の志無きはあらず、以てかゝる風習の如何に强大なるかを知るに足らん加之佛教の東漸もまた我が國民の迷信の度を加へたるにより、遂に極めて錯雜多端なる迷信の社會を現出するに至れるなり。されば大寶令の制定あるに及びては天文陰陽の事には陰陽寮を置かれて專ら之を司らしめ、其外災祥の事に就て特に規定せられたる個條の少からざるを見る。それより奈良時代平安時代を經、武家執權の時代に至りても辛酉革命、甲子革令の年は云ふまでもなく、苟くも災祥あれば即ち年號を改められ、種々の儀式作法の行はるゝことの衰へざるを見る。されば天變地異、疫癘、水旱戰爭はもとより、釜の鳴り、狐の啼き、一木の倒れたるに至るまで、之に心を痛め、之を祈攘して以つて災禍を避くるを務め殊に僧侶の此風を煽揚せるに由つて、我邦は千數百年の久しき間、殆んど御祈禱の世界と成り了りし狀態なりき、されば其久しき間の我邦の政治、法律、學問、藝術、風俗等に至るまで多くの方面に於て、この迷信の影響を受けたること、一々數ふるを得ざるほどなり。西洋に於てもまた迷信の著しく盛んなりし時代はありしなり、梟の鳴き聲に怖ぢ、流星の飛ぶを畏るゝ類はもとより多く、勇敢なる大將の

率ゐたる軍隊が日蝕に驚いて解體したることあり、耶蘇紀元の一千年といふ年には世界は滅亡す可しと云ふ迷信によりて、歐洲全土に恐慌を來したる事もありき、乍併近代となるに從ひ斯くの如き傾向の漸次減少したるは明瞭なる事實と云ふ可し。

王政維新後、我邦の文運は大に開け、就中科學的智識の著るしく進歩したるに由り、國民一般に信迷の度の減じたるべきは云ふ迄もなし、殊に敎育の普及は就學兒童數の割合の多きこと世界の孰れの國にも劣らざるに至れるを見ても其然るを察すべきなり。されども千數百年來迷信の積習の强大なるがため敎育の普及科學的智識の進歩割合には世上に尙悲むべき悯むべき現象の多きを見、或る場合に於ては却つて迷信の增加したるやの感さへあり。卅七八年戰役の如き大なる戰爭のある場合などには殊に然り、蓋し一個人に於いても、相當の敎育を受け修養を經たる者なりとも、非常の災厄に遭ふか、若くは重病に罹りたるなどの場合には、著しく神經過敏となり又其衰弱に陷り遂に迷信に傾く者尠からざるを見る、國家社會もまたこれと同様にして、國家の存亡興廢に關するが如き時機に際しては、國民一般に大なり小なり神經過敏若くは神經衰弱の狀態に陷る可し、故に平生冷靜なる時にありては喜ぶ可からざる事にもかゝる場合には喜び、憂ふ可からざることにも憂ふ、是に於て東鄕日和、上村濃霧などの語あらはれ又軍艦に鷹のとまり、鶴の鷄を育つるを見ても其緣起を祝ひて特に之を喜ぶ、故に之に反して少しく不祥なる事あれば其過度に之を悲觀するに至るなり。國家としては空前の大戰に從事し個人としては百萬の壯丁、命を輕んじて敵に向へり。全國民の心配懸念よりしてかゝる現象を見るに至るはまた已むを得ざるなり

かく三十七八年戰爭の中に、人々の迷信は頗る助長せられたりやの感あり、即ち人々日常に談ずる話柄、新聞、雜誌、電車内の諸般の廣告、さては新聞紙上の記事を見ても、祈禱、禁厭、卜筮、五性、六曜、九星方位等の事の著しく目に觸れ耳に入るを覺ゆ。中にも

顯著なりしは昨年に於ける丙午の年の觀念なりき。丙午の年を忌むの習は、隨分古くよりありし事にて、しかも有力なる根據ある說には非ざるなり、或時代には申年を嫌忌したることもあり、「年申にあれば常に事故あり」と云ふ標題の書籍さへありされども申年必ずしも事變の多からざるは史を見て明なるべし。昨年の丙午には海外諸國にありては大地震の起りたるところありしも、是れ丙午などの觀念の皆無なる外國の出來事なり。また丙午の年は火災多しと恐れしも、一年統計上平年と格別の相違なかりしと聞くに至つては事實上その迷信を打破したるものと云ふ可し。然るに丙午の迷信はこれに止まらずして、結婚、出產等の上にも著るしき惡影響を及ぼしたり。即ち丙午の年の出產を忌みて昨年出產の屆出をなすべきを故意に怠り置き今年に至りて屆出を爲したるもの尠からず、と噂せらる、甚だしきに至つては、丙午の年の出產を忌みて由々しき罪を犯し、刑辟に觸れたる者さへありと傳へらる。迷信の弊害も茲に至つて極まれりと云ふ可し。この丙午の事に類似したる迷信は庚申の日に就いても古來よりあり。これも亦支那の道家陰陽家などより出でたるものにて無論無稽の說なれども現今に至りても尙その迷信或る社會或る地方には行はると云ふ。また年齡の四年違ひと云ふこと、或は合性の良否、若くは寅年なる事等の迷信より、幾多の士女が其良緣を妨げられつゝあることと全國を通じて如何程ある可きか、又は六曜の說に基き日に吉凶ありとの迷信より、人事の進行を妨げ、人々に煩悶を與へ、引いて社會の原氣を殺ぎ生產力を減乏する事の莫大なる實に驚くべきものあり之を數字を以つて表示したらんには、全國を通じての年々歲々の損害は甚だ大なる數字を以てあらはさるゝこととなるべし

斯る迷信は國民敎育の普及のみにては之を撲滅せんこと覺束なかる可し。學校敎育に於いて之を禁止せるも、社會は却つて之を助長するが故なり。蓋し千年の久しき因習と複雜なる人事とにより、社會はかゝる狀態にあることとなれば、各方面に於て最も之に注意せ

ずんば除き難き弊習なり。勿論多端なる迷信の中には自然に人々の警戒となるものあるべく、或は自然に道理に合せるもあるべし、即ち家相方位等諸說の中には自から日光の受け具合、空氣の流通等に就いて衛生家の所說と一致することもあるならん。また警戒となるとは、少年客氣に乘じ或はたゞ一時の感情に馳せて、輕擧妄動せんとするを卒然六曜九星方位等の說によりて牽制せらるゝ如き場合を云ふ。かゝるとは、歷史上にも多くありし事にして、昔殷の湯王は天下久しく雨降らざりし時、六事を以つて自己を責めたりしことあり。我邦にても東山の將軍塚の鳴動、多武の峯の大職官像の破裂、春日の神木の枯倒多田院の鳴動、曰く何、曰く何と是等の出來事は上は天子より下百官に至るまでに警告を與へ之をして反省せしめ以て德を修め政を正うするの機を得しめたりき。今日の迷信の中にも幾分かはこれに似たる利益の有るもの無きにしも非ざる可し。されども人智の開けたる現代の社會にありては、斯る方法に賴らずとも他に反省克己の手段は有る可し、縱然一二の利益ありともこれによつて今日の如く。迷信弊害の多きを默視すべきに非ざるや勿論なりとす。

されば迷信の弊害に就いては、古人も之を論じ、今人も心ある者は屢々論議するところにして國定小學教科書の修身書にも、特に迷信を戒むる一章を設けたり、則ち御祈禱のお神酒德利が信心の功德によつて動くと說ける山師あり然るに風の爲に顚倒したる德利の中より鼠が出てたるがためにその正體を見あらはされたりとの話を揭げたり。併しこれ位の敎訓にては、滔々として陷りつゝある迷信より社會の多數を救濟するは難し六曜、九星等に心醉する者はます〳〵増加するのみ。加之彼方の○○、此方の○○、甚だしきは木石を信ずる等の事も維新以前に逆行するが如き傾向ありと思ふ。衛生思想の進みたるに由つて、お水を飲むこと、賓頭盧尊者を撫づることなどは傳染病に罹るの虞ありとの說にてやゝ見合す人多きも、回向院なる鼠小僧の墓の、相變らず香華にて埋めらるゝを見ては何と

許して可なるべきや。

斯の如き迷信の弊害はあらゆる手段を講じて是が撲滅を計る可き筈なるに、社會の木鐸を以て任ずる操觚者流などが却つて之を助長するが如き傾向あるは歎ず可きことなり。そは新聞紙の第三面には間々散見する事なるが、殊に新年の初刷には、如何なる大新聞にても年の丙午とか丁未とかに就いて、或は之に因める繪畫を挿み、或は之に縁ある詩歌文章を載せ或は之に關する迷信の過去の事實をば事新らしく吹聽して世人に示すと常なり。故に、年の干支の事などは相當の讀書あり、若くは相應の年輩の者にあらざれば之を談ずる必要もなきものを新聞紙が一般に世人に紹介するを以て迷信の火の手を煽ること少からざるべし。また些細なることなれど、露國の議會にて議場の天井が落ちたりとて、是れ抑も何の兆ぞやといふが如き筆法の記事は珍らしからぬ事なり、文章の修飾なりと云へば夫れまでなれども、斯くの如き筆法が度重なれば冥々裡に迷信を誘ふ媒となるものなれば注意すべき事なり。今この、年の干支の一事に就いて云ふも、是れ歴史上の詮索には極めて重要なることなれども、現今の日常の事に於ては何等の用なく、單に昔よりの習慣の遺物たるに過ぎず、たゞ幾分か文章上の飾り文字たる外には、年月を記錄するにも不要、人の年齡を云ふにも不要、社會人事萬般の事に於いて殆んど全く不必要なり。予は日常思ふに、古人は一つの名の外に、字、號、通稱、など多くの名を有するが故に頗る不便なる事多し、今人にても號は之を有する人多し、この變名は或は文藝上に多少の必要あるやも知れざれども、要するに大體に於ては無用のものなり。今日の世に、干支を用ゐるが如きはそれに比して、更に一段有害無益のことたるなり。冀くば新聞紙なども來年は戊申の年に當ればとて申に因める繪畫、詩歌文章を蒐錄するとを全廢せざる可からざるなり。小學校に於て迷信の不可なるを數ふるも、尚小兒の事なるが故に生死、婚姻、其他複雜なることは示しがたし、而して軈て社會に出づるに至れば社會は之に迷信を敎へるなり。されば新聞紙の如き利

器によつて斯る弊害を除かんと企圖するは、是れ實に社會の爲めに慶す可き事なる可し。其他宗教家の説教等にて之を戒むるは勿論、…… 若し迷信によりて利益を得んとするが如き宗派ありとせば、特に注意を拂はざるべからず……また講談、落語をはじめ寄席の興行場、乃至演劇、等に於ても此邊の注意を要す可く、或る場合には行政上の監督を之に加ふる必要あるべし。是等の點に就ては他の諸般の事と同じく社會教育と學校教育と相待つて、功果を擧げんこと吾人の切なる希望たるなり。

古來迷信の盛なる時は於ては、之を利用する事尠からず、彼の鹿ヶ谷の陰謀にて、瓶子の仆れたるを平氏倒れたりと慶し、また彼の桶狹間への出陣に際して信長は熱田神宮に詣り、神官をして、鎧を内陣に鳴らさしめ、神助ありと稱して士氣を鼓舞し、豐太閤は征韓の途次嚴島神社に詣でて、百文の錢を投じ、皆表面を現はしたりとて神力の加護を示したる如き、是類の事は古今東西の史乘に其の例少からず、軍艦の雲鷹の如きも亦其一例なり、時にとりての妙策にして、大に嘉すべきことなり、しかもその根本を論ずれば是亦迷信を助長するに當る、一般に教育進みて迷信を減じ、喜ぶ可らざるに喜び、悲しむ可らざるに悲しむが如き事のなきに至るをこそ希ふべきなれ。

先に云ひし如く、人若し病に罹るか又は其他の災に遭ふときは神經過敏若くは衰弱に陷り、萬事に心を痛むる事多く、從つて迷信に傾き易きと同じく、社會全般が神經過敏に陷りたる時には、天變地妖しきりに臻るを感ずるとあり、近く我邦にては德川五代將軍綱吉の晩年、またかの田沼時代の如きはその一例なり。要するに個人としても社會としても斯る悲む可き狀態に陷る時には、進んでその災害を除去せんとする志氣は消耗して、徒らに退嬰策をのみ講じ悲觀に陷るものなり、而して迷信は斯る際に乘じて最もその力を逞うするものとす。我邦今日の如きは、戰勝の後をうけ、社會の各方面、ともに最も活潑なる時代にして、殊に人智も開けたれば、天變地異、珍禽奇獸の出現に驚き、

草木金石の妖を氣にするとは流石に減少したれども、五性、六曜、九星、方位等の稍々高尚らしき迷信は、減退せざるのみならず、却つてます／＼増加するの傾きあり是れ抑も何の兆ぞといひたき位なり。之が爲めに種々の弊害の續出するを見て茲に殊更らしくも、新聞記者を始め社會の先覺者社會教育に關係ある人々の注意を乞ふ次第なり。（完）

右は三上博士の談話を筆記し、博士の校閲を經たるもの也

次號の本欄には

新渡戸稻造氏
金子筑水氏
安部磯雄氏

等に寄稿を依賴したり



佛國南北の優劣

『ダス、エコー』

ハンブルゲル、ナハリヒテン紙は其巴里通信中に下の如き興味ある觀察を爲せり、事は佛國の南部が北部に卓絶せるを論じたるものにして、其要に曰はく、

彼の急進主義、一度パーンを出してより南方佛蘭西は一國の牛耳を執るに迨る。而して南人の手中のものとなりたる該主義は遂に今日の形式を採るに至れり。十年以來は、南方の天下なる一語を以て盡く、かの南人の出なるアルフオレス、ドーデは其作物ヌーマ、ルーマスタンに於て此語の語る所を遺憾なく豫言的に描出し盡せり。當時渠が南方と爲せる所は言ふ迄もなくガムベタを指せるものにして、今日のヌーマ、ルーマスタンはルツオンに外ならず。ドーデは又タラスコンのタルタランを寫

出して躍然たらしめたるが、タルタランは現今佛國の主權者なり、數年以前より政治上に勢力ある地方新聞ありしが、當今も尙存す、而して其勢力頗强盛にして、遙かに首都に於ける他の急進黨の諸新聞を凌ぐものあり、即ちトロースの「デペッセ」是也。該新聞は南人の地方性の發揮に貢献する所實に尠少ならずペルタレ、クレマンソー、ジョーレ、パピヤニ等は各筆を馳せて雄を該紙論壇に唱へたるものなりき、或は唱へつゝあるものなり。現に主筆モーリス、サローの同胞アルベルト、サローは內務次官をして、政治に於ける同黨の代表者たり。世人は、デペスセ紙が巴里に送來りし時、政府內に起りし事を該紙に依て始めて知る事を得べきなり。輓近の大統領が二人まで南人の出にして現內閣の大臣の多くが拉典人なる事は偶然にして而も爭ふべからざる事實なるは奇なるが如くにして大に所以あり。即ち南人の雄なるものを擧げんかフエリー、フオールは、?、アープルに、現廷の反對黨の首領リボーはパー、ゾカレー。メリヌはボゲーゼンに出でたるものなり。之に反しかのバルデック、ルーソーを一瞰したるコムブはカステルの一村落に於て初めて世の光を見、ジョールは實に此村即アルビゲンセル地方に産れたるものなり。固より急進黨と溫和黨との對峙せる地方に劃然たる地理上の境界線を劃することは困難なりと雖。クレマンソーはベンデキルの人なり。而して渠が千八百八十五年以來バール州の州會に於て代議士たりし事は閑却すべからざる事也。バール州の首都は實にツーロンにして渠今や此南方の州に於ける長官たり。ブリアンはブレトン人にして渠の政見、渠が政策は世人の普く知るが如く、進退度に適ひ、鄙平にして中和を得たる政見は南方の非敎會派に對峙して防禦の地位を占むるものなり。

ツールース、アルビ及モントペリー、アビグノーン出の如是佛蘭西人は數世紀の昔より血を以て爭へる宗敎的の爭鬪中にあるものなり。アビグノーンのパプストブルグは目前にありて、モント。フオートのシモンは彼等の小兒時代の譚を充たすものとなれり。彼等の拉典風の精神敎育はあらゆる問題を絕對を以て解決すべき由を以て强ゆるものなり。何者と雖之が解決を下すに南人の裁斷は水の流るゝが如く其明日月の如く明かにして、其性は熱烈直截なり。從つて著しく確乎たる計劃を樹つるよりは沸騰又激昂の末事を處す。渠等に在つては物其平を得ざる時は遂に耐ゆる事能はざる也。南方佛蘭西の非敎會黨はコムブの時代以後內政に證印を捺し、コムブ時代以後熱烈なる南人の政治的風習は制可せられたり。世人はコムブ內閣が其在野黨に對しては、プロバンス、ランゲドックに於ける撰選に際して採用せし政策を以て臨みしことを記するならん。又世人はコムブが演舌の頗辛辣にして反對黨を挫伏せしめたることを知るならん。過ぐるツルース、マルセイユの各部に於ける撰擧の際に世の知れる所は、狡計奸詐及之に類似せるものも政敵を推審し得れば即ち正當を以て目せらるゝものたるの一事也。以前は政敵の文字を用ゆる事を憚るが如くなりしが、今は殆んど通則の如くに用ひらるゝに至れり。モントペリエに於ける溫和黨候補者に對する奇談の如きも南人の政治的風習を全然巧妙なるものたらしめたり。以前及現今の岡南人の觀察

は議會に於て漸く制限的と成れりといふ事は最早否むに由なかるべし。而して現今優勢なる急進黨は南方的の美看を呈せり。そは其表現に於て著しく平和的傾向を有せる事にして、南人は普佛戰爭に於て蒙れる打擊は實に多からず、故に國民主義は發育し、益ロアールは北方的に榮ゆ。然れども吾人の謂ふ所は、南人は矛盾の場合に當つて狂猛なる性質を全く棄却し去るものなりとの意にはあらざる也。

南北兩部の間に横はれる差異の最甚しきものは幻像の如き經濟問題の議論に關する一點なり。而も他の歐洲各國人は如是の問題は常に眼中に置くものにはあらず。其議論の一として或時火の如き南人は北人を呼んで蠻人と罵倒せり。北人は此「菻食」の凌辱には慣れたれば、冷笑を以て之を輕々に看過するを常とせり。されど南人が其經濟問題の要求を以て花むが如く絕對理想主義を以てするの危險なるを漸く覺知するに至る。ツユールーラムメートルは政界を去るや、嘗て此危險に付て語つていふ、北人は左乍ら厨僕の如く、南人が僅少の税を納付しつゝ專横を逞うするは實に忍ぶべからざるなりと。白耳曼系とケルツ系の混合より成れる北人は南人の成すが儘に任せ政治問題に關しては風馬牛たるの看なきにあらず、然れども北部の經濟問題はやがて現境を一變せしめて北人の勢力に幾許を添ゆるの機たらずとせず。



STOLYPINE'S DILEMMA.

MRS. DOUMA—"I want my hair drest and made up in the republican fashion." —*Kladderadatsch* (Berlin).

中央亞細亞に置ける三國の商戰

「パルマル、ケー」

此頃印度外務局にては我東洋諸帝國とヤルカンドとの通商關係に關する報告書を發布したるが、之は我英國商人に取りて大に注目すべき事項に富めり、由來此通商上の利益の地點は英露清三國の境域に位す、從て此位置よりして如上の三國は通商上并に政治上に於て力を振ふべき宿命を有す、嘗て四十年の昔ヤクブベグとなん呼る、好運なる一兵卒が、此支那の外廓たる地方に於て、自ら獨立の

者となり、英國の保護を得んとはしたり、かくて我英度政廳もその冒險者に好意の耳を假さんとなしき、當時露西亞は唯頻に西部土耳其斯坦を同化せんと勉め、支那も亦猶ほテイヒン反亂の瘡痍未だ全く痊えざるもののありたれば、若し天、禍祉を彼に降さんには、彼れヤクブ、ベグは實際中央亞細亞帝國を建設したるかは知るべからざるものありしなり、惜い哉、彼は餘りに北京政府の注視とその人民の捲土重來の勢力とを蔑視したる事や、果して彼がカシュガルとヤルカンドとを統御する僅に十年の後に、忽ち支那軍の爲に壓倒せられ折角得たる領域は再び西部土耳其斯坦に合せられたり。その後二十五年間は露國はヤルカンドに勢力を振ひ、吾人は之に甘んじ來りしが、今は我カシュガル駐剳官の管下に立ち、商業支所設置の地となれり。

千九百五年より千九百六年に亘るその報告を見るに、それには獨逸が中央亞細亞の商業に於て英露兩國の孰れをも凌駕せるを示す、以前には英斯科輸出の黑色の粗布がヤルカンドにて非常の需要を有したりしが、今はアマリッツアルに於ける獨逸商店より輸入する、同一織地の布の爲に壓倒せられぬ、獨逸のマゲンタの水晶並にアリザリン染色劑は斯かる遠隔の地に迄來り、斯くて曾ては好評ありし此地の絨氈類の實質をば痛く損ふに至れり、ボムベイを經て輸入し來る獨逸の黑天絨はあらゆる競爭品に打勝てり、又毛織の小布片物（こぎれもの）は之迄諸國にて競ふて此蒙古人を華客とせんとは勉めたりしが、豈圖らん長年月間耐忍して帝國の重荷を双肩に荷ひ來りしその圖を措きて、之も亦露國の掌中に落つるに至れり、唯吾人に取りて喜ぶべき事は、一には猶ほ我國にて依然大幅物の供給を爲すこと、次には英斯科輸入品が、價額に於て四五割分がたの勉強あるにせよ猶ほマンチエスター輸入品に賣り超さるゝこと、最後には露國製のハンカチーフが凡て我國の製品の爲に漸次に市場より逐はるゝこと之なり、ダマスクの織物は年毎に需要增加の形勢にあり、若しその製品にして唯耐久性の染色を用へば必ず露國品と競爭して遂には勝を制すべく、現在のものを比較するに露西亞製は痛く品質に於て我國の品に劣る、唯、一の利は洗ひの利く一點のみを、ヤルカンドは元來更紗の消費國なるが、その更紗の各種は多く英國の製造所にて成りたるもの、特に一部にギュジピチーと稱せらるゝ織物は最もその地に迎へらる、若しマンチエスター市にして獨のアムリッツアルなる商店の如く、企劃的精神に富むものに支配せられなば、その失へる勢力を挽回すること難からず、此れと同一精神の必要は更に印度における商業者に認めらる、彼等の想像力は唯彼等所有の一小商館内を出づる能はず、彼等は土耳其人一般の趣味の那邊に在るかを殆んど知ることなし、否全く知るところなし。又彼等の間には亞細亞は恰も西歐諸國に於けるが如く、能く流行を追うて移るの事實も、亦廣くは知られ居らざるなり、綿紗は白綿布より賣れ口能く、大羅紗は黑天絨に壓せらる、歐米を通じて現今瑪瑙の裝飾は餘り貴ばれざるも西部支那に於ては非常に高價を有し、此美き材料にて彼等の紋章を作るなり、之は多くボンベイを經て伊太利より輸入せらるゝもの、左れど濃橙色のものは彼等の官規に觸るゝが故に賣れ口惡し。

英國に於ける輸出貿易は、若し我倫敦にして中央亞細亞に於ける有望の商品に對し、今少く活躍を試みんには大に增大を見るべきなり、例へばアトラチャンスの名にて知られ居る黑山羊の皮は、ヤルカンドにては、一枚僅に一志にて買ひ得べく、豹の冬皮は實際無代價なり、唯ヤルカントにて僅に一磅の値を有するのみ、綠寶石(ジエード)は多く東部土耳其斯坦より採掘せらるゝが、太平洋岸諸州の支那官吏はそれにて作れる、指輪並に帽子用の羽飾留を買ひて、十磅より三十磅の價を拂ふに甘んず然るに千九百五年より千九百六年に至る一ケ年間その西部に送られたる綠寶石の價額は僅に三十五磅のみ、ヤルカンドより近きコータンの金鑛は英國の投資家には垂涎すべき好箇の鑛區なり、マッケー條約の條文により、支那政府は該帝國内における外國投資の制限撤去を試みぬ、事實に於てコータン金鑛は支那官吏の獨占に歸し居るを以て、同鑛より出づる黃金層の供給は十分需要に應ずる能はず。條文は一種の空文たるに過ぎざるなり、彼のウェールスの公爵が、同州人に與へたる記憶すべき忠告は、移して以て大に我中央亞細亞に於ける通商關係に適用すべし、露西亞は該地方に於けるその人民と、南西支那における土民との血族關係よりして、人種上の親和力に多大の利益を有す、莫斯科商民はタスケントにて需要する商品は熱心にヤルカンにて買はるべきを知る、されど英國の企劃幷に投資は、若し運用その當を得ば猶は優に敵手と商戰を挑み得、且つ如何なる市場にも自己の立脚地を確守するを得べし、我生產業者は宜く敵手獨逸を模範とし、力を惜まず地方の需要の在るところを察し、能く自己の商品をして時々に移り行くその國民の趣味に適合する圖るべきなり。



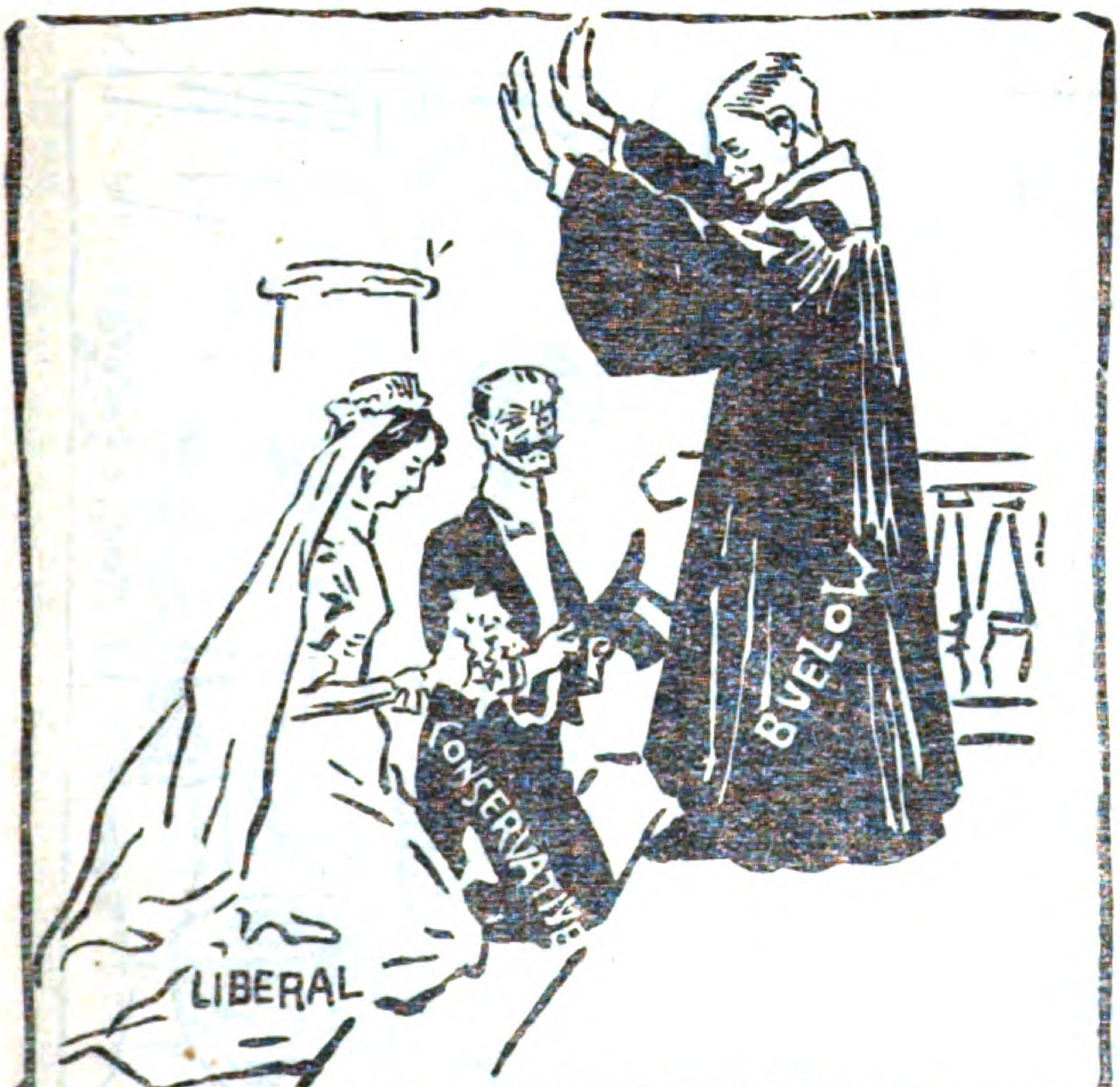
UNCLE SAM—"This tea looks very nice—I hope there isn't a head ache in it!"

—*Humoristische Blaetter* (Vienna).

獨逸の陰謀

『ナショナルレビュー』

現時の國際關係は外觀上頗る靜穩の姿なりと雖も、獨逸の總選擧の結果は大に衆望の皇帝に集まれるを證し、爲に全歐に不安の感想を與へたるが、更にテムプスの有名なる在外記者エム、タルディウ氏によりて、アルヂエシラス會議の內部の顛末公表せらるゝに及び、その感想は一層增大せられたり、ヰルヘルム街は陰謀の空氣中に活動し、生息するなり、されど、獨逸皇帝がその會議を、即ち若しも一蹉跌あらんか或は戰爭となりしやも知れざりし、その會議を不調に終らしめんと勉めたる秘密の暴露は、樂天家並に軍備縮少論者に對して痛ましき打撃を感ぜしめたり、獨逸が再び外交的冒險を試みんとし、斯くて列國を威嚇して一時の恬安を與ふる爲に、代償的利益を强奪せんとする、斯かる政略の歴々認めらるべき痕跡少からず、モロッコに於て彼は佛國に對し成功の見込なきものをも遂げんとは勉めぬ、若し特に溫和の態度を取れる佛國にして、その秩序維持の從來の事業を避くることあらんか、獨は直に文明の利器を擁して代りて浸入すべく、若し之に反して佛國が全歐の使命を果さんと欲し、ムーア人との戰渦に捲かるゝに至らんか、そは更に獨逸の術中に投るものなるべし、サー、ヘリー、キヤメル、バンナーマン氏の撤兵問題に關する異議ありしとはいへ、幸に英佛兩國政府の依然親密なる關係を保持するを得しは之れ甚だ喜ぶべきことなり、佛國海軍に於ける一大不幸、即ち偶然の爆發によりて軍艦エナ號の沈沒せし一事は、偶ま我國民の全階級を通じて、佛國に親み佛國を愛するの赤誠を示現する好機

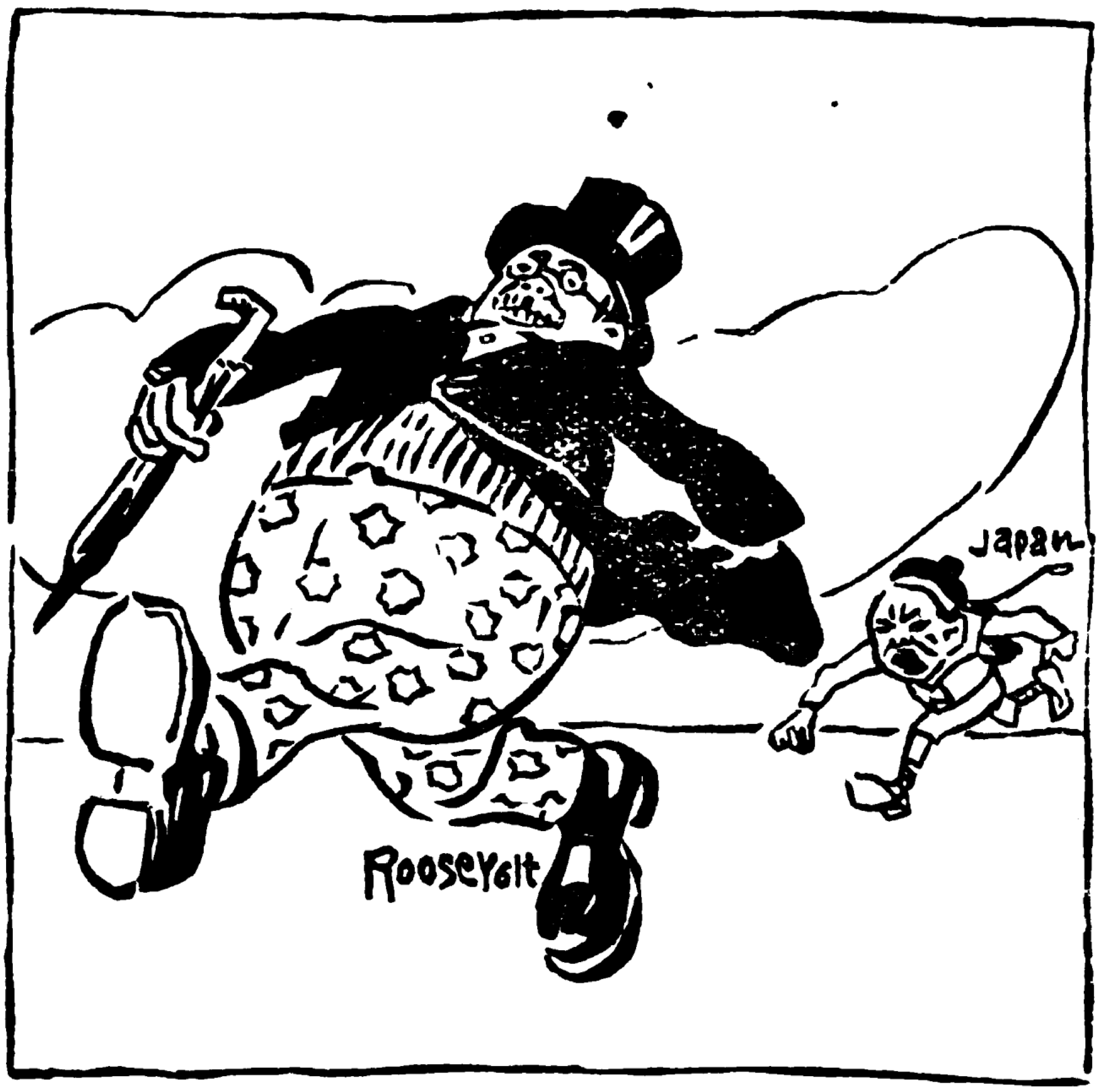


THE UNION.

BUELOW—"And don't forget that it is commanded that the wife should be subject to the husband, and obey him in all things."

—*Ulk* (Berlin).

會を與へぬ、世界の各處に於て獨逸の大演習あり、之れ吾人の注目を怠るべからざるところ、伯林議會にて、獨逸の南西亞弗利加に於ける唯一の目的英國の南亞政略に顚覆する未來の行動地を作るの一事なりと說明せらる、獨逸は決して疎漫なる設計に對して資力を空費するものにあらず、從つて彼等が僅に一擲に値するホテントツト人を鎭壓する爲め、斯かる望なき地域に大部隊の兵員を置く理由あるべからず、此ケープコロニーに軍用鐵道を敷設すること、或は、過多の兵器を輸入することは、如何にして全歐諸國の强大なる憂懼を解くべきか、更に又獨逸とスカンヂナビア諸邦との近接は速に發展しつゝあり、タイムスのパリス通信員の所報によれば、ウヰリアム二世は北境の隣接國をして他國に對してバルチック海を封鎖せしめんと誘導し、爲に天地をも振動せしめんとするものありと、他國とは何れを指すか、そは我英國に外ならざるなり、彼は又吾人に迫るに、彼が元來の畫策なる小亞細亞を貫く獨逸鐵道の敷設を以てし、特種なる解放主義の名の下に、近々英佛二國に向つてその案を提出せんとしつゝあり、そは我等兩國の共力に待たずんば到底經營し得られざればなり、バグダット鐵道はその名は如何にもあれ、遂には獨逸の軍用鐵道たり、又軍用鐵道として、未來に殘存すべく、而してこは他列强に對して炎禍たるを疑はず、這般の消息、吾人兩舌を以てする、猶ほ盡さゞるを覺ゆ、先づ彼が絕えず騷擾を起さんとて資財を投ずる埃及に於ける結果に見よ、サルタンがデーリー、メールを通じて、我英人に與ふる消息は、吾全近東政策に對して大なる警醒を與ふるものなり。



AN EXTRAORDINARY SITUATION.
The scholar has to chase the schoolmaster.
—*Ulk* (Berlin).

北熊國母の英國往訪

『ダス、ユコー』

テークリへ、ルンドシャウ紙いふ。

英國の諸新聞吾露國皇太皇后マリア、フェドロヴナ陛下が倫敦を訪問することに就て論じ、此度の行は政治上多大の意味を有するものなりとて種々の臆説を逞しうせり。國母が如是の高齢を以てして而も遠に這回の行啓あらせらるゝは、蓋し陛下が皇妹を毎年壹週間宛、陛下の生地丁抹に於て省訪するものとは全く異れる理由に出でたる事は否むべからず、而も今日迄皇妹を訪れさせられたる最後の訪問は漸く昨秋の事たるに過ぎざるをや爾來數年陛下は英國を訪ふとなかりき、是は主として政明上兩國の感情融和を鈌く所ありしが爲に以ならざるべし、又かの汽車中の變事及ボルキー附近の犯罪以後は成るべく陸路を經て旅行せらるゝことを見合せ給へりしにも依る、獨り故國丁抹には海上航路の自由なる時に於て屢々行啓せられたりき。



A RUSSIAN HONEYMOON.

NICHOLAS—"What! A present? Have you really got a little bomb for me, darling, in your pocket?"

DOUMA—"Yes, dearest. And haven't you a halter for me?"

—*Fischietto* (Turin).

今や陛下は冬期に於て、陸路幾多豫想せらるべき危險の間を冒して西遊し給ふことゝなれり、何となれば皇太皇后と雖皇帝と其身邊の危險なることは毫も異ることなく、革命黨は國母をも皇帝と同じく專制君主の張本と見做して乘ずべき機あらば之を斃さんと常に窺へるを以て也。露政府が此度の行啓を以て危險千萬也と爲せるは次の事を見ても明かならん。政府はガチナよりウヰルバーレンに至る間の鐵道には用心尤も嚴固なる守備を施し、之が爲めには數箇の步兵隊を配付し、之が高級指揮官は絕えず此鐵道の距離の間に往來して怠りなく警衛したりき。

歷山三世の皇后即ち現國母が政治上の畵策に參じたることは決して今に初まる事にあらず。即ち故帝在位の頃は縱橫の奇略を行ひしこと少しとせず、其頃にあつては當今の形勢と殆んど在り得べしとも思はれざる位にも異れるものなりき。而

して何人たりとも親しく皇太皇后を知れる人は、必ずや下の事をいなふらん陛下は如何なる危險、如何なる病患に臨むことあるも決して一歩も退く人にあらずして、寸毫たりとも露西亞國土の爲に裨益する處あらば、進んで之を爲さゞれば止まざるの人なりきと是れ即ち曩日の皇后陛下なりき。

かるが故に這般の行啓が目的とする所と揣摩する者の言動は强ちに煙なき所に火ありといふに非らざるを知るべし、蓋し英露の妥協を最も有効に完成せしむる委員として、露帝が英王エドワード七世を動かし得べきもの、國母陛下を除いて他にあらざるべければなり。

此際最も注意すべきは倫敦に於ける露國の全權を負へる武官の交迭なり。近頃迄大使館付武官として二年の間其職に在りしボカツク將軍は本國に召還せられ參謀長より被得堡に於ける特別の任務を負はせられたり。是は蓋し際極めて必要なる措置たるを疑はず。ボカツク將軍は英國の軍事に通ずる事甚だ精かなるが上、今日の狀態に在つては渠が向に七年間司令官として駐在して悉知せる日本、支那の軍事をも甚だ要とするを以てなり。

其後任者として何人が赴任すべきやの問題に關して世人は先づ誰に向つて其指を屈するや。言ふ迄もなく前の司令官ゼルモロフ中將こそ最も適材ならめ、將軍は千八百九十一年より千九百五年迄都合十四年間其職に在りて、倫敦の人士には最も善く知られたる人也、是亦時に取つて世人の耳目に觸るゝ一現象たるを失はざるべし。

今一つの注意すべき事件といふは、古來の慣例として高貴の行啓に際しては豫め宮内大臣より通牒するを常とせり、皇帝陛下及皇后陛下が芬蘭に行幸せられ、倘海を渡つて各地を巡狩せられて或は釣魚を弄ばれ或は下民と親しく接せられたる時、官邊より沙汰ありて斉しく民衆の耳目を聳動せしめたり。かくの如く這回國母の英國行啓に當つても、宮内大臣參謀官フレデリツク男爵が官報を以て之を公にせる事是也。然れども露國の兩陛下には獨逸皇帝と同じく、僅近距離の行啓にも必ず軍を同うして出御あらせらるゝ由、長ければ悉くは言はず。大統領フアリエールは幾許の道程をか國母に陪從したりしか、或は單に停車場に見送りたるか、其邊は明ならず、國母の此行が獨帝即我維廉陛下と交歡せられたるが如き事を言ふは露人の切に忌む所なし。殊に重大なる任務を帶びて英國に赴かせらるゝ時に當り、獨帝の歡待を云爲するは愚の極也。是實に賢明なる露國政策として吾人の大に學ぶべき點ならん。

夏目君の文學論に因みて

金子筑水

評者が燃犀の眼、精透の筆、如何に次號の公論欄に光彩を煥發すべきぞ刮目して堂々たる長論文の現るゝを待て



明治故人評論（二）

一葉女史

△一葉女史

半井桃水

私が樋口夏子さんと相識つたのは、慥か明治二十三年頃であつたと思ひます、當時私は二人の弟と一人の妹と、外に二人の書生と下女と都合七人の家族を成して、芝南佐久間町の貸家に住んで居りました。妹は築地の高等女學校に通學をしましたが、其の同級のお友達で平素親しく交はりました野々宮さんと言ふ方が今は庄司菊子と申されます――或日私の宅に參つて、自分のお友達に可愛いさうな方があります、此方ては皆さんが學校へお通ひになつて、隨分洗濯物なども溜まるやうにお見受します、何せ外へお頼みになるなら、其の方にさせて頂く事はなるまいかと言れました、夫は結構早速お願ひしたいと言て洗濯物や縫物をどしどしお頼みしましたのが、即ち樋口夏子さんて、大きな風呂敷包を抱へ、其の頃の住居本郷菊阪町と芝との間を三四度も往つたり來たりされた末、一度是非私に逢ひたいといふ事を妹まで申込まれ、妹はその通り私に執次ぎました。

或日曜の午後社も學校も休なので家内中打揃つて菓子を喰ひ茶を飲み、頗る賑かであつた時、遠慮がちな低聲で誰やら音訪ふ者がありました、執次に出た妹に伴はれて玄關から、しづ〳〵と上つて來たのが、樋口夏子さん、恰ど時候も今頃で袷を着て居られましたが縞がらと言ひ色合と言ひ、非常に年寄めいて帯も夫に適當た好み、頭の銀杏返しも餘り濃くない地毛ばかりて、小さく根下りに結つた上、飾といふものが更にないから大層淋しく見えました、孰らかと言へば低い身てあ

るのに少しく背をかゞめ、色艶の好くない顔に出來るだけの愛嬌を作つて、靜肅に進み入り、三指で畏つてろく〳〵顔も上ず、肩で二つ三つ呼吸をして低音ながら明晰した言葉使い、慇懃な挨拶も勿論遊ばせ盡し、昔の御殿女中がお使者に來たやうな有樣で、萬に一つも生意氣と思はれますまいか、何うしたら女らしく見るかと、夫のみ心を碎かれるやうでありました、私を始め弟妹も、殆んど口を酢ッぱくして、坐蒲團を勸めたが、とう〳〵夫も敷ず仕舞、二時間ばかり對話した爲不行儀な我々は膝も足も折さうに覺えました、是程苦しい思をして、二時間も對坐しながら、用談らしい用談もなく立歸つた夏子さんは、數日の後野々宮女史を介して私に申込まれた、自分は小説を書て見たい、是非書かしてくれいといつて四五日の後夏子さんは、仕立もの丶殘を持て、私の宅へ參られました、私は親しく面會て、貴孃のお望は野々宮さんから委細承知致しましたが、私は不贊成、男子ですら小説なぞを書く時は、さも〳〵道樂者のやうに世間から思はれる、況んや御婦人の身で種々の批難を受るのは隨分苦しい事であらう、且つ貴孃の體質も餘り强い方とは認めぬ、願はくは他の方面に、職業をお求めなさいと、言葉を盡して諫めましたが、何分針仕事位では母と妹を充分に養う事も出來ぬ、如何なる批評も甘受するから、是非といふ事でありました。左程までのお望ならば、先づ試みにお書なさい、其の上で紅葉さん外諸大家にもお紹介しませう、但しお互ひ獨身であれば世間の疑惑を避ける爲成るべく手紙で濟む事は手紙で言てお寄しなさいと申述て置きました

十日餘經て短篇小説を持參されましたが、誠に見事な筆跡で色紙短册に出たらばと思ふものが、十行の罫紙の中にさら〳〵と認められて、文章も結構でしたが少し結構過て、新聞や雜誌には如何かと思はれました、其の上趣向が宜しくないので、私は私たけの考へを述ました、夏子さんは大層喜んで、更に一週間ばかりの後、書直して來られたのが「闇櫻」と題し武藏野の第一號に記載致した小説であります

此の後は大橋、乙羽氏其の外にも賴入れて、絕ず小說を書れる事に致しましたが、趣向に付ては大方一々相談を受ました。私は夏子さんの一葉女史に向つて「私は貴孃を女と見做して交はりしません、貴孃も私を男とは思つて下さらんやうに願ひたい、さもなければ何事にせよお互ひに遠慮があつてお話も出來かねる」と畑島桃蹊小田果園の面前で約束じました。然るに遠慮がちの女史は何處までも三指の遊ばせ盡し、趣向に付ての相談も、一度び間に合た事は恐くなかつたと申して宜しい。

或冬の事でありました、武藏野の編輯に夜を徹して朝九時頃から眠りますと、忽ち大雪が降出して、午後の二時には凡そ四五寸も積りました、疲れ果して眠て居ながら、不圖微かな咳嗽の聲に目を覺し、次の間の襖を開けば、火の氣もない玄關に、女史が端然と坐つて居られた、何時お出になつたと問へば、十時過に上りましたが、好く御寢なつて居らつしやるので、お待申して居りました、實は少々伺ひたい事があつてと言れて、時計を見れば既に二時過。女史は殆んど三四時間、寒たい玄關に待たれのである、慌しく坐敷に請じて、扨來意を問ふた處、女史は屢言よどんだ末「何だか可笑くて申出しかねますから今日は此の儘お告別致しませう」と言て雪の小降になつた頃、菊坂に歸られた、一切不得要領だ。

其の翌日手紙を送り、昨日伺ひに出た事は外でもない、今度開進新聞に書けとあつて、趣向をお示し下された内心中をする事がある、全體情死をする心持は何なものであらうか、夫を聞たいといふ難問、私とても情死の經驗はないから、何ういふ心持であるか、夫をお答へする事は出來ぬ、唯斯んな人間が斯うした義理に迫つたなら、如何さま死ぬ氣になるであらうと、讀者に思はせれば好いのである、近松でも馬琴でも豈夫情死の經驗はなかた筈と答へました。

此の小說は五月闇と題して、女史の著作中最も對話の多いもの、始め十回程書かれるまでは、何分女の言葉が荒ッぽいので、或時私は斯いふ話を致しました「貴

孃一度三崎座へ行て女優の演劇を御覧なさい、男形は存外旨いが、女形は男優の演る程何もやさしく行きません、是は畢竟自分が女仕種ても臺語ても多少自分を標準とする爲、荒ッぽくなりたがります、女流作家も其の通り、自分の平生用ふる言葉を全然使へば女であると氣を許す處から、女の言葉が荒くなる、口では巧みに言廻して、さほど耳立ぬ辭でも、書いて見れば優しくない」と言ひました處夫から後は女の言葉に始終意を用ひられて、是では何か彼では何かと絶えず相談されました。

紅葉山人を始め諸大家に紹介する事は豫じめ承諾も得て置きましたが、女史より手紙をもつて、左の通り申遣はされたので、その儘になりました。

梅雨のならひなめれど兎角に晴間のすくなき頃にて御籠居のおんつれ〳〵さこそと推はかりまゐらせ扨とや此の程より御心切に仰いたゞき候ひし尾崎樣其の外御目通のこと實は少し事情御座候て唯今の處御男子との御交際は願ひ難き折からゆゑ折角の御心入れに背き候こと不本意ながら惡からず御酌取り畑島さまへの御詫一重に願上候參上可申上ながら夫も心にまかせず先は右まであら〳〵かしこ

畑島さまへとあるは桃蹊子が女史の爲尾崎氏其の他へ驅廻つた爲であります。此の手紙は女史の死後紅葉山人へ贈りました處大變に喜ばれました。

女史は此の時分から種々なる壓迫を受け特に婦人の身に取り最も迷惑な疑ひを招いて狹い胸を苦しめました、其の頃私の世話して居つた親類の書生が脚氣に罹りました爲鎌倉に轉地をさせ、私も看護として一月餘り出掛ましたが、或日齋藤緑雨氏から妙な手紙が達しました、まだお目には懸りませんが御同行の一葉女史に宜しくといふ書添、また例の皮肉屋かと打捨て置きましたが、歸京の後眞面目な人から、其樣噂のある事を注意されましたので、半歳も逢たことのない一葉女史に一應申してやりました、其の返書は左の通り

此ほどは鎌倉へ御旅行とか伺ひ候もし御病氣にてはなきやと御案じ申し候ひぬ御樣子伺ひたしと存居り

候ひしかど憚る所なきにしもあらで心ならずも日を送り申候處今日しも珍らしきおん玉章久々にておん目もじせし心地うれしきにも又お恨のお詞がうらめしく候私愚鈍の身人樣を知るなどゝ申すことかけても及ばねど師の君なり兄君なりと思ふお前樣のこと誰人が何と申傳へ候とも夫を誠と聞く道理もなくもとより拵らへごとゝは存じ候ゆゑ別して御耳にも入れざりしに候我さへ知らぬ事を知る世の中聞かねことを聞くと申す仰さして怪しきことにもある間敷御捨置遊ばし候ても消る時にはきえ候はんかしかく計らぬ事よりおん目通りの叶はぬ樣になりしも巳むを得ぬことゝ私はあきらめ居今更人の口に戸も立られず唯身一ツを謹み申居候さりながら其源は何方にもあらむ皆私より起りしにて此一事のみならず廢あれかし落しいれんの陷穽設けられし身いかにのがれ候とも何の罪かきせられずにも居る間敷と悲しき決心をきはめ居候唯々お前樣の御親切を仇にして御名前を汚し候ことと何よりも心苦しくつらきは是のみに候ひき申上度いこと多けれどさのみはとておん返しばかりをあなかしこ

折しもあれ初秋風のわたりそめたるに虫の音の時知り顔なるなど月にも闇にも夜こそ物はおもはれ候へ露けき秋とはつね〴〵申ふるせし詞ながら袖の上におくけふ此頃は誠にしかとは思ひしられ候何事を申合する人もなき樣に覺えて世の中の心細さ限りなく私こそ長かるまじき命と存じられ候先頃より腦病にて自宅に歸り居候を又さる人のあしさまに言なすとかとにもかくにも誠うき世はいやに御座候

兄上樣

なつ子

女史が苦しめられた事實及び其の原因も多少知らんてはありませんが、今更夫を發表するのは女史の本意に戻りますから何事も記しません、唯女史の短生涯が苦痛に始り苦痛に終つたと言ふ事と今に至るまで女史を誤解する人がないに限らんと存じますから右の書翰

を發表して女史の爲に寃を雪ぐのは無用でないかと考へます。

女史は博く寛洽く聞て、普通の婦人の知らぬ事まで能く注意して居られました、夫ゆゑ女史の作物を見て「此奴ただものでないといふ考へを起した人もあつたやうです、併し私の見た女史は普通よりも物優しい憫れッぽい謹愼の深い、恥かしがりの苦勞性で、到底戀愛といふやうな事を思立つ程の餘裕もなく、孰らかと言へば偏屈な年に比べは四五十も心の老た婦人でありました。

故齋藤綠雨氏の如きも始め私の話を聞て「夫は貴君の處だけで殊勝げに見せ掛けるのだ僕一番近寄て化の皮をむいてくれる」と大層力んで居りましたが、女史と親しく交はつた後「全く貴君の言た通り僕の觀察は誤つた」と話された事があります。

私が一葉女史其の人に付て知た事信じた事は以上述た通りであります。

△一葉女史の作品

紅綠

一葉女史に就ては今ま急に是れといふ御話が出來ない、きれ〴〵の偶感でも御話しませう。

私が第一に感ずる事は、あの人をもう二三年生かして置きたかつた事である、といふのは外でもない、あの人は二十五年頃から小說を書き初めて二十九年に死んだ、本當に小說を書いた月日はまあ三年間である、其中でもあの人の得意の作品といふのは死ぬる前年即ち廿八年中のものが最も多い、この子、わかれ道、たけくらべ、此の三つは廿八年の十二月に出來たものである、誰しも經驗のある事だが、作家には進歩の一期間がある、何か知ら或るものに觸れると三つでも四つでも立處に出來上る、筆に油が乘り出して來る、一葉さんの廿八年十二月は確かに此の趣がある、今まで煩悶して何物かを探つて居たつか、此時俄然大悟したのであらう、其れてあるから、もう少し永く生きて居たら

此の大悟がもつと能く何かの作品となつて表はれたのであつたらうと思ふ油が乘り出して來た處で倒れて了つた實に惜しい。

一葉さんの死んだ時は私は實の處が一葉さんの文章の趣味が充分に解つて居なかつたです、左樣廿九年とすると私は廿三の歲ですね、一葉さんに二つの年下です、實に驚くですな、其れて私はたけくらべ抔を讀ても充分にわからなつたのてすからな、

一葉さんが死んだ翌年頃でした、正岡(子規)先生が私にたけくらべを讀だかと問はれました、讀みましたけれども解りませんと答へた、すると先生は笑つてあれが解らないやうぢや仕樣がない、天下の名文だのにと言はれました、私は先生から天下の名文といふ聲を聞て非常に驚いて早速讀て見ました、氣の故かも知らんが成程名文だと思ひました、翌日先生の病床に侍して、名文てすなと昨日の御言葉を鸚鵡返しに言ふと先生は何處が名文だと乾度向はれたてす。

一體うちの先生は妙な人て、折り／＼試驗めいた事を門人に喰はす、うつかりすると頗る狼狽する事があるので、そこの骨(こつ)は私が横着もの丈けにちやんと心得て居る、前夜もたけくらべを讀だ時に既に其の下心をして讀だのだたら驚かない、例令ば西鶴の骨に近松の肉を着けたやうなものですと答へた、すると先生は只だ其んな平凡な事を考へたのかと横を向かれた、いや其れ許りてはありません、今の作家ていへば露伴と紅葉を兼ねた筆致と思ひますと言ふた、うむ爾かと先生はいふた、露伴は筆が剛健であるけれども色氣が乏しい、紅葉は流麗てあるけれども力が足らぬ、色氣と力とを兼ねて、一葉一流の情のある色彩て運んて行く其間の句法の引締つて居る事は天下無比てすと恁う言ふと先生は枕を代えて、引締つて居る、爾だ一點の隙もない、いゝ處に氣が付いたと機嫌がよかつたです、私は嬉しいので未だに忘れない。

つい此頃も一葉全集を取出して見て、其時の事を思ひ出し、うちの先生も一葉さんも既に亡き人だと思ふと詰らない話だが只だ譯なしに淚がほろ／＼こぼれて

來るてす、回想は妙なものてすね、もう一返繰返して讀て見ると、十年前に私が先生の前て言ふた事と今とは考が違つて居ません、文章は實にうまいものてす、引締つて居るてす、私は確かにたけくらべの文は露伴紅葉以上だと今ても信じます、さうてす、文章の上てす小說としては別問題てせう、何だつて今日はモウパッサンやダンヌンチオが流行り出してる時代てせう、今日の小說としては如何なものか其れは言はないてもわかりませう。

最も羨やましく思ふのは筆に色氣がある事てす、色氣といふて一寸わかりかねるかも知れませんが、普通の艶氣とは違ひます、何と言ひませうか「情」とても言ひませう、實にどんな子供を書いても其の子供にはちやんと子供らしい情が隱約の間に溢れて居ます、美登里に信如、三太郎や正公、これらの無邪氣な子供が集まつて無邪氣な遊びをしてる處ても、其の筆に書いた景色以外に何となく「色つぽい」處が見えるてす、背景が吉原だたらといふ故ばかりてはありません、わかれ路だつて爾てせう、吉三の態度は色つぽいぢやありませんか、御京の樣子は無論の事てす、一體一葉さんは女と小兒を描く事が上手てす、男の方はどちらかと言へば平凡てす、寧ろ拙かも知りません、女や小兒、一句にして活躍させる手段は實に恐ろしいものてす、蓋し其れは當時の思想に最も適當した描寫法てあつたのてせう。

てすから私は矢張當時の作品として、作品中の最も優れるものとして今ても敬服して居ます、近松や西鶴のものを敬意を以て讀むやうに一葉全集をも我が國の最も重きものとして讀て居るのてす。

一葉全集は日本式小說の最後の花てあると信じます、一葉全集後はがらりと思想も書き振も變つて參りました。

△一葉女史に就いて

島崎藤村

女ばかりて組織された家庭をよく世間に見かけるこ

とがある。又は、よし男があつても、働きが無いとか人の世話になるとかいふ風で、女の方に反つて氣象者の揃つた家族を見かけることがある。一葉女史の家は矢張そういつたやうな風で、母親さんも、妹のお國さんも、皆なしやんとした人ばかり揃つて居た。三人暮しの女世帯で、佗しく睦じくやつて居られたことは、今から考へて見ても面白い。

女史の會話は、機智、冷嘲、同情相交つて、殆んど應接するに遑が無い位であつた。また多少物を誇大にするやうな癖があつた。世間に苦勞した人だけあつて談話の間にも、人の爲に嘆き、自己を嘲り、冷熱並び到るといふ趣があつた。

女史の作品が女史の生涯と密接に相觸れて居たとは最も吾儕の注意を引く點である。同じ女史の作物の中でも、初期のものは離れ／＼の感がある。「大晦日」あたりから急に接近して來て「たけくらべ」となると最もよく相觸れて居るらしい。昔から好い文學は作意と生涯との接近した時に產れるやうである。多くの文學者の一生を通じて、その接近する時期は必ずしも長く繼續しない。時とすると極めて短い。「一葉全集」を見ると、女史の晩年が是時期にあつたことは深く思ひやられる。二年か三年の間に、北村透谷君があれほどの產物を遺し、女史が幾多のすぐれた短篇を遺したことは、無限の感慨を自分に起させる。

亡くなつた人は何時までも同じ歳で居るやうな氣がする。自分は透谷君や一葉女史よりも年少であつた。その自分が最早三十代であるのに、故人は二人ともまた二十代で居るやうな氣がする。

△たけくらべ

幸田露伴

一葉女史の晩年の作にいづれもおろかなるは無けれど取り分け此作は筆も美しく趣きも深く、少しは源の知れたる句、弊ある書きさまなども見えざるはあらねものゝ、全體の妙は我等が眼を眩ましめ、應接にだも

暇あらしめざるなれば、もとよりいさゝかの瑕疵などを舉げんとも思はしめず。近頃は世の好みにてか、評者の好みにてか、作者の好みにてか、不思議なる小說のみ多くなりて、一篇を讀むことに我等は眉をひそめて、これ意を新にして功を得んとせる人々の譏を失して怪を成せるにはあらずやと打つぶやくことを免れざりしが、此作者の此の作の如き、時弊に陷らずして自ら殊勝の風骨態度を具せる好文字を見ては、我知らず喜びの餘りに起つて之を迎へんとまで思ふなり。栴檀を削りて此の一片の香の好さよと云はんことの愚なるが如く、芳野の花見がへりに一枝を家づとゝして全山のおもかげを忍べと云はんことの理無きが如く、佳き作の句を摘み章を指して妙なる哉〳〵と云はんは、眞に愚にしてをさなき烏滸なる業なれども、思ひ餘りては愚なりと知りつゝも愚なる業を誰もする者なれば、僅に其第一章のみを我等少しく取り出てゝ云はんも、左ばかり咎むべきことにはあらざるべし。第一章は單に大音寺前のありさまを敘し、つゞきて其あたりの兒等の學ぶ小學校のありさまを敘し、さて其小學校の生徒たる信如といへる兒を一寸敘し出せるばかりなれど遊廓近き地の自然と他の地と違へる樣眼に見る如く、がらを好みて中廣の卷帶、增年はまだよし、十五六の小癪なるが酸漿ふくんで此姿はと目をふさぐ人もあるべしといへる、昨日河岸店に何紫の源氏名耳に殘れど、今日は地廻りの吉と手馴れぬ燒鳥の夜店を出してといへる學校の內の樣をいふくだりに、お父さんは刎橋の番屋に居るよと習はずして知る其道のかしこさ、梯子のりのまねびにあれ忍び返しを折りましたと訴へのつべこべといへる、お前の父さんは馬だねと言はれて顏あからむる子の富家の子に追從するといへる、僧の子なりといふかどにて信如に惡戲仕掛くる兒の猫の死骸を繩にくゝりてお役目なれば引導をたのみますと投げつけし事もありしといへるなど、いづれも他の人には見難き筆なり。坊ちやん坊ちやんとて貧家の兒の富家の兒に追從すると書けるなんどは、何事も無きことのやうに思ふ人もあるべきかなれど、至り深き書きざまと

いふべく、同じ猫の死骸もこの篇の此章にて用ひられたると、泥水清水の首の方に用ひられたるとを思ひ合はすれば、随分おもしろき違ひあり。(猫も申すべし。彼の作者には酷くも死したるものを猶殺して用ひられたりしが、此作者には嬉しくも活かして用ひられたりと。)枝葉の事は措きて、篇中の人物、みどり、信如、正太郎、長吉、三五郎、龍華寺の和尚など、善くもそれに〱それ〱の面貌風采を讀むものゝ眼前に在るが如く思はしむるまでに寫されしものかな。みどりの活々としたる、目がくしの福笑ひに見るやうなる眉つきせる三五郎の愚にして愚ながらに相應の慾も虚飾も情も義理も知れる、正太郎が物のわかり敏きのみならず、早くもひそかに美登利を思へる、長吉が生意氣にて加之氣を負める、信如がくすみたる、和尚が何とも云へぬをかしき俗氣滿々たる、皆よく描きも描かれたり。美登利が信如に對する心中の消息は、もとより年ゆかぬものゝことなり、あらはには寫し難し、さりとて寫さては濟まず、これ語を下せば即ち錯過する底のところ、文の最も難境なるが、凡作のかゝる境に於て動もすれば千萬語を費して而も愈々其傳へんと欲するところのものと相遠ざかるの醜を演ずるとは違ひて、此作者が最も自然に近き方法を以て其消息を傳へしは感ずるに餘りあり。信さんかへと受けて嫌な坊主つたら無い云々と第十一章に記したる其一節、何うもしないと氣の無い返事をしてとその次の節にて叙したる一句、それと見るより美登利の顔は赤うなりてと記したる第十二章の一節、庭なる美登利はさしのぞいてと記したる第十二章の一節、これらは僅々の文字を以て實は當人すら至極に明らかに自覺せりといふには非ざるべき有耶無耶の幽玄なる感情を寫したるは最も好し。信さんかへと初一句にはさんをつけて呼び、次の句には直ちに嫌な坊主といへるが如きは、何ぞ其の美登利の可憐にして而も作者が傳神の筆の至妙なるや。字減ずるを得ざれば乃ち其密を知る、密なるかな〱字去つて意留まるといふものこれなるべし。人の身に刄を加へて皮膚を剝ぎ心肝を抉剔し出して他に示すやうな

ることを敢てせずば高尚なる小説といふものにあらずとにても思へるらしき多くの批評家多くの小説家に此あたりの文字五六字づゝ伎倆上達の靈符として呑ませたきものなり。正太郎が美登利に對しての心中も、これは生意氣にてませたる見だけにやゝ寫し易かるべけれど、水道尻の加藤にて寫眞をとらんと云はせ、そんな事を知るものかと云ひて廻れ水車を小音に唄ひ出させ、だけれど彼の子も華魁になるのでは可憐さうだといはせ、何故でも振られる理由があるのだものと云はせ、終にはふいと立て庭先より駈出させたる作者の用意皆あたとならず、憶にこたへたり。特に頓馬に對ひてお前は何故でも振られると正太郎と云はせたるは、作者まことに藥王樹を齎して我等に假し、人の肺腑を活けるまゝに見せたりとも云ふべし。美登利が島田髷に初めて結へる時より、正太とも親しくせざるに至る第十四、十五、十六章は言外の妙あり。其の月其日赤飯のふるまひもありしなるべし、風呂場に加減見たりし母の意尋ねまほし。讀みてこゝに至れば、第三章の兩親ありながら大目に見て云々の數句、第五章の長吉の罵りし語、第七章の我が姉さま三年の馴染に銀行の川様以下云々の悲しむべき十數句、學校へ通はずなりしまであなどられしを恨みしこと、第八章のかゝる中にて朝夕を過ごせば以下の敍事文など、一時に我等が胸に簇り起りて、可憐の美登利が行末や如何なるべき既に此事あり、頓て彼運も來りやせんと思ふにそゞろあはれを覺え、讀み終りて言ふべからざる感に撲たれぬ。鹵莽なる讀者ならずば、たゞに辭句の美を説くにとどまらず、必ずや全篇の秘響傍通して、伏采潜發する第十四、十五、十六章に至りて、噫と嘆じて而して必ずはじめて眞に此篇の妙作たることを認むべし。文の癖など人によりては厭ふべき節の、別路、十三夜等よりは此篇に多きか知らねど、全體より云へば此篇却て勝れること數等なるべし。(潮待ち草より轉載)

△一葉女史

上田敏

何やかや色々家に取込んだことがあつたので、十分調べる隙とてはなし、委いことをいはふとならば今一應全集を讀み返す必要もあるが、それも出來ずに了つた、唯、今腦裡に殘つて居る一葉女史の作物並に人物に就いての感想だけを言へば次の三點でほかない。

（一）一葉女史の作物中で、傑作と推すべきものは如何あつても別れ道だ、短いものだが詞も想も善い。

（二）大作といつたらそれはたけくらべになる、文章の一番よいところはその中の「春は櫻の賑ひ……」からの一節だと思ふ。

（三）東京の相應な家庭に生れただけに、品能く育つた人であつた、常識の十分にある人だけ、心の奥底には何が潛んで居つたか、それは分らぬけれども、兎に角見受けたところでは、言葉遣ひなど淑とやかな、上品な人でした。（文責在記者）

△一葉女史の作物

抱月生

別に評といふほどのものも書けませんから、責ふさぎに昔讀んだ『一葉全集』をまた繰りひろげて、思ひ出した事ども一つ二つ書きつけませう。今から思ふと、一葉の書きさかつた頃は、丁度僕等が文壇に驅け出した當座のことであるから、其の作に對する感服の度も一しほ強かつた。爾來殆んど十年、讀みかへす機會とても無く過ぎたのであるが、其のあひだ、作の筋は忘れても風情だけは心に殘つてゐました。それを今度また彼れ是れと拾ひ讀みして行くに、袖の移り香といふ趣で昔とも違つた感興がある。たゞ併し形式の上には時の推移の爭はれぬ跡がありませう。當時の趣味ではそれが却つて面白いと思はれた地の文などに、今日から見れば氣取りすぎた句法と感ぜられるものが多い。筋ではない、むしろ作者の敍述の態度に今昔の差でシアトリカルな所が出て來たのです。但し是れは多くの

藝術に必ず伴ふ現象で、已むを得ないことなのでせう。恰も金屬が年を經るに從つて外皮から錆びて剝げ行くやうに、藝術も或程度までは時のために酸化せられて行く部分がある。我が明治の社會では、殊に此の酸化作用が急なのでせう。「諸事お任せ申すと、寛大の人なり」「何でもないと言ふ聲、わけあり」式の敍述法などが、玆にいふものゝ例です。過去の文藝を評するには此の朽ちる部分と朽ちぬ部分との判斷を嚴にすることが必要と思ひます。

△一葉女史について

小波

丁度〆切の頃神奈川縣下の敎育會總會に被招其の爲延引申譯ありません、尤も一葉女史に就ては實はあまり多くを云ふ材料を持ちませんので此度は何卒御勘辨願度いのですが只一言

一女史は本邦稀有の女作家たる事決して疑ひません

一但し個人としては如何あらうか、即ち友としては頗る語るに足るべきも妻としては聊か信じ難い人の樣に聞き又、聊か信じて居ました

△一葉女史の作物

秋聲生

▲一葉女史の作物を其頃は非常に面白いと思つて讀んだ。殊に「たけくらべ」「にごり江」などを愛讀した。今讀んでも依然面白い。然し昔し讀んだ時は作其物に多大の尊敬を拂つて多少崇拜の氣味もあつたやうだが、今讀んでみると、外の方面で感心することがある。ソレはコマ〳〵した女性的の觀察、ちよッとウヰツトの利いた、謂はゞ警句のやうなものや、東京產の人の使用する通語やなぞで、一葉女史の作には其が非常に多い。尤も那の時分の作家には其樣事に氣をつけたのが澤山ある。殆どソレ一點張のもある。綠雨氏などは依然さうで、強ち一葉に限つたとでもないやうだ。ソ

レが今讀むと一寸面白く感ずるので、成程コンな事もあるのかと、我々田舍漢には餘程參考になる事がある。

▲「たけくらべ」を讀むと、小供を能くもア丶性格を書わけたものだと感心せざるを得ない。尤も今から見ると、隨分一葉的に拵へたところもあつて、信如お京などは少し巧すぎはしないかと思はる丶くらゐだが、ソレは白玉の微瑕て、全體間然するところがない。

▲小說としては「にごりえ」の方が好いやうだ。「たけくらべ」の方は、アンな場面と背景を使つて幾樣の小供を點出したと云ふだけて、お終の方が少しコヂつけてあるやうに思ふけれど、「にごりえ」の方は一瀉千里の勢て大詰まて運んてゐる。部分々々を謂へば、「たけくらべ」の方が優つてゐるが、作の價値からいふと「にごりえの方が好い、とは其時分から思つた事て。

▲「わかれ道」には、一葉女史の人生觀と云ふやうなものが名殘なく現はれてゐるやうだ。吉公と云ふものを假りて作者が氣を吐いたものとしか思はれぬ。ソレは吉公が少し辯りすぎてちと厭味になつてゐるのでも然う取られやう。此處の女性の方は寧ろ能く描かれてある。

▲「この子」などは比較的厭味がなくて可い。殊に子を持つたよのない（と想像する）作者が、我子に對する親の感想を書いて、形式的になつてゐないのは感ずべき事て、今少し此んな方面て發達して行つたら、「たけくらべ」、「にごり江」以外に、もつと素直な美しいものが出來たらうかと思ふ。

▲一葉女史の作には總て一種の捻くれた一葉式の觀念があるやうだが、所謂其時分て謂つた「睨み」と謂つたやうなもので、是と其の才はぢけた文章、女流てなくては得られぬ一種の觀察とが相待つて一葉一流の作を成してゐる。殊に其の觀念に至つては、尋常の女流に於ては一寸見得られぬところて、一葉女史の閱歷境遇之をして然らしめたのてあらうが、女史の特長が此にあつたと同時に短所も亦此て、何如かすると一寸厭な心持を起させる。然し二十五歲てアレだけの作があ

つて、其作がドレも此もブマなものはなく、其相應に氣の利いた出來ばえのものであるとすれば、女史も亦希世の才女であつたと謂はなければならぬ。

▲文章の好いのは寧ろ之を雜錄に於て窺ふべく、其の書翰文（其本の名を忘れたり）に於ては女史の才の心憎いほど働いてゐるのが解る。

▲女史の作を讀んでゐると、近松の娘と云ふやうな感が起る。近松の片影が見られるやうな氣がする。實世間を知つてゐるとは、幾ど驚くべきほどであるが、あの時分の傾向で、ソレを悉く一葉流の眼鏡で觀察し、一葉流の觀念で書いてあるから、深く人生に觸れるとか、自然が窺はれるとか云ふやうな大きな藝術品でないかも知れぬが、明治二十七八年の文壇は確かに女史によつて飾られてゐたに相違ない。

△故一葉女史

宙外

我輩は故一葉女史とは一度も面會爲たことはない。随つて直接に女史を知ることは出來なかつた。けれども二三の友人から間接に聞いた趣味ある話もあるが傳聞は得て間違易いものであるから故人に關する傳聞は能く調べて見た上でないと發表してはならぬと思ふから今は省ぐ。と斯う云つて了ふと著書の評だけに就いてより外話はないことになる。一葉全集の評となると彼の位の大冊であるから却々一寸全體を括めて論ずることは困難だ。さうかと云つて或一二篇を取つて評して一葉女史の特色なり價値なりを充分に發揮する譯には行かぬ。何か簡短て思ひつきをとなると是れも亦面白い考へもない。併し彼の人の作を久しい以前に讀んだ記憶を呼び起して朧氣な感じを有體に云ふと、古び方も可厭でない、筆の利いた、調子のよい美くしい錦繪を見るやうな心地がした。人生が何うとやらて、新思想は何とやらいふ今時のむづかしい評論家には餘り感服されさうな特長はないやうに考へられるが、一場一景の活畫としてはその境に接して其の人の聲を聞く程に活躍させるだけの靈筆は持つてゐたかと思ふ。併し

性格などいふ論になつたら餘り澤山の人數は書きわけ得てゐまい、二三人位の目立つて特色ある人物が何れの作にも通じて現れて來るのらしい。景情ともに能く其の長所を捕へて簡潔で雅致ある筆に描破する手腕は確かに非凡であつた。一葉女史の作は大抵短篇であるが彼の人の着想筆致ては自然に短篇ならざるを得なかつたかと考へられる。そこで油繪の大作に比すべきものは無いが氣の利いた趣の深い水彩畫のスケッチ又は或種の浮世繪の出來の好い程度のものには富んでゐると云つて可からう。色々と云ひたい事もあるやうなれど餘り長いと御迷惑でもあらうから此の位に致して濯きます。

△附記　「一葉女史」に就ては創作家及び評論家の兩方面を通じて最も弘く之が評論を集めんと欲し、四方に馳せて寄稿を懇願したる所、快諾を與へれたる人、實に廿名の多きに達したりしが、編輯〆切の間際に至て、或は病氣の故を以て、或は多忙の故を以て斷はられたる人少からず、或は又全く何等の音沙汰もなき人あり。僅かに以上に掲載したる九篇を得るに止りしは編者の遺憾とする所なり。これ編者自ら其責を空しうしたるにあらず、實に以上の事情之をして然らしめたるなり。此旨深く諸者の諒恕を乞ふ。次號に掲載すべき「福澤翁論」に寄稿を依賴したる人は德富蘇峯氏、山路愛山氏、竹越三叉氏、池邊吉太郎氏、金子筑水氏、建部遯吾氏、福本日南氏、鎌田榮吉氏、戸川秋骨氏等の諸氏なれば此翁の人物、事業、文章、及びそが明治の文化に及ぼせる影響等極めて嚴正に批判せらるべきを信ず。(編者しるす)

ベルサイユの庭園

文學博士　箕作元八

詩文、樂譜、書、畫、刀劍、彫刻、器具、建築、庭園等を總稱してこれを作物といふ。その實際は手で作るものであるが、その根本は製作する人の頭腦にあつて、頭腦中に考案されたものが手に依つて現はれるのである。要するに、個人の精神狀態が製作物の上に多少とも現れないことはない。個人の性質が製作物に現はれるのみならず、その人の一時的の感情も現はれる。

尙一歩を進めて云へば、個人の性質や感情が現はれるのみならず、時代思潮が或は顯著に或は微弱に發現して來ることは疑ふべからざる事實である。

文化史は時代思潮を研究する學である。庭園もまた一種の製作物であつて、時代思潮を表示することに於いては文化史上見逭すべからざるものである。殊にかのフランス國のベルサイユの庭園及び宮殿の如きは、時代思潮を示すことに於いては最も顯著なものであるから、その事を少しく述べて見よう。

昔のローマ人も菜園、果園と庭園とを區別することを知つて居つた。ローマ人の庭園は、花などを植ゑて、その間を通じて路がついて居て、端々には大理石の彫刻物や、石の柱に支へられた丸形の亭が設けてあつた。それのみならず、庭園たると同時に動物園のやうな性質を有つて居て處々に塀を設けて鳥や獸が飼養されてあつた。また池や瀧や噴水などもあつたが、それは自然物の形を取らずして建築的の美景を取つたものである。

ローマが亡びてから中世になつて、庭園を造ることは餘り行はれなくなつた。時によると寺院などに庭園の如きものもあつた。それは當時の僧侶は多くは力食したものであつたが、その中で多少餘裕のある僧侶が草花などを植ゑ込みにしたに過ぎない。庭園としては甚だ價値のないものである。

その後十字軍に從つて往つたものなどが他國の異草珍卉を持つて歸るものがあつて、それを植ゑて置くために多少植物園の性質が起つて來た。それからアメリカが發見されてから、變つたものが持つて來られるやうになり又ヨーロッパ人でアジアに交通するものが自然東洋の植物を持つて歸るものがあつて、それを時の富豪が自己の庭園に移植して富を誇るやうなこともあつて、庭園の如きも多少見るべくなつて來た。

ヨーロッパの知識復活時代即ちレネーサンス時代は、イタリアの建築、繪畫、彫刻等の美術が非常に進歩して、後人の企て及ばざるまでに發達した。そこで、庭園も從つてその影響を受けて以前とは相違して大に立

派になつて來た。

抑もイタリア人の庭園は、多く建築的美を表する石造の階段を設けて、高い處や低い處をいくつも造り、處々に石像銅像を配置し、且つ何處までも規則正しいこと即ち整一(ハーモニー)を愛した。要するにレネーサンス時代のイタリアの庭園はローマ式庭園の更に發達したものである。

フランスの庭園も矢張淵源をイタリアのレネーサンス式に有つて居る。勿論、只庭園のみならず、總ての美術に於いてさうである。併しながら、初めから庭園の發達が璽てもなかつたが、ルイス十四世王の時に至つて庭園が發達して、フランス式といふものが出來た。ベルサイユの庭園の如きはその好典型である。

ベルサイユの庭園を設計した技師はル、ノートルといふ人てあつた。これが最も善くルース十四世時代の君主專制主義の思潮を代表したものである。このフランス式と雖も矢張前に述べた通りイタリアの復活式から來たものてあつて、つまりその規模を非常に大きくしたものである。

ベルサイユの庭園はレネーサンス式のやうに高低を頻りに造ることを廢めて平地に造つた。この舊習から脱化して平地に造つたことが已に驚くべきことてあるが、その構造の雄大なるに至つては更に驚くべきことてある。

起工はキリスト紀元千六百六十七年て、庭の大體の形を造るだけにさへ三萬六千の人と馬六千頭を使つたといふことてある。このベルサイユ附近の地は水も木もない不毛な地てあつたから、ルイス十四世は、ベルサイユから約三四十哩隔つて居るマンテノンといふ處から水道を引いて來た。その水道たるや又宏大なるものてある。故に或人は、ベルサイユの一木一石も、君主々義を唱つて居るといふた。至極適當の言葉てある。

庭園の構造は廣き直線を主として造られてある。中央に十字形の廣い池があつて、池の中央と兩端が廣く、圓くなつて居る。それを中心として道路が放線状に出

て居る。道の兩側には並木がある。それを一方から眺めると限りなく大なる感想を生ずる。隅の方に往くとイタリア式の瀧や洞穴や建物があり、又至る處に大理石の神像など散在して居る。樹木は孤立の形を取らずに並木或は林を成してある。

この大庭園の傍にルイス十五世の造つた大(グラン)トリアノンといふ庭園がある。その規模は前記の大庭園に比較すると餘程小さいが、矢張放射形から成り立つて居る。

それから大トリアノンに近く小(プチー)トリアノンといふのがある。これはルイス十六世の時出來たのであつて、餘程性質を異にして居る。ルイス十四世の大庭園が圓形或は直線の規則正しい幾何的の區分を主としてるに反して、小トリアノンは自然の風景を模することを主として居る。道なども不規則で一望して見透すことの出來るやうでなく、歩むに從つて段々變化があるやうになつて居る。此點に於いては日本の庭園と餘程接近したものである。これらは皆時代の思潮の然らしむる所であつて、ルイス十四世の時代は凡てが人工的、君主的であるに反して、ルイ十六世の頃は自然的、平民的を好んだ結果に外ならぬ。

右の相違を更に良く表示するのは庭園よりも宮殿である。ベルサイユの宮殿は、柱が大きく、天井も高く、凡ての室が非常に宏壯である。又壁畫だの天井畫だのといふものが緑だの赤だの青だの、強い色で塗つて燦爛目を眩せしむるばかりであつて、人をして一見殆どその威嚴に打たれる樣な感を起させると共に長く見て居ると倦怠を生ぜしむる樣な感がある。それから羽目や天井の枠になる處は太い金色の曲線を以て割してあるが、これまた前同樣の感を與へる。

小トリアノンの宮殿は、柱が細く、天井も低く、羽目や壁などの裝飾も極地味な色を用ひてある、金色の燦爛たる代りに銀色或は艶消しの金色が用ひられてある。一體が威嚴を示すといふよりは生活に愉快な方を主として居る精神が見える。

要するに、ベルサイユの宮殿は、庭と相應して、[illegible]人の近き難き堂々たる樣子がある。小トリアノン宮

は田舍の愉快なる住宅と思はせるやうに造つてあつて、壁の外部に蔦が纒つて居るし、母家を離れた小家屋は殊更村落の小舍を模したのさへある。

それに、ルイス十六世の皇后マリー、アントアネットは、宮中の婦人と共に簡單なる農家の婦人の服裝をして、百姓生活の眞似をして、活潑に樂んだといふことである。これは皮相に過ぎないであらうが、それでも、ルイス十四世の朝廷に於ける男女の貴族が何處までも貴族的の態度を失はず、目ばゆくばかりの衣裳を着て威儀堂々と歩調重々しく往來したのに比べて見ると非常の相違である、殆んど別の社會の如くに見える、時代の風潮がこれほど違つて居る。

この君主的は廣大なるベルサイユの庭園も今は餘程荒れて居る。現今の共和政府でもその保存には骨が折れると見えて、當時に於いて素簾を懸けた如く每日噴出して居た大噴水も、今は日曜日の外は見ることが出來ない。つまり維持費の困難から割出した都合であつて、これに依つて觀ても、ベルサイユの庭園が如何に宏大であるかゞわかるであらう。

東西比較 楊柳美觀論（中ノ下）

畔柳芥舟

枝垂柳を始めて英國に輸入したるは詩人ポープであつて、彼は之をトヰックンアムの庭園に植えたと言ひ傳へて居る。今日に於いては英吉利全土殆んど到る處に行き亘つた。枝垂柳は英吉利のみならず多くの國で墓地に植込み、現にセント、ヘレナのナポレオンの墓上にもあるものだから、此枝を折つて挿木にしたのが歐洲全土に幾百本あるか分らない程である。英吉利に於いて總ての柳なるものを悲哀の意味に使用し始めたることは餘程古くからであつて今日では漠として考證しかねる程であるから、從つて失戀の場合に柳を聯想し柳冠を身に着ける習慣さへ現はれ出して詩人等が喜んで此等のことを歌にするは必然の道理である。枝垂柳の枝ぶりからして最も此場合に適當であるらしい。沙

翁のオセロを讀むと第四幕第三場にデスデモナが吾が死ぬることを豫知して「妾が母樣の腰元にバルバラといふ一人の處女思ふ男が亂心故振棄てられて歌うた歌柳の歌とて古いものではあるけれど處女の身の上に叶うた歌それを歌ひながら死にやつたが、今夜は何故か其歌が妾の胸を離れぬわいな」といふて柳の歌を歌ふところがある、姑射君の譯を添へて次に擧げよう、

青葉が下の木下陰　嘆きに沈む乙女子が
（青柳の歌を歌へや青柳の）
頭は膝に手は胸に　思ひは何處あなあはれ
（柳、々、歌へよ柳）
側を流るゝ里川の　水も咽びぬ音にたてゝ
（柳、々、歌へよ柳）
腸絞る涙には　石も溶けてや流るらむ
（柳、々、歌へよ柳）
青柳の枝を此身の花冠

"The poor soul sat sighing by a sycamore tree,
Sing all a green willow;
Her hand on her bosom, her head on her knee,
Sing willow, willow, willow:
The fresh streams ran by her, and murmur'd her moans;
Sing willow, willow, willow;
Her salt tears fell from her, and soften'd the stones;
Sing all a green willow must be my garland."

沙翁の種子に使用したる原歌は男が女の薄情を慨き悲しみたる意味であつて、パーシーの古歌集にもチャペルの古代俚謠にも收めてあるが、沙翁のは女が男に對する怨みにかへられ更らに幾分か鹽梅してある。ハムレット第四幕第七場にも皇后がオフィーリアの最後を語るところにオフィーリアが花輪を柳條に懸けんとしたる趣きが述べてある「あの小川に差懸つて鏡のやうな水の面に白い葉裏を映して居る柳の木のある處へオフィリア殿には樣々の花輪を身に纒ひて彷徨ひゆき……芝蘭の花の花輪の一つを垂れたる枝にかけむとて

擧る所を惡くや小枝が折れたれば花輪も己れも落ちたりしが……」

"There is a willow grows aslant a brook,
That shows his hoar leaves in the glassy stream;
There, with fantastic garlands did she come, …
There, on the pendent boughs her coronet weeds
Clambering to hang, an envious sliver broke;
When down the weedy trophies, and herself,
Fell in the weeping brook."

更らにまたマーチャント、オウ、ヴェニスの第五幕第一場てロレンゾーが次のやうなことを言ふて居る、

"In such a night
Stood Dido, with a willow in her hand
Upon the wild sea-banks."

倩斯の如く失戀と柳との關係あることに就いてはヅースが「沙翁解説」中に理由を與へて、此木が悲哀の象徴になりたるは聖書の文句に依るか然らずむば落涙とウィーピング、ウィロウとの契合に依るか孰れかてあるらしいと謂ふて居るけれども、千六百三十五年『スペクルム、ムンディ』の著者スワンは馬鞭草科の西洋人參木 Utex Agnus Castus が貞節の徳を養ふものと昔から想はれて居たるに柳が同樣の性質を有するから失戀の男が柳冠を着ける風習を生じたのであるとの異説を樹てゝ居る。

ヘリックも失戀と柳との關係を歌ふた、

"Thou art to all lost love the best,
The only true plant found;
Where with young men and maids distrest,
And left of love, are crowned.
When once the lover's rose is dead,
Or laid aside forlorn,
Then willow garlands 'bout the head,
Bedewed with tears, are worn.
When with neglect the lover's bane,

Poor maids rewarded be;
For their love lost, their only gain
Is but a wreath from thee.

And underneath thy cooling shade,
When weary of the light,
The love-spent youth and love-sick maid
Come to weep out the night."

ムーアの同じ詩想である、

"A willow garland thou didst send,
Perfumed, last day, to me;
Which did but only this portend:
I was forsook by thee.

Since so it is, I'll tell thee what:
To-morrow thou shalt see
Me wear the willow; after that
To die upon the tree.

As beasts unto the altar go
With garlands dressed, so I
Will with my willow wreath also
Come forth and sweetly die."

聖書の詩篇に反響を與へるはバイロンの作である、

"We sat down and wept by the waters
Of Babel, and thought of the day,
When our foe, in the hue of his slaughters,
Made Salem's high places his prey;
And ye, O her desolate daughters!
Were scattered all weeping away.

While sadly we gazed on the river,
Which rolled on in freedom below,
He demanded the song; but, oh, never
That triumph the stranger shall know!
May this right hand be withered forever
Ere it string our high harp for the foe!

On the willows that harp is suspended,
O Salem! Its sound should be free:
And the hour when thy glories were ended
But left me that token of thee;
And ne'er shall its soft note be blended
With the voice of the spoiler by me."

北米のヱーカーズ夫人も泣き悲しむやうに見たてゝ居る、

"A weeping willow, whose long boughs sigh,
And shiver, and sob, as the winds go dy,
Like a sorrowful woman, standing there
With drooping garments and drifting hair."

悲しみの象徴を去つて弱々しい其姿に寧ろ謙譲の德を寄せたのはマクレアン夫人てある、

"Green willow! over whom the perilous blast
Is sweeping roughly, thou dost seem to me
The patient emblem of humility
Waiting in meekness till the storm be passed,
Assured an hour of peace will come at last;—
That there will be for thee a calm bright day
When the dark clouds are gathered far away."

英吉利には種々の柳があるうちに、絹柳（きぬやなぎ）S. viminalis は普通何處にも逢遭し得る十呎程の小さき木てあつて古より籠や行李や船や椐などを作るに用ゐる爲めに培養も甚だ盛大てあるから記事文になど數々讀むけれども詩歌には仲々現はれ出ないやうである。猿柳（さるやなぎ）S. caprea も甚だ普通てあつて在らざるところなく柳屬のうち最も早く春に花さくうちの一つて、著しく目立つて美しいけれども是れも詩歌には活動して居ない。しかし Willow なる總名のもとに詩人は或は是等をも區別せずに歌ふて居るかとも疑ひ得る餘地はある。

若し更らに北米に足を入れてみると、文學の方面からは英本土其儘の楊屬柳屬が歌はれる外に、北米普通の猫柳（ねこやなぎ）S. discolr なる至つて小さき木てはあるが銀色の柔荑て春を飾る柳が數々歌はれて居るやうてある。傳

説の意義が聯想に生じないからして詩人は自由に美點を捕捉しやうとするけれども素義から出でたる俗名を弄ぶ氣味のものもある。試みに三篇を次に擧げてみやう、マリー、イー、ウィルキンスとエミリー、ハンチントン、ミラーと、マリアン、ドーグラスとてある、

"Now spring is stirring to arise
Upon her violet pillows,
Now, purring softly down the road,
Come little pussy-willows."

"Guess what Doris told me?
If you look,
On the meadows growing,
By the brook,
Little furry pussies soft and gray
On the slim red branches swing and sway,
Cuddle close and never run away.
Just the dearest pussies,
Small and sweet,
Not a speck of any tail
Or feet."

"The drift of the gateway is dingy and low;
And half of yon hillside is free from the snow;
Among the dead rushes, the brook's flowing now;
And here's Pussy-willow again on the bough!"

（未完）

故高山林次郎君の天才に就て

田中喜一

僕もいつか一度は、明治文壇の才人故高山林次郎君の性格と、事業とに就て、僕が宿年懷抱し來たつた意見を公けにしてみたいと思つて居るのであるが、今は

まだ其機を得ない。それはいづれ周到に、精密に、樗牛全集を讀破した上の事としやう。こゝでは、ただ僕が兩三日前、本誌前號に掲げられた高山君に對する諸家の評判を讀みもてゆくにつれ、次第に僕の念裏に結胎した感想の一つ二つを平直に抒べて見やうと思ふのである。

德富蘇峰が『經世家』たるを以て、教養ある男子の當然有つべき理想としておるが如く、高山樗牛は『文明批評家』たるを以て主張ある文士の必然採るべき天職としておつたのである。而して僕の意見では、其の期待したところのものを實踐したことに於て、高山君は貧かに德富氏に優るところがあつたとすれば、こゝの評家の二三が、高山君に擬するに文明批評家を以てしたるは、其の當を失したものといへない。

成る程『文明批評家』は好個の稱倣である。しかし之の字面を取つて、之をして徑ちに高山君の性格と事業とを標出せしめんには、其の意義あまりに茫漠に陷り露佚に流るゝの嫌があると僕は思ふ。其故如何とならば文明批評家なる語は極めて廣濶なる意味を蘊し得る語であるから、嚴密なる使法を以てしても、哲學者、詩人、藝術家、歴史家等が咸な文明批評家の範疇に屬するものと見らるべきは勿論、(高遠なる見地よりしては)科學者の職分と雖もなほ文明批評家たる圈外に出てぬと見られ得るのである。

是等諸種の專門家の目的とするところが、畢竟するに人生の批判と、統一と、助長との外になく、又たあること能はざる以上は、平等に孰づれを文明批評家と謂つても差支なきはづではあるが、ひとしく人生の批判と、統一と、助長とを目的とするとはいひ、其れが據る理想と、其れが用ゐる方便とにして大に異なるからは、ある一種の專門家を抽稱する場合には、僕は其の類によるより、其の種によりて、之を呼ぶのが正當てあり、且つ便利であると思ふ。

高山君の天才はいかなる種の『文明批評家』として最も發揮せられておるか。是れ僕が其の解決に大なる興味を感ずる問題である。その品質の高下と、技巧の精粗

とはしばらく措き、とにかく高山君の才能の多角的てあつたことは、彼れの遺業樗牛全集が事實の雄辯を以て優に證據立てゝゐるところである。樗牛全集に收められたる言論と、主張とが、汎く歴史、傳記、哲學、科學、藝術、宗教、教育、世相に亘りて、千紫其の妍を爭ひ、萬紅其の美を競ふてゐるのは、實に文壇の（一偉觀と云ふことが出來ずば、）尠くも論場の一奇觀といふことが出來ると思ふ。

この事實はたしかに高山君の興趣が多面であつたことを語つてゐるが、高山君の事業が偉大であつたことについては、まだ尠しも語つてをらぬのである。本來多面なることゝ、偉大なることゝは交渉極めて薄きものであつて、多面なるもの必らずしも偉大なるを期すべからず、偉大なるには必らずしも多面なるを要せぬのである。興趣多面なる才子にして偉大なる事業を成したものもあるし、事業偉大なる豪傑にして、また多面なる興趣を抱いたものもあるが、畢竟するに多面なる興趣と偉大なる事業との關係は多くの場合に於て、"because of" にあらずして、"in spite of" である。されば高山君はすでに多面なる興趣を抱く才子であつて、また偉大なる事業を成した豪傑であつたかも知れぬ。しかし僅かに高山君の多面なる興趣を視て、徑ちに諸を高山君の偉大なる事業の成分であると思ふものがあるなら、それは不幸にして其身未だかつて一たびも偉大なる事業に接觸せず、其心未だかつて一たびも偉大なる事業を默會したことのなき俗人であらねばならぬ。高山君にして別に高崇なる品性と、深雄なる天職との世に傳ふべきものがあるから、多面なる興趣の如きは有るも高山君の誇とするに足らず、無きも高山君の累とするに足らぬほどのものである。

「プレトウ」の靈才にして漸く詩を擲ちて思を哲學に潛め「ゲエテ」の巨漢にして終に彫刻を棄てゝ想を詩に專らにしたるを觀、また多能なる「ライプニッツ」も重に哲學によりて其の名を傳へ、多技なる「レオナルドウ」も特に繪畫によりて其の譽を馳するのを看ても、Versalility が Dillentantism の母たることは易いが、

Geniusの朋たることは難いといふことが悟らるゝのである。

高山君の情趣は複雑のものであり、高山君の才氣は縱横のものであつたにちかひないが、しかし「プレトウ」や、「ゲエテ」や、「ライブニッツ」や、「レオナルドウ」がUniversal genius たらざりしが如く、高山君も（彼れの事業の實跡が炳かに示すとほり）たしかに Universal genius ではなかつた。然るに世には彼れが力量の範圍を撿討せず、彼れが資質の徴候を考覈せずして、漫りに彼れは哲學を講じたことがある、彼れは歴史を書いたことがある、彼れは創作を試みたことがある、はた晩年に及んでは彼れは偶々宗教を談じたことがあるといふ極めて平庸にして、淺薄なる事實に據り倏ち彼れに擬するに哲學者を以てし、歴史家を以てし、詩人を以てし、なほそれに厭きたらずして性靈上の教師をも以てせんとする人がある、かゝる人は多分まだ眞正の哲學者、眞正の歴史家、眞正の詩人、眞正の性靈上の教師等が、いかなる者であり、いかなる事業を成したかを知らぬのであらうが、自身見聞の狹さと學識の卑さと、思慮の薄さがために、折角高山君を揚げんとして、反つて彼れを貶してをるのを見て、高山君の爲めに無量の感慨を催ふすものは惟ふに獨り僕のみではあるまい。

僕は決して冷酷なる nihil admirari を信條としてをるものではない。僕が醜劣を厭惡することの遠く人に過ぐるあるは事實ではあるが、優秀を欣羨することの夐かに人に超ゆるあるもまた事實である。たゞ凡百の事件と物件とに對して、僕には多年の朴學と靜觀とによりて養ひ來つた獨特の理論と直覺とがあるので、みだりに世人の意見に附和することが出來ない場合が極めて多いのである。人才鑑識の一事に關しても世人と所見を異にするは、やはり物界と人界との万有に對して、僕が平生懷抱する見識と、主張との偶然發露したのに過ぎぬ。されば時ありて虚名を青雲の表より引下ぐるあり、てはなくして、ときありて實質を風塵の裡に見出だすこともあるも、之れを要するに僕の期す

るところは僕の立場より在るがまゝに物を視、視るがまゝに事を言はんとするに過ぎぬのである。

夫れはとにかく、高山君の天才の品價に關して、僕は十二分の理由を以て、全く世人の意見に反對せざるを得ない。僕は高山君の天才は、學者として、詩人として、はた史家として、將た靈界の敎師として發動したるものとは信ぜぬのである。僕は千慮を積み、萬考を重ねたうへ、高山君の性格と、事業と、主張と、經綸とは、ひとり an Essyt, Pure aud siuple としてのみ鑑賞せらるゝものであると斷言するのである。

なる程、多趣にして多能なりし高山君の云爲を穿鑿すれは、學者に類し、詩人に類し、史家に類し、靈界の敎師に類したところのあるを世人が發見するは極めて自然の事と思ふ。しかしそれが爲めに、高山君には別に眞主張と、眞頭骨の存するあるを忘れて、直ちに彼れを學者に擬し、詩人に擬し、史家に擬し、甚しきになると靈界の敎師に擬せんとするは、すこしく早計に失することゝ思ふ。

才能の多寡の段階は殆んど無際であるから、世には高山君の學識なくして、自づから學者を以て任じ、高山君の詩想なくして、自づから詩人を以て任じ、高山君の史見なくして、高山君の信驗なくして、自づから史家を以て、或は靈界の敎師を以て任ずる者のすくなからざるを視るのである。されば高山君が隻軀にして是等の物を併有したる事實は、たしかに文藝史上珍とするに足らうが、是等の物は悉とく凡庸と平板との域を脫し得るものではない。されば高山君の天才を稱揚しながら、其の發動の證左として是等の物を擧ぐるは、右に議論を以て其存在を假定しながら、左りに事實を以て其存在を否定するにひとしきものである。世人が彼れの天才たるの實跡に據りて、其の天才たるを證せんとせずして彼れの庸才たるの實跡に於て、其の天才たるを證せんとするは、口徒らに高山君の天才たるを呼稱しながら、心密かに彼れの庸才たるを暗示するに等しく實に世間是れに優さるの Arouy があらうか。其心に血あり、其の眼に涙ありて、眞に永久に高山君の

偉業と、盛名とを擁護せんと志すものは、決してかゝる輕擧に出づるわけにゆかぬ。高山君は彼れの哲學を以てしては、彼れの創作を以てしては、彼れの歴史を以てしては、將た彼れの信仰上の經驗を以てしては、庸才たるを免れぬのであるが、しかし彼れは彼れのEssay によりて曠世の一大天才たるを得るのであると僕は信づるものである。彼れの天才を索むるに彼に於てせずして、此に於てす、すこしく世人と其の選を異にするのは僕には高山君の天才を心讀して默會するところがあると深く自づから恃むからである。

こゝには彼れの長所を發揚するのが僕の目的であつて、彼れの短所を指斥するのは僕の目的ではないから、彼れの評論の優秀なることに就きて尠しく述べてみたいのであるが、彼れの哲學や創作や歴史や宗教上の經驗の凡庸なることに就きては全く語りたくないのである。しかし世人の所信に反對しながら、其の根底を明かにせないのも、彼等より怯懦の行爲と誤認せらるゝ虞れがあるから、僕はすこしく哲學者として、詩人として、歴史家として、性靈界の教師として、顯はれた彼れの技倆につきて僕の所信を告ぐるの責があると信ずる。

高山君は學者ではなかつた。しかし彼れに在つては學者たること能はざりきといふよりも、寧ろ學者たることを欲せざりきといふが反つて適當であるかも知れぬ。高山君は大學に居つて美學を專攻した士であるが、美學に於ける彼れの造詣の邃深でなかつたことゝ、美學に於ける彼れの會得の玲瓏でなかつたことは、彼れの著述と言論とが優に證據立てゝ居る。

美學に關する高山君の著作を憶ふとき、其の標題の故を以て、其の體裁の故を以て、彼れの『近世美學』は何人の念頭にも先づ起るところの心象であらう。いかなる事情のもとにあの書が成つたかは僕の今知り得る限りではないが、あの書は決して美學者たる高山君の名聲を擁揚するほどのものではないことを僕は高山君の爲めに惜むのである。其れに盛まれたる議論が膚淺にして清新の氣象に乏しく、其の敍説が蕪雜にして、

徹底の精神を缺いてゐるといふ非難に對して、僕は辯護の辭に窮する者てある。品題が史的事實であつたから獨創を施こすの餘地がなかつたといふ人があるなら、僕はそれを一片の無效なる推諉と認むる外はないのてある。史的素材は新たなる社會の需求に應じておのれの存在を持續せんが爲めに、絕へず新たなる意義と、新たなる價値の發展を吾人に要めつゝあるのである。されば經驗博くして、識見隆き學者來つて、過去の出來事に新意義を附し、新價値を與へて、こゝに新たなる史的事實は生ずるのである。「シレエゲル」以前に「シレエゲル」の發見したる史的事實なく、「コムト」以前に「コムト」の發見したる史的事實なく、「ヘーゲル以前」に「ヘーゲル」の發見したる史的事實なく、「ランケ」以前に「ランケ」の發見したる史的事實はなかつたのである。もし高山君にして、眞に近世に於て順環消長したるもろ／＼の美學說の間に存在する繼續的精神を商榷する抱負と、見識をもたれたならば、何も僕々乎として市井流行の美學史の爛熟せる批判と、陳套なる敍說とを襲用するの陋を簡ぶことはいらなかつたらうと信ずるのてある。一たび現代社會に磅礴する哲學思想を默識して體得したらんものは、「テイン」「ギユヨウ」乃至「サンタヤナ」ならずとも「ヴインケルマン」「レッシング」「カント」「ヘエゲル」「ショッペンハウアル」等の學說に新意義と新傾向とを發見し得るはづてあつて、「ボザンケット」獨り彼等の學說に最後の論告を與へたのでないといふことを覺るべきではないか。

また翻つて高山君が美學に關する特殊の問題に關して、隨時發表せられた主張と論議なるものを見るにこゝにも、創見と卓識との群を拔くものゝ絕へて無きは、僕の遺憾に堪へざるところである。例へば彼れは美意識の心理的說明、或は抽象美と具體美との關係の如き充實せる學殖と、犀利なる見識とたにあらば、無限の開拓と創業とを試み得べき會心の好題目を取扱へながら、たゞ前人の足跡を追躡する外、何等の工夫、何等の發明をも試みることなくして止んだのてあつ

た。高山君は何故に近ごろ疾風迅雷の勢を以て、哲學界の思索方法を刷新し、更らになほ刷新せんとしつゝある進化論、心理學、比較研究法等の新利器が胚胎するところの意義と價値とを鑑賞することをしなかつたのであるか、しかし僕の觀察の公正を保つために、こゝに高山君の爲めに一つ聲明しておかなければならぬ一事がある。それは美學に關して高山君の知識と直觀とがかくの如く淺薄であり、模稜であつたに拘らず、題目の苟も繪畫、歷史美等美術と美經驗とに關するものあるにいたれば彼れは往々驚歎すべき程鋭敏なる歎察と、深邃なる感覺と緊肯なる判斷とをはたらかしたといふことについてゞある。しかし是れは彼れの聰明なる知力と、精粹なる感性と、博宏なる讀書とより來つて居つたので、決して彼れの粗學なる美學より來つて居つたのではない。美的對象に對して彼れの造つた實際の判斷は、彼れの學說と一切關係なく、彼れの學說より遙かに勝つておつたのである。

美學に於ける彼れの造詣と直觀とのかくの如く淺薄であり、模稜であつたことにつきては、之れが淵源なるものを繹ぬるはさほど困難のことではない。それは彼れに廣汎にして確實なる哲學上の系統即ち論理をもたなかつたことである。

彼れは經驗全體を包含し、一統する單なる原理の存在を假定することは、あらゆる種類の活動を理解するに必要であるといふことを悟らなかつたのである。彼れは經驗の宇宙を分割して、之を科學的、及び道義的乃至審美的の二つとなし、科學的經驗に對しては極端なる實在論者となつて、其の對象及び法則は人の性情を超越する純ら必然的のものでありと想像し、道義的乃至審美的經驗に對しては極端なる主觀論者となつて、其の對象及び法則は全く個人の勝手なる嗜好によりてのみ支配さるゝにつきて純ら主觀的のものであると想像しておつたのである。哲學に於ける彼れの造詣と、覺悟とは彼れをして科學的經驗と道義的乃至審美的經驗とは人が自家の經驗を組織する方便につきて永年苦心した結果初めて最捷にして、最利のもの

として、工夫し建設したので、素と全然同質（Bong-enions）のものであるといふことを理解するに到らなかつたのである。随つて彼れの見地は科學的即ち普遍的側面と、道義的側面即ち個人的側面とは共にひとしく單一なる心意が便宜のために構設（posit）したものであるから、科學的側面も觀念性によりて支配せられておるとほり、道義的乃至審義的側面も客觀性によりて維持せられておるといふことを理解するに到らなかつたのである。しかし經驗の性質を斯く觀るといふことも、やはりいかに經驗を取扱かつたならば、最もよき効果が擧るであらうかといふ思考より由來したのであるから、根本的に經驗の批判と統一とに從事する者は離れても自然に到達しなければならない見地ではあるが、場合によりては必らずしもそうせなくとも大した弊害は生ぜぬこともある。例へば經驗の極小部分の批判及び統一だけを目的とする或る萬有科學者の如きにいたりては、彼れの研究の對象は全く人の情意と理智とを離れて永久不變の法則を具足して存在するものと見做して、聊も不都合はない。しかしこの場合にあつても其の對象はもと〳〵孤立するものでなくして、經驗の宇宙の一成素に過ぎぬのであるから、彼れが其の對象の性質を一層精緻に認識して、一層正確に限劃せんと志すに隨ひ彼れの觀察は次第に廣濶となり彼れの思考は次第に深邃となりて、彼れが意識すると否とに關せず、彼れは一歩、一歩に觀念論者となり一元論者となり行くのである。萬有科學の泰斗たる「ヘルムホルツ」や「ロスタンスキイ」、「クリッフォルド」等の進路は如上の事實を證明して餘りあると思ふ。

萬有科學に於てすでにこのとほりてある以上は、精神科學に於てはなほさらそうであらねばならぬ。精神科學にありては、其の研究の對象と、其の研究の立場との特性は、いかなる微細の事實でも、直ちにそれをして經驗全體と關係せしむるにあらざれば、一切妥穩の批判と評價とは到底得られないのである。高山君が美學に關して卓越したる見識と精緻なる情操を闕いておつたのは彼れの粗笨にして散漫なる二元觀に多くは

因由したのである。彼れの假定を論理的に追窮すれば美學に於ける重要問題たる寫實と理想、自然美と人工美、形式美と性格美、科學と藝術、工藝と美術等の關係の解釋としては最も不合理にして最も沒分曉の言辭を弄するよりほかに途はないことになるではないか。

（未完）

亡兄高山樗牛

齋藤信策

樗牛と予とは本當の兄弟であるが、幼い時より樗牛は養子に行いたのに、加ふるに高山家では早くより他郷に暮したのであるから、予は十才頃迄は樗牛の兄であることも又見たことも無かつたのである、其後も始終離れて居つたので、同じ兄弟ではありながら極めて緣遠い風であつた。寧ろ畔柳芥舟君や、三浦菊太郎君や、藤井健治郎君などは予などよりも遙に長く樗牛を識りもし親しみもしたのである。予はたゞ暑中休暇に樗牛が歸省した折と東京に出て來た二三年間に親しく近いて居たばかり、兄弟と云ふ間柄にしては少々あつけない近づきであつた。是れ故に樗牛の追懷としても其性格の發揮とか學説如何とか、つまり第三者から見る批評などは思ひも寄らぬ事である、勿論同じ血緣の仲であるから、こんな批評をこと／＼しくやる必要は勿論ない、予は學者としてよりも又天才としてよりも唯彼を吾等兄弟の中で優れた兄上として追想するのみである、予の追想の一家言なるは固より云ふまでもない。

樗牛と、予とは眞の兄弟であるが、實は甚だ似ない。大町桂月君がある會場で予に酒を強いた時に予はどうも出來ぬと辭退した所が、桂月君はすかさず、君の兄さんは隨分酒を飲んだものであつたが君は出來んのか、君は本當に不肖の弟だと云つたのでお互に大笑ひをしたことがあつた。この言ひ草から予は大に桂月君を好く樣になつたが、實際文字通り予は樗牛に甚だ似ない。予及び樗牛の父は高山家の主人の實弟である、

所が高山家に一人も小供がないから第二子てあつたため樗牛は高山家に養はるゝ身となつた、全體彼は兄弟中尤も高山式てあつた、予は之に反して齋藤式てある。つまり樗牛はもとの血統に再び歸つて行いたのてある。

高山家は予の齋藤家と共に士族てはあつたが極く卑い階級て、本當の武士などゝ銘打つわけには行かなかつた。齋藤家は古來普通の人々のみてあつたのに引き替へて、高山家は古來一かどの才人を多く出した家である。第一に高山家は代々武藝に丈けて居て、祖先の中のある者は道場を有した位てある。固より身分は卑しかつたが確かに技能才幹は凡人以上てあつた。これから見ても高山式は第一に體軀に於て優れて居る、樗牛なども兄弟の中て類を異にした位に第一の壯健者てあつた、體格の點より見ても彼は確かに高山式てあつた、之に反して齋藤式は蒲柳の質てある。高山家は唯に武藝に長けたのみてなく、卑い階級の士族としては似合はぬ程に學問にも長じて居つた。固より學者として銘打つた者はなかつたが、祖先の中には漢文を能くしたものもあつた。それから不思議なのは書畫の才を持つた者が古來多いことてある。例へば予等の父の伯父に當る人て上野柳齋と云ふ人があつた、これは立派な書畫きて實際畫家として暮したのて、畫は岩駒風てある。固より繪畫史を飾る樣な人てはないのみならず、郷里てもあまり知つて居る人もなかろう、がしかし軸物よりも少さな畫幀にはなか〳〵機智に富んて洒脱な畫を書いたやうてある。この人は風變りの人と見えて總領てあつたけれども家を嗣かず、後には飄然松前に渡つて遂に終る所を知らずとの事てある。この畫家は九皐と號したのて、樗牛が能く別號としてこの文字を用ゐたのも、これより思ひ附いたものてあろう。それから。高山家と重縁の關係ある上野家現在の主人は書の巧妙な事驚くべしてある、なにも銘を打つた書家てはないが、素人にしてあの位書くものは實に鮮いのある、この人も確に高山式てある。それから予及び樗牛の兄即ち齋藤家の總領も亦書が甚だ巧妙てある。

の長兄は體格の點は全然齋藤式で樗牛とは正反對であるが、書にかけては全然高山式で、上野家の主人と並びて優劣なしと云ふ有樣である、予は確かに長兄としても尙優に世人に其巧妙なる書手を誇つても恥ぢかしくない事と自ら常に信ずるのである。樗牛はどの點に就てもこの長兄に劣る所なかつたが、書にかけては到底頭も何も上つたものでない、實際この點ばかりには頓首平身して生涯眞に驚服して居つたやうであつた。之に比ぶれば樗牛は比較的に字は拙である、固より才子肌であるから字は巧妙で百人以上かも知れぬが、兄に比べてはお話しにならぬ、殊に少壯の時に骨拔き餡のうろ〳〵したやうな、予などは大嫌ひな菱湖を習つたので其風は一生取れなかつた、勿論淸うて人好きのする書風であつたが、あの潑剌な風發の才に比べてはあまりに異彩の無い面白くない字であつた。こんな風に高山家の血統を引いたものには小才ではあるが、本當に百人並みの才幹を持つた者が多かつたので、つまり樗牛はこの等の高山式の小才幹を一身に煥發したのではある。しかしこの高山式は決して羨むべきものでは無いのである。即ち才人もあつた代りに氣違ひも遇々出たとの事である、精神病者もあれば自殺者もあつたらしい。予は勿論之を以て直にルーソーやバイロンやシヨーペンハウエルの家も遇々狂者を出した事に思ひ比べるものではない、恐らくは樗牛とこんな事實とは何等の關係もないのであろう、丁度最後の日の二三日以前に樗牛はこれ等の事實を悉く其妻にさらけだして話したとの事であつた。彼は晚年に

『此生の憂苦を免るゝの道たゞ三つあり。永き戀か早き死か、然らざれば狂。あゝ吾人は孰れを擇ばざるべからざる乎』

と云つた事があるが、予は直に之を以てニーチエの詩

Das allein erlöst von allem Leide—
wähle nun:
den schnellen Tod
oder die lange Liebe.

を心譯したものとは思はない、あはれニーチエはニー

チェにして樗牛は樗牛である、彼は早き死と永き戀の外に更に狂を加へた。あゝ狂乎、予に取りてはこの樗牛が詞に云ひ知らぬ哀れさを覺ゆるのである。

予の郷里、從つて樗牛の郷里は最上河口の莊内で酒井藩である、こゝは第一番に徂徠學を以て藩の學問とした所の一つである。故に高山上野家でも徂徠學をやつたことは云ふ迄もない、且つ予の家にも徂徠學派の讀破せねばならぬ史類とか老莊荀子など皆一通りは備つて居るので、學問をやる人は大抵徂徠學風になるのである。これ故に維新前迄に敎訓せられたものは詩を作りもし文章を書くなどの事もしたのである。然らば樗牛が徂徠學風の感化を受けたかと云ふに、これは頗る疑問である。莊内藩が維新後南洲と交りてから俄かに陽明學がはやりだしたので徂徠學が少々衰へたは勿論てあると共に、樗牛は早くより小兒の時に養父に從ひて故郷を出たので、郷里の感化を受けたこと殆どないと云つても宜しい。樗牛が文筆に長けたのは全然徂徠學とは關係がない、彼の才能と意氣は徂徠學風の小才を振り廻して獨りよがりに學識を衒ふ樣な小見識とは甚だ違ふ。彼の才は確かに人格の修養と自由なる考究と獨創の識見に依りて養はれたもので、明かに本當の意味に云ふ大學の所產である。併し荻生徂徠其人物には頗る驚服して居つた事は事實である。彼は辨道殊に辨名を好讀した、加之彼の書庫には彼の祖父が書寫した徂徠問答書などもあつた、彼が鎌倉に靜養して居た折であつた、ある時予が訪ねて行いた時分に大學で井上哲次郎博士の徂徠の講義は非常に面白いと云つたが、樗牛は早速徂徠は實に豪らい李攀龍王元美などは比べにもならぬ人間であるのに、天の寵靈によりて李王に接したなどゝ云つて徂徠がこの小人物を崇めたのは奇怪千萬であると云つた。慥かに徂徠は豪らい、予は山陽の樣な小才を振り廻す人間は大嫌いだが徂徠の如き大天才は非常に好きである、彼は明かに弘法と共に日本に於ける天才の一人で、全く孤立で摸すべからざる者て、眞に天惠の人物である、こんな人間こそ眞に有難みがある。樗牛も同じく才氣の人として徂徠を

好いたに相違ない、併し彼は終に弘法と徂徠に就ては一言も云はなかつた、恐らくは機會がなかつたのであらう。

樗牛は萬人の見るが如く、明かに詩人肌で情感の人である。高等中學時代にはコレリッヂ、ウォーヅオース、シェレー、バイロン、キーツ、テンソン、ブラウニング等悉く讀破した樣であつたが後年にはこれ等の詩集をバイロンの外は見棄てたのであつた。但し大學に來てから以來は獨りハイネを殊に讀んだ樣である、其詩集は晩年も其座右を離さなかつた。あはれハイネ、人間天眞の尤も美しき至情を併せて其弱點をも尤も直截に飾りなく說き明かしたのは云ふ迄もなく、殊に古今特得の諷刺嘲罵を恣にした所、更に晩年には十年の間病床に起臥して生命の辛らさと苦しさと共に又人間の天性の至醇なる情感の美しさと甘さを味ひ盡して且つ笑い且つ惱みたるこの絕世の天才の詩歌をば、樗牛の如き人て誰が好かぬものてあろうか。世には所謂賢人學者なんど、病める人に向つて慰籍たらんと欲して病は解脫の一なりとか、何とか都合のよき尤もらしき說法を爲すものもあるが、本當に苦しみ惱みて作る事の知ぬ人にはこんな慰藉の甘言が果して何の役に立つか、恐らくは闇の中ては自ら嘲り罵りて惱みと怖さを忘れたハイネの詩が却つて大なる慰藉を與ふるに相違ない。樗牛は多分ハイネによりて晩年の病苦を少からず慰めた事てあらう。其上樗牛は才氣人に過ぎたると共に中々人の弱點を見拔いて嘲笑する方て隨分の皮肉屋てあつた。例へばある時晩食の際に多分のカツレツを喰ひ殘したので皆之を愛犬に抛げ與へたのである、所て奥樣が傍に居つて犬なんどにそんなにやるのも勿體ないから女中にもやつては如何と注意した所、樗牛は平氣て女中にやつても尻尾は振るまいと冷笑した。またある時大のお饒舌の婆さんの一群が垣根の傍を通うて行いた時分に樗牛はあれこそはショーペンハウェルの所謂 etwas Nichtsein sollendes てあろうと云つた。又ある時はこうだ、この本は誠に善いと云ふから、見た所が上田敏君の「みそつくし」である、如何にも文章

と云ひ才氣と云ひ上田敏君は當時の名文士であると云つた所が、樗牛の答へは意外であつた、なに文章が宜(よ)いと云ふのではない、この本の中の紙は二枚折になつて居るから截(き)れば裏にも書かるゝので、紙質はよし、筆記帳には誂(あつら)へ向きであるとの事。これから、この本は備忘錄として机の上に置かれた樣であつた、其表紙にはペンで樗牛者天下第一之善人也などゝ書いてあつた。萬事此通りて、予などは隨分やりこめられた方であつた。この性格の人にして、ハイネを愛讀するは固より不思議てはないのである。大學に來て殊に卒業の年の正月に病氣て轉地療養の身となつた時には實際『我袖の記』にある樣にハイネ詩集拔萃を携へて旅行したやうだ、恐らくはこの病と惱みの身になつて初めてハイネを識つたことであろう。この拔萃を見ると到る處會心の詩句に線を引つてある、二重線もある、ah! などゝ書きつけた所もある、殊に嘲笑に充ちた皮肉の詩などはその會心のものであつたらしい。例へば

Ich trat in jene Hallen,
Wo sie mir Treue versprechen;
Wo einst ihre Thränen gefallen,
Sind Schlangen hervorgekrochen.

などや

Du stolzes Herz, du hast es ja gewollt!
Du wolltest glücklich sein, unendlich glücklich
Oder unendlich elend, stolzes Herz,
Und jetzo bist du elend.

又は

O, dieser Mund ist viel zu stolz
Und kann nur küssen und scherzen;
Er spräche vielleicht ein höhnisches Wort,
Während ich sterbe vor Schmerzen.

などには二本線を引いてある。それから

Vorbei sind die Kinderspiele,
Und alles rollt vorbei,
Das Geld und die Welt und die Zeiten
Und Glauben und Lieb' und Treu.'

の詩には ach! と記してある。

Nun ist es Zeit, dass ich mit Verstand
Mich aller Thorheit entled'ge;
Ich hab' so lang' als Komödiant
Mit dir gespielt die Komödie,

などにも二重線がある。

Ich, ein solcher Narr, ich liebe
Wieder ohne Gegen liebe;

には線を引いてあると共に其頁の上に自分で書き附けてある、樗牛は小説や詩などを讀みて面白き句に到ると必ず其頁の上に書き附くるのが習慣であつた。それから

Lieben und Hassen, Hassen und Lieben
Ist alles über mich hingegangen;

の所にはグリルパルツェルの「サッポー」の中にある

Lieben, Hassen und kein Drittes?

の句を書き附けてある。それからハイネの海の歌などは海岸で波の音と一所に讀んだらし。名高い "Nachts in der kajute" の所には逗子と記してある。それから

Hoffnung und Liebe! Alles Zertrümmert!

を以て始まる "Die Schiffbrüchige" の歌は彼の大好きの詩で、これには實際熱海と記してある、例の二重線である。『我が袖の記』には『想へば戀や望みや殘りなうやりはてゝ……』として樗牛式の意譯を載せてある。それから

Einsam Klag' ich meine Leiden
In vertrauten Schoss der Nacht;
Frohe Menschen muss ich meiden,
Fliehen scheu, wo Freude lacht.

の詩にも特に熱海と銘打つてある、この句は我袖の記の終りに書き添えてある。兎に角彼はハイネに於て自分の尤も好きな詩人を見出したに相違ない。彼はケールネルにもバイロンにもなれなかつたらハイネになろうと云つたが、實際その通りで彼が詩人なつたらば確に尤もハイネに近き者であつたろう、即ち彼の感情は明かにハイネの詩集に共鳴をしたのである。他人はい

ざ知らず予に取りてはこの詩集拔萃の線を引いたものが甚だ興味がある。

小說類は無論讀んだ方だか比較的に多くはなかつたに相違ない。尤も晩年病氣になつてから本當に小說を讀んだのだ、ゾラやドーデーやヨーカイやメリマンやゴルキーなどは皆此時期に讀んだらしい、併し尤も大なる感興を以て讀んだのは恐らくはズウテルマンの『フラウ、ゾルゲ』である。彼はどんなに之を感讀したのか、丸善書店て何かに就て人々の意見を敲た時に十年以來尤も面白い本として彼は此小說を擧げたのでも明かてある。尤も何人でも此小說を讀んで感動せぬものはなかつたろう、予の如きものでも『カッチェンシテヒ』よりも此方が何んだか深く感じられるので、三回讀んだが何時ても泣かせらるゝのてある。青年を動かす事の大なる恐らくは此小說の右に出づるもの稀てあろう。樗牛が感動したのも固より不思議はない。この本を繙いて見ると到る處に線が引いてあると共に、其中の殊に人を動かす佳句を到る處に頁の上に書き附けてある。隨分精讀したものらしい。而して此の本の終りに頁にも亦

Nichts ist wahr, alles ist erlaubt.—Nietzsche

と書いてある。彼は昔から理窟は羽織の紐と同じてどうにでも附くものであると云つて居つたが、このニーチェの言は正に彼の云はんとする所を遺憾なく云ひ表はしたものである。恐らくは詞の中でこれより好きな名句彼にありては無かつたろう。この句は殆ど到る處の本や備忘錄に書き附けてある、多分はファウンテンペンを持てば手あたり次第に此の文字を書いたものであつた。あゝ世に眞理なるものなし、凡ての物は唯許認せらるゝのみ……樗牛の活動と抱負は慥かに此の一大事實の上に築かれたものてある。

萬人の見る通り樗牛は慥かに學者と云ふよりも才氣の人で詩人肌の文章家で、讀者は先づ其云はんと欲する理窟よりも、其文章と感情によりて魅せらるゝのであつた。前號に戸川君の云つた樣に豪らくはなかつたろうが確かに魔力があつた。これに就て面白き話しが

ある、樗牛の終る年の秋、鎌倉に居つた時分にある時一人のお婆さんが訪ねて來た、是非樗牛先生に遇ひたいと云ふ、その時樗牛は平塚病院に入つた留守の後であつたから奥樣が出て應接すると、この名も知らぬお婆さんは懷から一卷の本を出した、それは時代管見てある。そうして云ふのには私は何も知らぬ者であるが私の子息が常に此の本を讀んで居るので、何氣なしに其傍て聞いて居ると何となし心にじみ〳〵感じて非常に動かされたので、一體何人の作つた本であると子息に問ふとこれはかく〳〵の人の作である、併しこの人は今病氣で鎌倉に養生して居ると聞いたので、俄かに憐れみを覺え悲しくなつて、そんな方ならば是非病を助けて上げねばならぬ、自分も嘗て大病であつたがある呪ないにて直つたから、此の呪ひを是非高山先生に告げねばならぬと云つて、子息の止めるのも聞かず、博文館からやつと先生の住所を聞き糺して今朝下谷からわざ〳〵參つたのであると半ば涙ながらに語つたのてあつた。而してお婆さんの尤も感じたと云ふのは『我袖の記』と『姉崎嘲風に與ふる書』の一部であつたとの事。此時樗牛が居ないのでお婆さんが殘念がつたが紀念にもとて奥樣にあてた樗牛自筆の葉書を恭しく頂戴して歸つたのである。樗牛の人を動かす事此通りてある。確かに彼は魔力を持つて居つた。而して彼は飽く迄でもこの才氣とこの感情で生涯押し通した方で、學問は雜誌記者として後年を送くつたから、やる閑がなかつたらしい。讀んだ書と云うてもそんなに多くはなかつたが、併し要領を摑まえて直に其本の價値を批判し得ると云ふ點は予ながら敬服せざるを得ない。併し若し天時を彼に與へて、靜思默想して眞の意味の學究の態度を取る事が出來たならば、此の才氣とこの意氣とを併せて學識はどんなに煥發した事であろう。今更惜むのも愚かてある。あゝ樗牛は畢竟樗牛てあつた然り『吾をして永しへに吾たらしめよ……。』

左の蘇東坡の句は樗牛の若い時には大好きのものてあつた、予なども今以て能く記臆して居る但し文字は少々怪しい。これは樗牛の直ぐ下の弟なる良本と云ふ

のと常に愛誦して居つた、この兄もなか〳〵に才人で樗牛にも劣らぬ者であつた。

是處青山可埋骨　　夜雨蕭々獨傷心
與君世々爲兄弟　　復結來世未了因

併し吾等の兄弟は早くより離散するの運命に遇うたのだ。あはれ龍華寺！是處こそは青山ではないとしても、山水の大觀風光の明媚、樗牛にとりては眞に骨を埋むべき地であつた。あゝ獨り殘された予にとりては此の句は殆ど讖を爲し居つたのだ。此の詩句の吟誦は即ち限りなき慰籍を齎らすと共に、又限りなき悲みしと哀れなる追懷を伴うて來る。

（完）

次號には故福澤諭吉翁の評論を集むべく既に應諾を得たる諸大家は左の如し

德富蘇峯氏　金子筑水氏　鎌田榮吉氏　山路愛山氏
戸川秋骨氏　他數氏

その他尚ほ續々依賴中なり



落後者の新天地

『讀賣新聞』

時勢の變遷の急激なるに方りては、或は不注意より、或は境遇より、或は識見の淺近なるより、往々其急轉直下の勢に外れて、落後するものなきにあらず。斯る人々は遂には其時勢に反抗する一の黨派を作らずんば已まざらんとす。是れ何れの國にても、何の時代にても、不平黨、ヂヤコビン派の絕ざる所以なりとす。然れども歐米に於ては、中央母國に於て落後するも、出でゝ新運を、殖民地若くは異域に試むるの道なきにあらざるを以て、落後者却て成功者となることなきにあらず。我國は維新の大變によりて、無數の落後者を出したるに加へて、他國にありては一二世紀の星霜を要する大事を、僅々四十年間に斷行したるを以て、落後者の多きは、歐米列國多く其比を見ず。更らに此落後者をして新運を試

みしむべき殖民地なかりしを以て、落後者は、一たび陣列を離るれば、終生、活の期あるなし。是實に人材を徒費するものにして、人物經濟より云へば非常の浪費と云はざるべからず。

然るに近年國狀一變して、我國は臺灣を得、朝鮮を得、滿洲を得たるのみならず、支那四百餘州は我が國人の活動するに任せんとし、南米、中米、南島、中央亞細亞、土耳古等もまた皆な我國人に雄飛の機會を與へんとす。是れ宜しく我國の落後者が、毅然として其新運を海外に試めすべきの時なりとす。然るに朝鮮、臺灣、滿洲等には、少しく我國人を見ると雖も、多くは尋常の市人にして、雄心を懷きたる功名の士に至りては極めて少なく、南米中米以下の地に至りては、尋常の市人すらも見る能ざるに至りては、我國人の志も、また淺狹なりと云はざるべからず。我落第政治家は、何故に新運を波斯、南島に試みざるや。我非役軍人は、何故に南米中央に至りて其劍刄を試めさゞるや。我功名兒は何故にジャワア、ボルネオ、中央亞細亞に、其膽力才氣を試めさゞるや。我失意の政黨は、何故に支那經營を以て復活の策となさゞるか。若し十年以前にあらしめば、此事或は至難なりしならん。然れども今や大日本帝國の聲譽は四海に光被し、苟も此帝國に屬するものにして、一劍を杖つき、牛策を畫せんとせば、四海の中之を迎へさるの地なし。此時に方りて、尙ほ屑々として盃襲を弄し、醇酒に醉ひ、美人に溺れ、陰謀を事とし、恃むべからざる轉運の圍助を待ちて空しく失意の中に考へんとするに至りては、何ぞ雄心なきの甚しきや。山田長政、クライブ、ヘスチングス、ブルック王の時代は已に去れりと云ふ勿れ。中央亞細亞、南島、南米中米は猶ほ十分に功名兒の霸圖を容るゝの餘地を有する也。

廣島長崎より海外に躍出する一種の女性は、世人之を輕侮して共に齒すべきものにあらずと爲す。常倫彝德よりせば、我儕また然らずとは云はず。然れども其身に寸兵尺鐵を帶びず、領事館のあらざる所、軍艦の至らざる所、新聞紙の達せざる所に孤行邁往し、其運命を賭して顧みざるの勇氣に至りては、遙かに功名兒の上にありと云はざるべからず。彼等の或る者は已にボルネオの女酋となりて、三國志を實現したるものあり。彼等の或る者は、小學教師地理の智識を超越して、ザンジバルに侵入したる者あり。西人曰く宗教の至る所、商人行き、商人の至る所、國旗之に從ふと。我國に於ては之に異なり、宗教と全然相反したる女性が異境開拓の卒先者たり。其巾幗の後に商人行き、領事行き、功名兒と宗教とは、最後に之に從ふの風あり。それ此の如く人後に落ちて、開境展土の力なく、僅かに日本居留民不平黨の首領たるに至りては、何ぞ其功名兒たるにあらん。實に香しからぬ女性に對してすら慚色ありと云はざるべからず。知らず、我落後者は、何を以て之に答へんとするか。我儕願くは與かり聞かん。

國語と思潮との關係

『太陽』 姉崎正治

物質文明の移り更りの始めに、ランプ亡國論が出た樣に、精神文明の潮流が高まつた今日ローマ字亡國論が出て來た。なる程、教育勅語を「Chin omoni」と書いては、何だか變に見える。忠を chū と書いては忠らしくない。保守家はこう思ふのは決して無理でない。然しながら能く考へ見ると、日清戰爭のときの宣戰の詔勅と日露戰爭のとを見ても、日本思想界の變化は著しく現はれてをる。前のはよほど漢文的であつた。相手が支那との戰爭に此事あるは自然である。處が今度の戰爭になると、臣民に對すると共に、實は世界に對せられると同樣の詔勅であり、その内容も文體も大に世界的であつた。外交文書と同じく世界に對しては、内容が世界的となれば、どうしても文脈も之に從ふ。勅語といへども、此は然らざるを得ない。その他になつては、文體も、場合によつては文字も皆思想の內容、感情の調子、發表の目的に應じて異ならざるを得ない、我々も決して文章文體と同時に文字まで變るといふのではないが、文章は即ち思想の代表で、思想感想感情が變化發達すれば、それにつれて文章も代はり、從て文字を代へても、今までの漢文くづしなかな又はローマ字に書くほどに變てなくなるといふのである。一例を擧げて見れば、

(一)(イ)詳卿百僚早朝晏退

(ロ)グンケイヒヤクレウハヤクテウシオソクタイセヨ

(ハ) Gunkei hyaku-ryō hayoku chō shi osoku tai seyo!

思想も文體も支那、それをかなにしても、ローマ字にして餘ほど變な心地がする、然しこれが西洋風の思想で又文であるとそれほどにない。

(二)(イ)バプテスマのヨハネより大いなるものは起らざりき

(ロ)バプテスマノヨハネヨリオホイナルモノハオコラザリキ

(ハ) Baptisma no Iohane yori ōi naru mono wa okarazariki

こうするとそほどに相違がはげしくない。此等はほんの一例であるがつまり、ローマ字亡國論者はその思想感情が何百年か昔の住人であるから、それを將來の明治の文字で現はすと、思想と文字との間に非常の違ひが出る。そこでどうしても新文字を用ひることは自分の思想を迫害せられる樣の心がする、從て新文字の日本は舊思想的舊文字の日本でない亡國の感がする。此は感情の問題であるが、この感情は中々大切なもので勢力の强いものである。つまり文字の奥には思想感情が根を持つてをるので、此の根を更へずには中々枝葉も變らない。思想の內容、思想の運用に變化が起れば、文章が變化する、その時になつてかなり、ローマ字なりに變更すれば、過渡の美は遂げられる、今まだ舊文體や漢語が橫行してをる、それを直に新字にするのは革命的には出來やうが、改革として變遷としては出來ない。(拔萃)

無責任なる豫告

『日本及日本人』

株式會社の新設廣告に、基礎鞏固にして利益多きを言はざる無し、或は年二割五分といひ、或は三割四割といふ、而して組織未だ成らざるに早くも解散を工夫するあり、蓋し權利株の義務株と化して累の己れに及ぶを恐るゝなり。新設の初めに於て誇張の言を作すは、斯くせずんば應ずる者なきが故にして、或は以て商業の常事と爲すも、嚴格にいへば、正さしく人を欺くもの、法文に照らしてこそ詐僞とならざれ、事實に於て詐僞たるを免かれず。

豫告して實行せざるは固より此に限れるに非ず、實は殆んど計ふるに遑あらず。豫約の語は多く出版事業に用ゐられ、豫約出版といふの流行語と爲れる程にて、中に豫約通り出版して違はざるもあれど、宛から豫告を忘れたる如くするも亦た少からず。書肆の豫約に違ふは紺屋の明後日と同じく目せられ、信用ある書肆にして爲めに信用を缺きしもの一二のみならず。商業界には違約食言の寧ろ普通にして、獨り之を咎むべからず、時として更に遙かに惡性なる者ありと云ふに至りて、抑々如何に觀るべきか。

學者の豫告を反古にするも珍らしからず。或る年數を限り、斯く々々の書を著はすべきを豫告し、甚しきは一生涯を通じて從事すべき著述目錄を豫告するあるが、實際何程も着手せず、着手するも一部分を果たすに止まり、他は全く放置して顧みず、此に就て何等の責任をも感ぜざるものゝ如し。事は盡く意の如くなるべきに非ず、豫告を果たさゞること、

必ずしも咎むべからざれど、其の餘りに甚だしき者に向ては勵精之が履行に勉めんことを望まざる能はず。

スペンサーは夙に綜合哲學の目次を掲げ、一生涯を通じて之を完成すべきことを豫告し、履行に勉むるの熱心なる、凡そ事の之が妨害となるものは悉く避けて當たらず、結婚さへも之を避け、生來孱弱なりし體軀を攝養し、遂に八十歲の長壽を保ちて能く豫告せし所のものを完成するを得たり。スペンサーの哲理及び引證の種々議すべきにせよ、其の一身を提げて豫告せし所を完成せしは大に稱揚を値ひす、學者にして豫告する所あれば、當に彼が如くならざるべからず。己れの內心に期せし事さへ、猶ほ能ふ限り實行を要するに、麗々しく印刷して世間に公告しながら、全く棄てゝ顧みざるは、誠に苦々しき沙汰ならずや。

又た一種の徒あり、彼をも爲さず、此をも爲さず、人の問ふあれば、則ち燕雀安ぞ鴻鵠の志を知らんと答へ、而して何事をも爲さずして終はる、是れ亦た人を欺き己れを欺けるなり。三年蜚ばず鳴かずして遂に大に蜚ぶ者なきに非ざれど、斯かる語は幾多無能の人に自ら慰むる理由を與へたり、三年が六年となり、十年二十年となると、後に至りて氣附くの常なり。堂々公言して之が履行に勉めざるは、たとへ惡意の混ぜざるにせよ、不德の行爲に入れざるを得ず、豫告と雖も一の約束なり、容易に爲すべきに非ず。若し公言して之を果たすの困難なるを悟らば、務めて過を蔽ひすべからず、濫りに豫約するの習慣に染めば、一時を苟もするの惡念を長ぜん。（拔萃）

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

盛裝して出でたる本月の趣味を見よ!!!

（新刊）

國木田獨歩著
小杉未醒畫

濤聲

定價八拾錢
郵税八錢
白クロース美裝

鎌倉夫人、波の音、號外、二少女等十三篇を收む

（新刊）

坪内逍遙著

鉢かつぎ姫
俄仙人

定價六十錢
郵税六錢

一は優婉極りなく一は瀟洒飄逸なる振事劇なり

（新刊）

早稻田大學總長 大隈伯爵序
梅澤和軒著

繪畫鑑賞法

定價壹圓卅錢
郵税八錢

東西古今の繪畫と畫論とを參照して作られたる和軒氏苦心の作

（文と畫）

國木田獨歩序
小杉未醒著

詩興畫趣

定價八拾錢
郵八錢

十人畫傳、漫遊記、水國の秋等十餘篇を收む

殆んど絶版同樣なりし獨歩集は彩雲閣にて取次ぎ販賣すべし

發行所 東京神田表神保町 彩雲閣 振替口座四一〇五



鴨

佐藤紅綠

高部と私が新宿の停車場を出て、代々木新町の馬車場に着いた時は既に日がどつぷりと暮れて居た。高部は愛宕艦乘組の機關手で、私とは同年で今年三十二歳、十餘年の昔神田の下宿屋で知合つてから肉親も及ばぬ程の親しい仲となつたので、其後私は學校を止めて多摩川の片田舍に引込み、女房と子、親戚、小作人、いろ〳〵の煩瑣に燻ぼつて了つたが、丁度七年前高部は海軍に身を投じ今では機關手となつて、文信の中にも昔に變はらぬ壯快な文字ばかりを並べてよこす、私は其れを見る度にいつまでも彼の若いのに驚く。

プラツトホームで其の岩疊な肩幅を見た時私は只だ嬉しさに堪えなかつた、旅順決死隊の員にも加はつて生命懸けの辛苦を嘗めて來た彼れが、自分の郷里なる羽後に歸らうともせて、第一に私の宅に戰後の疲れを休め、七年振の積る話をしやうと來て呉れたかと思ふと。

新聞で知り拔いた戰爭談でも、親友の口から聞いたら如何に新らしき興味を感ずるであらう、私は只だ一刻も早く宅に着いて父の前で緩くりと友の話を聞き又友の名譽を誇らうと、最早氣が氣でない。

諸君は代々木新町から舊甲州街道を往復する馬車を見た事があるだらう。其れは東京で馬車鐵道が出來ぬ時からの頗る舊式な型で、砲車のやうな岩疊な四輪の車の上に、荒削りの柱に組立てた臺を載せ、臺は下が挾く窄まつて兩方の柱が末廣がりに開いて居る、定員十人といふけれども大方其れは子供を一人と見立てた勘定か、左もなくば十人の中に人の好い婆樣や、他の犧牲になつて肩身を斜めに透す慈善家や、身體が半分外に食み出しても構はぬといふ辛棒强い者を計算の中に入れたのであらう、實際の處は八人が關の山だ。

雨がしよぼ〳〵降り出してるので、馭者は雨除の被幕を以て車の左右前後を犇々と包んだ、被幕と言ても是れも石油箱を包んで西洋から渡つて來たといふ莫迦に厚い帆木綿で、是れに包まれると雨は無論の事風さへも徹る氣遣がない、其代りに中は陰氣で私共が入口の臺に首を突込んだ時は、黑冥々たる暗中て片側の細柱を手探りに漸やく馭者臺の右の端に腰を下した、高部は私と差向いに左の方を探つた樣であつたが、突然

「あゝ失禮しました」と叫んだ、同時に

「どう致しまして」と女の聲が丁度私の正面に聞える、高部は件の女と並んで、私の筋向に坐つたらしい。聲で想像して見ると女は三十前後どつかに世馴れた處があつて、能くある事だが、あの人は男の樣

にはきく〳〵してると言はれる方の人らしい、私は是れ丈け思ふた時に手に持た鴨がくゝ〳〵と鳴き出した。

「臺の下に入れ給へ」と高部が聲を掛ける。

言ふ事を忘れたが、私は高部を出迎の途中で一羽の鴨を買つたので、其れを料理して高部を馳走する積なのであつた、両足を繩て縛つて、全身を風呂敷に包み、結び目の處から首丈けを出して置たのは呼吸を整まらせまい爲めである。

鴨を臺の下に入れると、此時早や犇々と乘客が詰めかけた、どんな身裝て、どんな顏て、どんな人かといふ事は暗がりて毫も解らない。

「どうぞ御詰めを願ひます、十人乘てすから今少々、前の御方」と前になつた馭者がいふと、後ろの踏臺に立た馭者は

「御膝を御組合せを願ひます、御膝を」と聲掛ける

此土地で名高い松葉繋ぎといふので、向ひ合つた同士が膝を割つた片足違ひに膝を挾み合ふ事で、晝の時には若い娘が折り〳〵顏を赧らめる事があるのだ。

松葉繋ぎが定まると、車中が急に賑やかになつた、暗さに馴れた眼は僅かに女の坐つた丈の高さを朧に認め得る丈けて、隣り合つた高部は顏も頭も何にも見えない、大方色が黒い爲めてあらうと心中私かに可笑しかつた、けれども高部の元氣は熾なもので、頻りに話しかける、心地快さゝうに笑ひ出す、其

中車が動き出したので、石原道の凹凸は一上一下今にも倒れさうになる時などは喝采して子供のやうに喜んで居る。車中の人も顔こそ見えね、袖すり合ふた縁で、早や心安立の無駄話、田舍者は正直丈けに洒落氣もないので、語るものも返事をするものも頗る張合がない、けれども馬車にまれ汽車にまれ腰を落着けて了えば當座の間は、もう既に先方の目的地に屆いたやうな氣がして、急に活氣が出て來るもので、其れが時間を經るに從つて、目的地が次第に遠くなる待ち遠しいといふ氣が起るのである。

車中の賑ひは程なく止まつた、三本松の立場を過ぐる頃は既に七時頃、御茶を飲まずに眠つて居のたが多かつた、馬車は是等の重たさうな客を曳ずつて只管に急ぎ行く。

雨は土砂降りになつて、何處からとなく空氣が冷え渡ると、暗さは益々暗くなつたやうに思はれる、被幕の外は風、雨の音恰ら巨浪の響の如く只だごう〳〵と耳に轟く、折り〳〵は馭者が眠氣ざましにひゆう〳〵と鞭をしごいて馬に加へる音も聞える、乘客は皆な眠つて了つた。

單調は疲れ易いものであると私は恁う思つた、疲るれば眠くなる、して見れば單調は眠いものであると、三段論法に當て篏めて見た、實際私はもう可成に疲れて居た、今夫れ黒暗々たる奈落の底を行く鬼の車のやうなものに乘て、いくら瞬いても何物も見えず、耳に聞くものは風雨の音ばかりで、而も坐つたきり身動も出來ず、針を飲んだ魚のやうに尾を棹る事まで出來ぬやうでは恐らく此んな單調は又と無からう、高部は思ひ出したやうに廣瀨中佐の軍歌を小聲に唸つて居たが之れも直ぐと止んで大きな欠伸をして、何やらごそ〳〵と身體を動かしたやうであつた、後ろの柱に凭れて眠りかけたのであらう、

私は從來物を見れば眼が疲れるものだと許り思つて居たが、眼が何物も見ず視覺の働をなさぬ時は、より以上に疲れるものだと此時始めて氣が付いた。私も眠るべく力めて見た、兩手を胸の處に組み合せて靜かに角柱に頭を推しつけた、併し板の底からしみ込む寒さは踵の邊りを刺す樣に襲い來る、此時不圖眼に着いたものがある馭者臺の方の被布を透して僅かに一點螢よりも小さい、線香の火先のやうな灯が差向ひの女の膝の邊りにぽつかりと落ちて其れが車の動く度びに彼方彼方と移り歩く。暗に疲れた眼は斯の如く小さい灯を見ても俄かに興味を覺えて忸と上を見上げると、柱の外に縛りつけたかんてらの灯が釘の穴を徹して漏れるのであつた。

併し其位の事が到底永く此の單調を破る事は出來ない、私は再び眠らうと思つた、併しもう眼が冴えて眠られない、車中が皆な快く眠つてる高部ももう眠つたらう、入口の方の老人と覺しき鼾が傍若無人に響きわたる、眠る事の出來ないのは自分ばかりと思へば益々邑々しい、と思つた時私は自分と膝を劃て居る此の女が先刻から眠つてるのかどうかといふ考が不圖浮び出した、此の考が浮び出た時に私は女の膝の下ふくら脛の邊りが柔かい溫みを帶びて自分の瘠脛と溫みを交はして居た事に氣が付いた。無論最初から氣が付いて居たには相違ない、けれども私は四邊の人が悉く寐靜まつて了つて何の考へる種もなくなれば處爲もなくなつた時に凡ての感じが何故か此の女に注がれたのである。

何歳だらう？、三十前後、何物だらう？、人の妻？いや爾でない言葉つきから見ると獨身者だ、寡婦かも知らん、色は白からうか黑からうか宅の妻よりは幾分か肥り肉て肉の柔かい處を以て見ると

かに色が白い。

と思ふ中に彼れの膝か、私の膝か、二つの膝が幽かに顫動を帶びて私の顏は俄かに上氣を催した。

「おや眠つてるのではないのか知らん」と私は殊更らに居ずまいを直さうと膝の邊りの外套を引き寄せた、途端に膝の上堅く彼の手を握つた、女は別に拒みさうにもなかつた。

高部はと其方を見ると、彼れは依然として言葉もない、さりとて鼾もない、車中永世の如くに靜かである、

私が彼の女を疑がふ如く彼の女も亦た私を何物だらうと疑つたに相違ない、疑は疑である、けれども、互の手は一時間餘り離れては合ひ、合ふては握りかはして居た、正直に言へば私は此馬車願はくば鈍く遲くいつまでも調布へは着かざれと念じて居た、瀧坂を下りると金子原、雨の音は幅廣になつて、平坦な道を走る車の音が只た他事の如く逆上せた耳に聞える許りである、

此時私は高部が本當に眠つてるのかどうかといふ其れが頗る懸念で堪らなくなつた、すると以前からの入口の大きな鼾がはたと止んで、むにや／＼と何やら呟いた樣てあつたが、ぴしつと燐寸を磨る音、同時にぱつと火光一閃、私は殆んど本能的に握り合つた手を引いたが、女は一方ならず慌てゝ飛上る拍子に高部の顏が女の顏近く動いたのがちらと見えた。

是れがほんの一瞬間て、入口の爺の煙管の雁首の火が、もや／＼と立つ烟の中に豆の如く小さくなる頃には、彼の蔽幕を漏る火の光りが女の袖に止まつて居る丈けて、再び元との暗さに復つた、

急に燐寸の光を見て、再び暗くなつたので、車の中が以前よりも暗くなつた、ちらりと見た女の顔は細面て色が白い、只だ其れ丈けて何も見えなかつた、一體此女は何物てあらうかとの疑問は再びむら〱と起る、二人の手は以前に增して堅く握りかはされて居ながら。

單に手を握り合ふ、一時間餘りの單調には私も稍々根氣が盡きた、根氣が盡きても本能性の慾が盡きぬ、私は突然膝を進めて手を擧げて女の顏を撫て下した、顏の造作を檢査する爲めてはない只だ手が顏に觸れて見たくなつたからて。

女は一寸驚いた風てあつたが、默つて其襟元の邊りに手を置て懷の中を探る樣子、其れも一刹那て私の手は女の頤の邊りを滑り落ちて滿身の力を籠めて懷の中に揷し込んだ。同時に全身水を浴びせられた如く棒立になつて後ろに腰を下ろした、女の懷の中に男の手が潜んて居たのてある、

私が後ろに腰を下すと、女は身體を小さくして片隅に寄つた、私は挾み合つた膝を外に外らして默つて了つた、高部はまち〱と身體を動かして是れも何の音もない。

私は言ふに言はれぬ不愉快を覺えて、恍と被幕洩る灯影に目を辿らせ、馬車の音を聞くともなく聞いて居る、外は雨霽れて調布も此に間近くなつたらしい。

調布は終點の立場てある。高部と私は馬車を下りた、女はどうしたか無論振返つても見ない、私は默つて鴨を提げたまゝ歩き出すと、高部も默つて後を跟いて來る、雨上りの二月の空、春とはいへど冬めく雲が海鼠の樣に處ろ〱に氷り付いて居る、庚申樣を左に畠中の渡場路を森の中へ拔けて、暗がり阪

をふと出ると豁然と開けた川千町口、水田に映る星が豆の如く冷たさうに光つて居る、私は依然默つて居る、高部も依然默つて居る、水田を吹く風は外套の袖を音たてゝ過ぐる、と突然と私の手に提げた鴨が、繩が解けたか風呂敷の中でばた〳〵と羽ばたきをして聲高く水田に向つて鳴き出した。

「やあ鴨が」と始めて私が聲を出すと

「やあ鴨が」と高部も始めて聲を出す、二人が同時に鴨の方を向いたが此時互に始めて顏を見合はせた。

次號小說豫告

本誌次號の本欄には

貧民 生田葵山氏

象徴派 小川未明氏

題未定 野上八重子女

の三小說掲載せらるべし

鏡

柳川春葉

（一）

米田道夫は自宅の門前で今車を降りた。夏の初の、今日は別けても暑かつたが、夕方から空はドンヨリ曇つて、暈を着た月の近くに有るか無きかの星が一粒、軒の街燈も光鈍く、直目の前の牛天神の森はこんもりと其中に盛あがつて、何處やらの若葉の香が、重くるしい濕氣を含んだ風につれてそより〱と搖いでゐる。

お茶の水から高田の馬場へかけて、子規でも鳴きわたりさうな夜だ。

『車夫、一寸燈火を見せてくれ。』

道夫は何う思つたか、力無い手で洋服の衣兜から時計を引出し、車夫がさし翳す提灯の下で時間を眺めると、殆ど獨言のやうに、

「あゝ最う十二時も過ぎたなあ」

『然うでせう、電車の赤が先刻通りましたからね。』と車夫は膝懸を車の中に投込んで、賃錢を呉れるのを待つてゐる。

此方は衣兜から五十錢銀貨を摑出して『おい、是で可からうな」

車夫は多きに過ぎたので少し驚いた體だつたが『何うも有難うございます。有難うございます。』

『可かつたら疾く行け！最う十二時過た。』

幾度も頭を下げて、旋て輕い空車を引去るのを、道夫は棒のやうに突立つたまゝ何時までも見送り、其が半町程先の角を曲つても、未だ轍の音の淋しい夜の町に響くのを熟と聞澄してゐたが、偶と氣が着いて、ふら〳〵と門に歩寄り、可厭に高い音の爲る潜戸を啓けて、悄然として内へ入つた。

少しは醉つてもゐるのだが、其よりも彼は非常に疲れて見える。

戸は閉めても錠を降して置かなかつたので、直に玄關の三疊へ腰を懸け、猶且力無く靴を脱いだ時、年齢四十五六のお波といふ所帶崩しの婢が、眠い目を擦りながら、洋燈を片手に慌てゝ出迎へた。

『おや、お歸り遊ばせ、今晩はお泊りかとも存じましたから、唯今閉に出やうかと思つて居りましたので。』

道夫は其には返事も爲ず『敏は最う寝たのか。』

『否、未だお目覺でございますよ。』

『然うか。』と帽子を脱つて掛けながら『今夜は疲勞れたから、俺は直に二階へ行く、敏に「構はず寝ろ」と言つて呉れ、それからお前も寝たが可いぞ。』

お波が何か言ふのを聞流し、道夫は暗い廊下から横手の階子を昇つて、我居間の襖を啓ければ、机の上の置洋燈はぼんやりした——宛も戸外の夜のやうな——光を放ち、今朝引散して出た跡が、淋しい位寄

麗に片附けてある。

彼は居馴れた机の前に崩れるやうに坐つたが、其まゝ拇指と食指て額を抑へ、片手を衣兜に突込んて、海老の如く丸く成つて了つた。

『此先は何うしたら可からう。斯樣に見事に失敗して……あゝ考へるのも辛いなあ。』

額を抑へた手が段々辷つて、旋て頸首を引抱え、二三度大きな息を吐いたかと思ふと、忽ち奮然として顏を揚げた。

『えゝ何う成るものか!新規蒔直しだ。』

焦燥と四邊を見廻して、洋燈の心をグイと捻擧ると共に、室の中は驚くべく明るく成つて、同時に蒼白い彼の顏がクツキリと机上の小鏡に映るのである。

歲は二十七八て、髮の毛の房々とした、額の狹い、骨々しい顏立て、口は冷酷に見える程引緊り、頰が憔悴て、殊に其目つきの陰欝な處は、極めて神經質て、始終物事を悲觀してゐるのを證據立る。

『何の人!構ふ事が有るもんか。』

眩しい燈火に向つて、最う一度言つたが、其一句の響が未だ消えぬうちに、激しい悲しみと恐怖が自分の心を絞つて、而して自から愚を嗤ふやうな態度に變る。捨鉢に成れば成るだけ、未練が強く起るのだ。而して終には斯樣な思を爲るなら、いつそ毒でも仰いて死にたいと思ふ程心苦しい。

長い間斯うしてゐると、偶と其耳へ『兄樣、兄樣』と呼ぶ聲が入つたから、彼は氣が着いて階子の方

を振返れば、寢て了つたと思つた妹の敏子が、上口から半身出して氣遣はしさうに此方を見詰めてゐるのだ。

『お前か、寢ろと言つたのに、未だ起きてゐたのか。』

『兄樣お茶をあがらなくつて？』

『飮みたいけれど……』

然う言はれると、俄に醉後の渇を覺えて、

『然し湯は沸いてゐまい。』

『多分あがるだらうと思つたから、妾持つて來たのですよ。』と敏子は室へ入つた。

道夫とは六歳違ひて今年二十一に成る。兄妹ながら體格は全然變つてゐて、丸顏の、容貌は取立て、言ふ程でも無いが、色が白く愛嬌が有るので、男には極めて好かれさうな質である。

敏子は火鉢の中を覗いて見て『火は何時か消えて了ひましたね。妾先刻繼いて置いたのだけれど。』

『何ても好いから、茶の方を貰はう。』

注いで出すのを唯一息に飮干して、道夫は何にも言はずに又洋燈を見詰める。

『兄樣、貴方今日は何うか爲すつたのですか』

『別に……』

『だつてお顏の色と言つたら有りませんよ。又餘りお酒でもあがつて、氣持がお惡いのぢや無くつて？』

『何有、酒はなか〳〵飲足らん。だから不愉快て我慢が出來んのだ。敏、家にウィスキーが有つたら』

『えゝ有りますけれど、兄樣彼をお飲みなさるのですか。』

『無論さ。酒は飲むに極つてゐる。』と道夫は口でばかり笑ふのだ。

『其でも彼のお酒は大變强いのでせう。今夜は外で飲んでゐらしつたのだから、最うお廢しなさいよ。ね。』

『飲んで來ても足たらんから求めるのだ。お前も餘程解らん女だなあ、出せと言つたら素直に出すが可い。』

『ぢやあお願ですから、少許ね！』と敏子は何處までも和しい事を言ふ。

道夫は眉を顰めて『何ても可いから疾くしろ、下に在るのか。』

『否、此處へ藏つて置きましたわ。』

身輕に立つて、違棚の地袋から、朱塗の盆に載せた角壜と、小さな薄手の盃を取出したが、

『お肴がいるのですか？』

『那樣物は要らん。』

と此方は見暴に引たくり、手酌で一杯注いて、目を瞑つて半分程口へ入れた。

『あら、一息に！』

道夫は舌が燒爛れるかと思ふばかりなのを、我慢して何うか斯うか咽へ通し、

「一息に……何うしたと言ふのだ。」

「亂暴だわねえ。何時も那樣にしてあがつた事は無いのに」

「是でも毒よりは增だ。」と道夫は先刻考た事をつい言つて了ふ。

「彼樣事ばかり！今日は眞實に何うか爲すつたのでせう。何につけても有仰る事や爲さる事が平常と違つてゐるのですもの。お友達と喧嘩でも爲ていらしつたのでせう。」

「然うぢや無い。」

「では何んな譯？」

「何れ話も爲やうが、少し訊くのを待つてゐてくれ」

と又盃を取つて、今度は奇麗に傾盡したと見れば、直に墁を引寄せるから、敏子は慌てゝ其を奪取り、

「可けませんよ、最う何うしたつて妾止めるわ。」

「餘計なお世話だ。此方へお出し。」

「何だか今夜は可恐くつて爲やうが有りませんから、妾に安心させると思つて、お願です、後は明日の晚にして下さいな。」

道夫は默つて首を掉る。

「其に今日はお母樣の御命日よ。月は變つてゐるけれど……」

「命日だから酒を飲んで惡いといふ事は無からう。他て遊んでゐるのぢやあるまいし、斯うして自宅て

もつて兄妹差向ひだから、死んだお母様だつて喜んでゐられるだらう。」

「でも、お母様はお酒飲が何よりお嫌ひだつたぢやありませんか。」

道夫は一昨年歿つた可懐しい母の事を考へた。然なくも神經が鋭く成つてゐる處へ、今日は命日と言ひ、又敏子の此言葉を聽いては、痛切に思出さゞるを得なかつたので、

敏子の言ふ通り、亡母は酒飲が何より嫌ひてあつた。神棚へ神酒も上げない程嫌ひてあつた。と言ふのは、自分達の酷い父、母の爲には大事の良人が、酒の爲に生涯を誤つたからなので、又其爲に、亡母は二人の子を抱いて、世にも哀れな一生を送つたからである。

母については其酷い父も思ふ。是も疾うに亡人の數に入つたのだが、道夫も敏子も其人を思出す度に、如何に肉身の親でも泣いて怨まずには居られない。

養子の身で酒の爲に財産の九分通は費消し、其上妾狂て妻と子を置去りにしたのは、道夫が未だ十四歳の時であつたが、其後は居所さへも解らず――勿論緣を切つたのだから、其を知らせる道理も無いが――北海道とか千島とかの果まで放浪して、其揚句は妾にも捨てられ、惡疾に惱み、貧に惱んて、とう〳〵行倒同樣の死を遂げたといふ話である。

「お母様は實に氣の毒な人だつたなあ。生涯苦勞の爲どほして、然し一人に成つてからの方が却つて氣樂だつたかも知れない。」

「然うても有りませんわ。成るべくお父様の事は思ふまいと爲てゐらしつたやうだけれど、其でも時々

は言出してね。』と敏子は襦袢の袖を顏へ當てゝ『能く泣いて被在たわ。』

道夫も胸が迫つて、唯幾度か打頷く。

『でもねえ。兄樣に疾くお娶を貰つて、せめて其だけでも安心して死にたいと始終言つて被在たのだけれど、とう〳〵其も間に合はなかつたのです。』

『何事も今と成つちやあ爲方が無いよ。眞逆彼樣に疾く死んでお了ひなさらうとは思はなかつたからな。』

敏子は何を思つたか急に膝を前めて『然う言へば彼の芳子さんは、お母樣も大變お氣に入りだつたし、それに河本の叔母さんとは何に就けても一番合口でゐらしつたから、兄樣も彼の叔母樣と芳子樣だけは大事に爲てあげて下さいね。而して芳子さんが家へ嫁て下さるやうに成れば、其こそお母樣も御本望でせう。』

『那樣事は何うでも可い。』と道夫は苦しさうに言ふ。

『否、可くは無いわ。然う成れば妾だつて本望です』

『それどころか。』

と荒々しく盃を取つた、其權幕が餘り凄しかつたので、今度は敏子も手を出しかね。目を丸くして其亂暴な飲かたを眺めるのみ。

『眞實に困りますよ。兄樣、貴方は何がお氣に入らないの？』

半分は可恐く成つて、彼は嘆息と共に斯う言つた。

『惡いと知りつゝ飲むんだ。最う咎めて呉れるな。僕は是でも飲まなくつては、實に我慢が爲切れんのだ。』

『ぢやあ、銀行をおやめなすつたので、其て自暴を起してゐらつしやるのですか。』

『其も一つの打撃だが、然し銀行を退いたつて、我々は端的食ふに困るといふ事も無いからな。』

『然うですとも。又何處かお出なする處を慫り探せば可うございますわ。』と敏子は慰顏に言ふ。

『今度のは其よりも更に烈しい打撃だ。あゝ聞かせたらお前は驚くだらう。』

『何てす。那樣事なら猶の事聞かして下さいましな。』

道夫は又一口勢好くウイスキーを飲んだ。舌が痲痺して、斯樣勁烈な酒も今は然程に感じないと見える。

『敏、僕は身代限を爲て了つた。』

『えー身代……』

『然うだ、奇麗に一文無し、いや其以上に失敗して了つたのだ。お母樣が彼程辛苦して持耐へた財産を僕は全然棒に振つたのだよ。』

『まあ、兄樣。』と敏子は呆果てゝゐる。

『是だけでは解るまい。今迄お前に秘して居たのだが、實は僕は先日から相場に手を出してゐたのだ。』

敏子は此時漸く我に返り『何故又相場なんか爲すつたの？』

『儲けたいからさ。』と苦笑を爲て『よく人が是で失敗る事は百も承知を爲てゐる。然し誰しも損を爲る氣でかゝる者は無いのだからね。銀行に居る時分、多少斯道には覺も有つたので、今度彼處をやめたのを機會として、大いに運試を遣つたのだけれど、其運が惡かつたのか、心が足らなかつたか、斯うして泣くにも泣かれないやうな始末に立いたつた。』

『兄樣、それて後は何うなさるのてす？』と敏子は身慄を爲て、急ぎ四邊を見廻すのてある。

『何うして可いか僕には解らん。』

苦しまぎれに飲めば飲む程、醉はなさて唯感情がたかぶるのみ。彼は房々した頭髮を掻亂して、見苦しくも呻くのだ。

夜はしん／＼と更けて行く。曇つた天氣の風も無ければ、時計の刻む音ばかり耳につき、頭は重い石にでも押へられるやうに痛んで、身動するだに胸苦しく、而して心細いのてある。

少時すると敏子が挿してゐた白薔薇の蕾が、ポッタリ疊の上に落ちたのを、何か前表でも見たやうに、二人は等しく蒼い顏を揚げた。

『ぢやあ、妾達は最う此處に住んてゐる事も出來ないのてすか。』

道夫は又俯目に成つて『否家だけは取上げられないから、明日から屋根の無い處へ寢るにも及ばん。然しなあ。』

『然し何うなの？』と敏子は泣聲て尋ねる。

『早晩、此處も見捨にやなるまいよ。』と穴の中へでも引込まれるやうに、言ひたく無い事もうか〳〵口へ出て『僕は知つてゐる通り極めて氣の小い方だから、銀行の事が駄目と極つた時には、そりやあ病氣に成る程落膽した。と共に此上は大事の戰場に討つて出てゝ自力で一旗揚げる氣が起つたので、外の事は總て忘れ果てゝゐたのだが、今度といふ今度は再び立つ勇氣も無ければ、金も無い。敏！お前には實に氣の毒だけれど、最う僕は賴みにならんからね。此場合お前は自分で身の振方を考へてくれ。』

『だつて妾、那樣事は出來ませんわ。』

『お前も最早一人前の女だから、自分で食つて行く位の事は何を爲たつて出來るよ。』

敏子はこれを聽くと怨めしさうに兄の顏を打目戍つて『それは自分だけなら何うでも成るでせうけれど、兄樣と分れて了ふのが、妾迚も出來ません。其も斯樣悲しい事で無いなら、妾だつて喜んで獨立も爲ませうが、是では餘り情無くつて……』

『然し他に爲方が無いぢやないか。僕は便に成らん男だ、お前も斯樣者と一緒に苦しむより、一人でゐる方が比較的氣樂だらう。』

『否。』

『でもお前は僕を怨むだらう。』

『否。』と又首を掉つて『飛んでも無い事です。唯兄樣が那樣氣を起して下さらなければ、妾は何んな苦しい思を爲ても可うございます。財産を失してもお金なら後で何程でも出來るてはありませんか。方々

へ頼んで置けば又好いお勤口が有るてせう。然うすれば今お金は無くつても少しも困る事はございませんо」

「然しねえ……」と道夫に何時までも俯いたまゝてある。

「世間に類の無い事ては無し。那樣にくよ〳〵爲さるには及びません。」

殊勝な妹の志を聽くにつけ、道夫は我ながら意氣地が無いと思つたが、猶且氣が挫けて、

「方々へ頼むと言つても、其頼む處が無いのだ。」

「其は斯うい ふ時てすから、河本の叔母さんにも御相談なすつて……」

「彼處へか？」と額を抑へて「極りが惡くつて行けや爲ん。」

「だつて虛飾を爲てゐる時てはありますまい」

「然うさね。だが僕は駄目だよ。一つ跌くと容易に起てない人間なんだから……えゝ何う成るものか。酒ても飮んて溝の中へ反り込んて、果敢無い死方を爲りやあ可いのだらう。」

「其ぢやあお父樣のやうに?!」

「えー お父樣の！」

と道夫は忽ち電氣に擊たれたやうに、其物凄い顏を揚げて、殆ど無意識に机の上の鏡を見た。酒に濁つて可厭に底光のする眼、險しい眉、ドス黑く脂ぎつた色艶、鼻の形から、口許から、甚しきはシヨボ〳〵と蒔い口髯まて、鏡の中の顏は兄妹が子供心にも怨みに怨みぬいた其亡父に違の無いだっ

元來其子が父に似るのは當然である。が、道夫は幼いうちから其を何より可厭な事だと考へてゐた。お世辭にも然う言はれると、身慄の出る程口惜しかつた。一つは母親の愚痴も、子供等に斯ういふ感じを抱かせる原因に成つたのだが、二人は何時も酒臭い息を吹いて、何の咎も無いのに母を打擲したり、後を追ふ自分等を蹴飛したり、其て素性も知れない女を公然家へ引張込んで、家人を牛馬のやうにコキ使ふ父は、如何に思つても憎い人であつた。

道夫は幼心に、父に似てゐると言はれると、自分も斯樣酷い事を爲る人に成るのかと思つて、其が何より可厭であつた。て、母親に向つて自分はお父樣に似てゐるかと可恐々々訊ると、母は何時でも目の色を變へて『お前が！彼樣人に似られて耐るものですか、彼樣鬼のやうなお父樣にお前は髮の毛一本だつて似てゐはしない。』と言ふ。然うだらうと道夫は漸く安心する。其と共に萬一か似たら大變だといふ心が激しく成つて、終には父の聲を聞いてさへ耳を抑へて逃るやうに成つて了つた。

是は子供の仇氣無い感情に過ぎぬ。漸く人と成るに及んでは、有繫に人情の自然で、斯樣鬼のやうな父でも道夫は猶且戀しく思つた。何うにても爲て行方を尋ね、打たれても蹴られても一所に暮したいと思つた。母親も恐らく然うであつたらう。

然し一度其慘憺たる最期を聞いた後は、彼は再び父に對して可恐いといふ感を生じたのである。似たく無いといふ事は、更に痛切に彼を苦しめた。

其は憎でも怨でも無い。運命が恐ろしく成つたのだ。萬一自分の顔や性行が似てゐたら、或は自分の

父と同じ運命に成りは爲ないか。

此恐怖は今でも心を去らぬので、彼は何によらず常に自分を父に較べて見て、似ぬやうに似ぬやうにと努めてゐる。父は放縱であつたが彼は自分の教育によつて極端な小心に成つた。父の怒り易い處は、彼の溫順な處と反對してゐる。斯樣風に道夫は總てに恐怖といふ鞭で自分を似ぬ側へ導いてゐたのである。人格に依て人相も變るものとすれば、彼はたしかに父に似ぬ鬼子と成濟してゐるだらう。

*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*　*

が、彼の其苦心、自負心は今鋭に相對して忽ち霧のやうに散じて了つた。父か、我か、似たといふよりは寧ろ區別がつかぬのだもの。理屈は護謨のやうなものである、引張つて手を放せば速に其以前の點に復つて行く。だから顏が同じだとすれば、運命も同じであるといふ感は護謨の撥返る如く道夫の心を擊つた。

「お父樣に？と彼は長い間の沈默を破つて『敏、僕の顏はお父樣に似てゐるか。」

「あら兄樣！聲まで」と敏子は戰慄して後へ退つた。

「馬鹿な事を言ふな。那樣事を言はれると僕は苦痛に耐へられんのだ。」

「それでは後生ですからお酒を廢して下さいな。而して今妾が言つたやうに、最う一度働いて……妾も女の力で出來るだけ、貴方のお手助を爲ますから。」

「まあ可い。お前の言ふ事は能く解つてはゐるが、僕は今非常に興奮してゐるから、今夜一晩ゆつくり

休まして呉れ。然うで無いと全然分別が附かん。」

「あゝ其が可うございませう。餘り心配なさるとお體に障つては猶困りますから。ぢやあお床を取つて置きますよ。」

寢所を延べて了ふと、敏子は挨拶を爲てそつと下へ降りて行つたが、道夫は肱を曲げて横つたまゝ、死人のやうに無言てある。

置洋燈の油がヂユウ〳〵煮える音と、何時も單調な時計の響、其針は動き止まて、旋て嚴めしく三時を打つと、道夫はむつくり身を起し、詰と四邊を見廻した後、例の鏡を手に取つて、又熟々と我顏を眺めつたが、何時か姿が朧氣に成つたのは、止度無く涙が湧出る爲てあつた。

遠くの方て一番鷄が鳴いて、窓の下には若葉に灑ぐ雨の音が爲る。

（二）

河本某は以前岡山縣の書記官迄勤めた人だが、十年程前病氣の爲に辭職して、久しぶりで東京に移ると間も無く、五十にも成らずに死んで了つた。

未亡人嘉代子は米田の母の妹て、芳子といふ今年十九の娘と、其下に男の子が二人、其て赤坂の丹後町に地所家作を大分持つて、豐な生活を送つてゐるのだ。

晝飯が濟むと芳子は部屋て琴の復習を始める。母親は長火鉢の前て小間使と世間話を爲てゐたが、話の切目に柱時計を仰いて、

『おや、未だ二時だね。此頃は本當に日が長く成つた。』

『それに今日は雨が降りますから餘計陰氣でございます。』

『然うね。くさ〳〵して可厭に成つて了ふよ。血の道の所爲か、今日は又大變眠い。終日降通すのかしら、困るね。』

『先程少し明るく成つて參りましたから、大方霽れるだらうと思つて居りましたが、此分では難しさうでございます。』

と言ふ處へ芳子が入つて來た。痩軀ですらりとしてゐるので、何處やら病身と見える質だが、顏立は上品で、目つきが如何にも美しい。紫の勝つた銘仙の華美な袷に、黄八丈の羽織を着て、小さな繪端書帖を弄りながら、

『母樣、今朝君島さんから來た繪葉書は其處邊に無くつて？』

『知りませんよ。』

『一寸茶棚の上を見て頂戴な。失すと困るんですからさ。』

『又常の癖だよ。』と嘉代子は澁々探して見たが『有りはしないやね。自分で何處かへ置忘れて、思出すと大騷を爲るんだもの。』『だけどねえ。』と芳子は其處へ座つて『あゝ妾はお腹が空いたわ。』

『おや呆れたものです。未だ二時ぢやないか。』

『お孃樣、今日はお復習が大層疾く濟みましたのですね。』と小間使は口を出す。

「雨が降るから。」と芳子は其方を見も返らず、食指で頻に帖の表紙の模樣を擬つてゐる。

「其處へ下働の女中が慌しく飛んで來て奧樣、「米田樣がお來になりました。」

嘉代子は頷いて「然うかい。此方へ御通し申してお呉れ。」

「何方の米田樣？敏子さんかい、道夫さんかい？」

「旦那樣でございます。」

「然う?!」と芳子は又表紙の擬りを初める。

旋て女中と入違ひに、道夫は悄然として茶の間へ通つた。何時も奇麗に分けてゐる頭髮はおどろに亂れて、顏色も眞蒼に、一寸と上眼で人を見るのが、慄然とする程氣味が惡い。

挨拶が濟むと、彼は一わたり座敷を見廻して、其から首を傾げたまゝ、默つて卷煙草へ火を點ける。

「嘉代子は茶を淹れながら今日は雨が降る處を能く來て下すつたね。家中鼻を揃へて今も退屈し切つてゐた處ですよ。」

と序開を爲て見ても道夫は直に受けも爲ず、間が拔けた時分に、

「可厭な日ですなあ。」

と取つて附けたやうな事を言ふ。

嘉代子と芳子は喫驚して其顏を打目戍つたが、

「お前さん體でも惡いのかい。」

『えゝ、少し……』と道夫は横を向く。

『芳子は母の方を見て大變窶れて被在るわ。ねえ母樣』

『然うさ。風邪でも引いたのぢやありませんか。』

『叔母さん。僕は親父に似てゐますか。』

『妙な事を訊くではないか。』と嘉代子は目を丸くして『だが然う言へば今此方も言はうと思つてゐました。段々年齢を取つて來たせいかも知れないが、本當に能く似て來るよ。』

『え？似てゐますつて？！』と道夫は直と自分の膝頭を睨付けた。

『爭はれないものねえ、瓜二つと言はうか、全然生寫しなのさ。尤もお前位の年にはお父樣の方が最う少し肉附が好かつたやうだけれど。』

『然うですかなあ。』と落膽して、それから叩つけるやうに『チヨッ！其ぢやあ最う絶望だ。僕は何故生れて來たのだらう』

『何が……何を言出したの？』

『僕は親父に似てゐると言はれる程苦しい事は無い。』

『だつて親子だから似るのも不思議は無いぢやありませんか。』と嘉代子は微笑む。

其が又甚しく侮辱されたやうに取られるので、道夫は颯と赤面しながら、

『其では貴方は、僕も父の通りに野垂死を爲ると有仰るのですか。』

『まあ何を言ふのだね。妾は那樣事は夢にも思ひはしないよ。似てゐるのは顔立ばかり。心や行がお父樣の通だとは誰だつて信じやしない。お前僻見を起しては可けませんよ。』と和しく慰めながら、絕へず相手の擧動に目をつけてゐる。

『僻見ぢや無い。貴方の有仰るのが實際でせう。僕は酒を飲みますよ。』

『些とも構はないぢやないか。』と笑つて『好なお酒なら飲む方が樂に成ります。』

『飲めば必ず荒れますよ。其程貴方は可いといふなら、さあ此處へ出して下さい、冷酒でよろしい。ブランデーかウイスキーなら猶更結構なんだ。』

芳子は悸々して母親の方へ摺寄つたが、機を見て衝と此室を出て行つた。叔母は片手を煙草の壺へ突込んだまゝ、熟々道夫の顔を眺めて、

『道さん、お前餘程今日は可怪しいのね。』

『否、是が僕の天性なんでせう。』と道夫は悲愴な調子で答へる。

『妾が似てゐると言つたのが、其程癪に障つたのですか。其ならお前の方から訊かないが可いぢやありませんか。又よしんば惡氣が有つて然う言はれたにしろ、他の言ふ事は笑つて置けば可い。贔負目ばかりで無く、お前とお父樣とは全く腹の中が天地の差です。自分でも然う思つたら何も那樣痴けた事を言ふに及びますまい。其ともお前はお父樣のやうな事が爲たく成つたのですか。』

『運なら致方が無いのですもの。』と此方は唇を嚙締めて『僕は相場に手を出して、身代限を爲て了つた

のです、銀行は免職に成る、加之に此始末では、明日から食つて行く事も出來ない。』
「えー那樣嘘を吐いて……」
「誰が此雨の降るのに態々嘘を吐きに此處まで來るものですか。貴方等は金が有つて閑暇だし、僕は貧乏で閑暇だけれど。」
「まあ〳〵。何といふ無法な事を爲たのだらう。無分別にも程が有つたものです。其では全部？」
「其通りです。』
嘉代子は忽ち顏色を變へ『本當に呆れたねえ。然し今では取返しがつかないのかい。』
『さあ、何うでせうか。』と道夫は理由も無く腹が立つて、故意と冷な態度を爲る。
『だが無法でも濟んだ事なら爲方が無い。嘸困つたらうね。』そろ〳〵恐氣が立つて來て『妾の方でも然う聞いたからには何とでも爲て急場を助けてあげたいのだけれど、知つての通り女世帶であるし、近頃は又稅や何かゞ騰つたものだから……。』
『叔母さん、僕は其御相談に來たのではありません。酒さへ惜んで吳れない貴方だもの、何で金なんぞを出して下さるものか。』と思ふ樣冷笑して『昨夜も敏が叔母さんの處へ行つて相談しろと切に勸めたんだが、迚も駄目だと僕は大概高を括つてゐた。』
斯う公然に厭味を並べられては嘉代子も勃然と爲ざるを得ぬ。
『其ではお前何しに來たの、其失敗の御吹聽かえ。』

『然うです、吹聽しないと貴方の方で今後交際の御都合が惡からうと思つて。其から一つは親父の一件です。』

『成程、厭味を並べたり、片意地を張る處は能くも似てゐるやうです。』

『然うでせうとも。』と是ばかりは心から出た言葉で、道夫は熱い涙をホロ〱と膝に零したく

其を見ると、叔母は又有繋に氣の毒に成る。言種は一々癪に障つたが、小心な男が斯樣大打擊を受けたのだから、前後の分別が失せたのも決して無理では無いと考へれば、怒るよりも先づ慰めてやりたいのが人の情である。

『其は別として、お前も是位の過で氣を落さずにね。今度は眞面目でやつて見ておくんなさい。此處が全く瀨戶際だよ。だがお前は氣の小さい人だから、苦に病んで飛でも無い事を爲やあしないかと、姿はそればかりが心配に成るのだがね。一つ間違つたら其時こそお父樣だと惡口を言はれて、自分も情無い目に逢はなければならない。だから何處までも其覺悟で、自力で米田の家を起すと思立ておくれ。然うさう是が却つて後の爲に好いかも知れない。』

『難有う、御敎訓は能く服膺致します。其と共に今日以後は再びお宅の敷居を跨ぎませんから、何うぞ遠くから僕の爲る事を見て居て下さい。一度御吹聽して置けば最う安心だ。』と彼はブラ〱と立上つて、挨拶も爲ずに室を出やうとする。

『お待ち道さん！然う急いで歸らなくも可からう。敏子は何うしてゐるか、嘸彼の子も驚いたらうね。』

「家で泣いてゐるでせう。」

留める間も無く道夫は廊下へ出ると、先刻茶の間を逃出して次の間で襖越しに話の樣子を聽いて居た芳子が、又驚いて奥へ逃出す足音がした。嘉代子も立つて障子の際迄行つたが、迂濶に構ふ事は出來ぬので、唯飽氣に取られて其後姿を見送りつゝ宛然煙に捲かれた形である。

玄關の脇まで來ると、廊下の突當りに大きな姿見鏡が立つてゐる。道夫は首を垂れて來かゝつたが、偶と其に映る我姿を見ると、愕然として一足後に退り、又拳を握つて屹と睨詰めた。而して、見れば見る程、彼は腸が煮返るばかりに口惜しく成つて、中折帽子を顏へ押當てたまゝ、驀然に玄關の式臺へ飛降りる。

午過から南の風が強く吹出し、雨は折々小止むかとすれば、又一時狂氣のやうに降來つて、全身に油汗が湧出る可厭な時候だ。薄い絹張の洋傘をさしてはゐるけれど、雨は絹の目も漏れて、霧のやうに顏にかゝるから、衣服も帽子も大方は濡しよびたれつゝ、道夫は意氣地も無く嘘啼をして、豐川稻荷の横から赤坂御所の前へ出たのであるが、電車に乘らう／＼と思ふうち、何時か二つも三つも停留所を通越してとう／＼四谷見附まで歩いて了つた。

日は未だ暮れぬが、町家の街燈にはチラホラ火が點いて、見下す御濠の濁つた水面に雨の水紋が隙間無く擴がつてゐる。

「一體何を爲に彼處まで行つたのだらう。」と道夫は歩きながら自分に言つたが、忌々しげに舌鼓を爲

て『何う成るものか、勝手にしやがれ。』

我を忘れて叫ぶと共に、急ぎ足に四谷の通へ入り、物を尋ねる風て二三町行くと、ビーヤホールの看板に目がついたので、何の分別もせずに其所へ驅込んだ。

天氣の惡い處へ、綠色の窓掛を張つたから、室内は水底のやうに暗い。其中央の大卓子に株梠竹の鉢植を置いて、周圍には飛々に椅子の部落がつくられてある。道夫はキヨロ〳〵四邊を見た後右手の一番隅の處へ席を取り、兩肱を卓へ突くと、宛も疲勞に堪へぬ樣て、確かり頭を抱込んてゐる。

大聲て物を言はれたのに氣が着いて香を擡げれば、白い上張を着た給仕が妙な顔を爲て前に立つてゐる。

『お誂は何を持つて參ります？』

『麥酒の大と、それからウイスキーは有るか』

『へい、ございます。其ては麥酒の大にウイスキー。』

と繰返して給仕が立去ると共に、道夫は又以前のやうな形を爲て、纒のつかぬ思案に耽つて了ふ。

『お誂を持つて參りました。』

と今度も亦促されて、道夫は機械的に身を起し、酒を湛へた二種の洋盃をも見詰めたまゝ、頓には手も出しかねる體てあつたが、旋て意を決したものゝ如く、唯一息に麥酒を煽つけ『おい兩方とも替を持つて來い。』と人を刺すやうな聲て叫んだ。

何時の間にか瓦斯燈が點いたので、今は室内が陽氣に充ちてゐる。客も三組ばかり來てゐて、秘々話をする聲、皿に洋刀の觸れる音、戸外の電車の響などが、雜然として雨音の中に包まれるのであつた。

道夫の聲を聽つけて、先刻から其横手に食事を爲てゐた二人連の靑年が、偶と其方を見返つたが、

「やあ、米田君ぢやあないか。」と一人が逸疾く呼懸ける。

一人は吉岡、一人は野村といつて、共に中學時代の朋友であつた。

『是は珍らしい。』と道夫も片頰に笑を浮べ『お揃ひて何か御相談と見えるな。』

「處が格別變つた相談も無しなのは。」と先方も笑つて「何てす君も方へ同居しては？一人ぢや淋しさうだ。」

「其も可いが、僕は君等より飮むからね。而うして醉つたら御迷惑だらう。」と道夫は替を持つて來た給仕に、又もや同じ注文を爲た。

二人は互に顏を見合せて『成程豪いな。君は以前から那樣に强酒だつたかなあ。」

「あゝ生れない前から。」と道夫は漸々苦い顏をする。

「調戯を言ひ給へ。正覺坊の生變ぢやあるまいし。」

「親父が大酒だからね。それて放蕩て、癇癖持だつたから、僕は全然其統を引いてゐるのさ。」

「ぢやあ、君も放蕩て、癇癖持だといふのてすか。」

と吉岡が調戯半分に言ふと、道夫は忽ち憮然として、

『君達には然う見えんのか。友達効があるなら能く人間の腹の底の底まで見て呉れ。未だ〳〵其だけでは無い、僕は實に悲慘な死かたをするだらう。是が僕の運命だ。』

調子づいて無暗に酒を煽る體を見るにつけ、此怪しげな言葉を聽くにつけ、二人の友は俄に怖氣が出たのであらう、何か私語を爲てゐたが、旋て一度に席を離れて、

『僕等は一寸急用が有るから、今日は是で失敬する。又其うち悠り。』

道夫は唯頷いたまゝ、グッタリと椅子に身を凭せて、匆々に逃げ行く二人の後姿を見送るのである。少の間に多量の酒を飲んだ爲、有繋に醉が烈しく出て、目はチラつき、體は雲にでも乘つたやうに輕く成つた。

『能く見て置け馬鹿野郎!』

と彼は突然怒鳴つけ、又洋杯を取つて口へ持つて行くと、半分は外へ溢れて、衣服の胸から下へ瀧のやうに流落ちる。其にも構はず頗る怪しい呂律で、

『能く見て置けと言ふのに。』

(三)

其晩遲く、道夫は全身泥塗れに成つて、前後不覺で歸つて來たが、此頃の苦勞を察してゐる敏子は、唯涙に暮れて手厚い介抱を爲た。

て、翌日醉が覺めると、彼は寐ずに枕頭に附いてゐる妹を邪見に下へ逐遣り、何を考へるのやら、終

日食事も爲ずに煩悶するのだ。然うかと思へば、燈が點くと慌しく二階を降りて、帽子も冠らずに戸外へ行かうとするから、敏子は驚いて走出て、

『兄樣、何處へいらつしやるの？』

『俺の勝手に出るのだ。留めると承知せんぞ。』

『いらつしやるのは可うございますが、今夜はお酒をあがらないで下さいな。』

と拜むやうに言つたが、道夫は答も爲ずに袖を拂つて、フイと裏口より飛出した。

其日も果して泥醉して歸つて來た。而して廻らぬ舌で難題を持かけたり、心細い事を言つたり、散々敏子を泣かした揚句、下の坐敷で大の字形に寐て了ふといふ始末。

斯樣體裁で半月の餘も過ぎた。家の中は全然不規律に成つて、借金取は朝から詰懸ける。道具類はずん〳〵酒と放蕩の代に變つて、人が羨む位整然として爲た米田の家も、今では空家同樣に成つたのてある。

其は未だしも、道夫は或時例の如く暴廻つて家を飛出したきり、今日で三日に成つても未だ宅へは戻つて來ぬ。

『波何うしたものだらうね。』

と途方に暮れた敏子がシク〳〵泣きながら言つた。母に死なれて二年と經たぬうちに、又此頃の絶望的な苦みを受けて、娘盛の二十一を姿にも振にも構はず、彼女は半月程の間に見違る程窶果てた。

お波も是には當惑するばかりで『本當に困りましたねえ、何故旦那樣は彼樣にお成りなすつたのでせうか。』

『氣が狂つてお了ひなすつたのだらう。妾は泣くにも泣かれないわ。』

『御尤でございますとも。』とお波も涙を流して『彼樣方では無かつたのですけれど、猶且御氣に召さない事が有ると……其でも假令御損を遊しても、後を其氣でお遣り遊ばせばねえ、斯樣事に成らずと濟むのでございませうけれど。』

『妾は兄樣の彼の御樣子を見て爲る位なら、いつそ死んで了ふ方が可いと思ふの!』

『那樣事は可けませんよ。否御調戯にもしろ、夢にも那樣氣をお出しなすつては可けません。命有つての物種ですもの。それに旦那樣も今こそ彼樣してゐらしやるけれど、直に御後悔遊ばすに違ひありません。然うすれば又好い御運が向いて參りますからね。貴方も其思召てお氣を落さずにゐらつしやいまし。』

『然う成れば嬉しいけれどもね。』

と言ふ時、お波は偶と敏子の手首に目をつけ、

『お孃樣、其處は何う遊ばしましたのです?』

『何でも無いの。』と敏子は抑かくして『一寸擦剝いたゞけさ。』

『此頃はお怪我が絕へませんのですね。』と波は道夫の手酷い折檻を思出して、又同情の涙を流した。

敏子は熟と考込んでゐたが『其にしても餘りお歸りが遲いし、今朝の彼の金貸の事についても、妾河

本の叔母様の處へ行つて御相談して來やうと思ふが、何うだらうしら。』

『其がよろしうございます。今日も歸つていらつしやるか何うだか解りませんから。』

『今四時だね。では日の暮れないうちに行かう。』

敏子は其から急ぎ身拵を爲て玄關へ出ると、後について來たお波が、

『隨分御遠方ですから、お歸途にはお氣をつけ遊ばせ。』

『電車が有るから心配は要らないよ。』と淋しく笑つて、敏子は衝と門を潜つた。

其と入違に、女の足で未だ二三町しか行くまいと思ふ頃、道夫は偶然我家へ歸つたのである。

『あ、旦那樣でございましたか。』とお波は兢々しながら手を突いた。

『非常に遲く成つて、お前達は嘸心配したらうね。』

近頃聽馴れぬ和しい言葉なのを、お波は意外な顔で仰見ると、珍らし事には今日は少しも酒の氣が無い。道夫は不思議さうに、

『敏は何うした、病氣にでも成りはしないか。』

『否、お孃樣は唯今しがた河本樣へおいでに成りました。』

『河本？おや僕の事を心配して……あゝ然うか。』

惘然として嘆息したが、又少時考へた後、頭を垂れたまゝトボ〳〵と二階の室へ入つた。

無理を爲盡して、醉盡して、思ふさま遊盡した彼は、今やう〳〵常の心に復りかゝつたのである。然

し其と共に是迄の失敗や、今後の生活難を考出して、他の方面から激しく責立てられ、何うして可いのか途方に暮れるばかりだ。

『あゝ家は何うなるだらう。妹の前途は？』

と思ふと、道夫は最う堪らなく成つた。母の存命中にそろ〳〵縁談も起つてゐたのだけれど、其が母の病死で立消に成つて了ひ、續いて自分の失策から、唯一人の妹を目的も無い不幸な身に爲て了つたのである。

其も實に心苦しいが、第一目前の苦痛は、明日から何うして暮して行かうといふ事だ。貯蓄は盡き一文も收入の無い自分は、是非なく家を明渡して路頭に迷はなければ成らぬのだらう。自分は迚も學問や才を賴んで好い手蔓に縋つける器では無い。

して見れば只空しく諸方をうろついて、其成の果は……

と煎じ詰めれば、一時姿を隱くしてゐた件の恐怖は再び彼の心に起つた。以前は電光の閃くやうであつたが、此度は洪水が堤を壞し、墻を浸して、戸の隙や床の間から靜々と人を襲ふやうに、嚴しく彼の胸に迫つて來る。

『眞面目だ、是が全く眞の運命だ。』

道夫は犇と机に嚙付いたが、其拍子に例の小鏡に映る我顏を見て、矢庭に其を手に取るや否や、夢中で二階の椽に躍出てた。夏もやう〳〵深く成つて、暮行く空の遠くの方で小さな雷の音が爲る。目の下

には雨を待詫ぶる梧桐がザワ〳〵と風に戰ぎ、百日紅の見苦しい花はひとり火焔の色に咲誇つてゐた。道夫は低い欄干に腰を懸けたまゝ、何を見るでも無く考へたが、其眼は濕んで、黄な筋が一面に現はれ、物を持つ手の細く慄えるのは、激しい酒精中毒にかゝつてゐるのであらう。

『可厭だなあ。俺の未來はいつそ無い方が可い。』

と兩手に頭を掻挘らうとした時、彼ははじめて持つてゐた鏡に心着き、恐る〳〵其を前へ廻した途端に、

『あ　お父様！』

力任に鏡を叩きつけ、其が粉々に碎けたのを瞬も爲ず見詰めてゐたが、急に其破片の一つを取あげ目の前へ押當てるやうにして、

『はゝあ此處にも居るな。』

代る〳〵自分の顔を映して見るのが、終には無上に面白さうで、彼は其處に蹲つたまゝ吃々と笑出した。

* * * * * * *

夜更けて敏子が歸つた時には、道夫は目を光らして家中を驅廻り、夢中に成つて鏡の破片を探してゐた。

（完）

ネギ一束

田山花袋

お作が故郷を出て此地に來てから、もう一年になる、故郷には親が居るではない、家があるではない、力になる親類とてもない、村はづれの土手下の一軒家、壁は落ち、屋根は漏り、疊は半腐れかけて、茶の間の一間は藁が敷詰めてある。この一軒家の主がお作の爲めには、天にも地にも唯一人の親身の叔父で、お作は此處で娘になつた。

ぼろ〱の襤褸を着て、青い鼻洟を垂らして、結ふ油も無い額髮を手拭で廣く卷いて、叔父の子を背負ひながら、村の鎭守で終日田舍唄を唄ふ頃は無邪氣であつた。筋の多いふかし芋麥飯の結塊、腹の減いた時には、富家の子を騙して、錢を盜み出させて、二十錢の銅貨に駄菓子を山ほど買つて食つた。根性が惡いと謂つては、村の家々に憎まれ、若い衆に打たれ、菓物を盜んだと謂つては、追懸けて捉へられて、路傍の門に細引でくゝり付けられ、或は長い物干竿で、走る背を撲れて、路上に倒れて膝頭を石に二寸ほど切つて泣いたことなどもあつた。白壁の土藏、樫の刈込んだ垣、冠木門、物心が着いてから心から憎いと思つたのは、村の物持で、何うして此身ばかりから賤く、から憎まれ、から侮られ、から打たれるのかと思つた。それに、叔父にも好く打たれた。言ふことを聞かぬとか、物をよく食ふとか、假睡をするとか、何ぞと言つては、どやしつけられるのが辛さに、ある時などは、村の路に辿り懸つた

旅商人らしい男に縋つて、何處にても好い、どんな難儀をしても好いから一所に連れて行つて呉れと頼んだ。村から西に一里ほど、水の少い石川があつて、其向ふに楊樹の繁茂、路のほとりに一箇の石地藏、それをお作はいつても思出した。追蒐けて頼んでも縋つても、旅客は知らぬ顔をしてずん／＼と先に行く。初夏の日影は美しく光つて、麥の綠が靜かな午後の微風に搖いて居る。其石川の楊樹の處に來て旅商人はふと立留つた。痩せた、顔の靑い、髮の延びた男であつた。脊には風呂敷包、紺の脚絆も長旅の塵埃に塗れて、いかにも疲れ果てたといふ風――立留つて、後を追懸けて來た田舎娘を待つた。伴れて行つて遣るから、何でも言ふことを聞くかといふ。お作は喜んだ。

其の楊樹の繁みをお作はいつも思出す。まだ何事をも知らぬ小娘、長旅の疲勞に伴つて起つた男の烈しい慾望、彩色を施した横綴の繪――二十分の後、旅客の大跨で走つて遁げて行くのをお作は泣きながら追つた。けれど女の足で何うしてこれに追付くことが出來やう、欺かれたと知つて、忿怒が忽ち心頭を衝いて起つた。お作は小石を拾つて後から投げた。一つが旅商人の背中に當つた。そ、振返つた其男の顔、それが今でも歴然と眼に見える。

* * * * * *

其時が十四歳、それから十九歳の昨年まで、お作は其の呪ふべき故郷を去ることが出來なかつたのだ、叔父夫婦の虐待、終日の勞働、夏のじり／＼と眼も暗む日に雇はれて、十二時間の田草取、麥の收穫の忙しい時には殆ど晝飯を食ふ暇も無い。それに養蠶の手傳、雨の日の桑つみ、荷車の跡押、勞働といふ

勞働は爲ぬものとては無かつた。またある時は、機の工場に雇はれて、一日に一反半の高機織、鼻唄を唄ふ元氣さへ無くなつた、梭をしめる腕は自分のか他人のかわからぬ位につかれ果てることもあつた。若いといふのは人間の幸福、いくら烈しく働いても、夜は樂しい機織室の戶を、ことく\と叩く音がして、闇に白い頰かぶりの男の立姿、お作の朋輩にはかういふ羨ましい群が澤山あつた。けれどお作は此の若いといふ幸福をも充分には受け得られぬ不幸の身――額の大きい、鼻の丸い、ちゞれ毛の、鐵色した醜い女であつた。

けれど十九歲で故鄕を去つた、お作には相手があつた。この界隈でも有名な祭文讀、博奕が好きて、女が好きて、ことに聲が好いので評判。生れは西のものださうだが、一年ほど前から此地に來て、或は鎮守の祭、村の若者の集合する處などに呼ばれて、錆びた太い調子づいた聲に、多くの無智の男女をあくがれしめたが、突然お作はこれと出來合つて、こんなところはつまらぬ、人の出盛る溫泉場に行けばもつと面白いことがあるよ、誘ふも誘はるゝも、行水の思ひのまゝなる二人連、こんな故鄕は何うでも好いと、お作は闇に住馴れた地を離れた。

西に百餘里の溫泉場に來て二人は暮した。樂しかつたのは、ほんの束の間、いや、旅に出るより早く二人は既に――爭ひを始めた。野に生れて、野に生立つて、そして野に食物をあさる群の必ず定つて得る運命――その悲しいつらい運命にお作も邂逅した。

捨てられてお作は泣いた。續いて、十四の時、知らぬ旅客の背中に石を投付けたと同じやうな忿怒を

烈しく心頭に起した。けれど泣いたり、怒つたりしたゞけでは其終を告げることはもう出來なかつた。お作は其時懐妊して七月目であつた。

七月より臨月までの苦痛、勞働の出來る間は種類を選らばず勞働して、刻々に迫り來る飢餓と戰つた。新道の道普請に、砂利車の後押をして、熱い／＼日の下に働いて居たが、不圖烈しい眩惑を感じて地に倒れ、援けられて自分の小屋に送り込まれた、それからは、いかな丈夫な身體も何うすることも出來ず、憐みの眼と情の手に、乞食に均しい月日を送つた。

蝦蟇のやうな大きい腹を抱へて、顔は青く心は暗く、初産の恐怖は絶えず胸を痛めて、何がなし一刻も早く身二つになれかしと祈つた。腹中の子の動くのを覺ゆる時々、これさへ産れたなら……と常に思つた。そうしたならまた勞働して自分だけのことを爲やう。そして無情の男を探し出して恨を晴して遣らうと思つた。時にはまた其男のことを考へて、何うかして今一度一緒に暮し度い、可愛い子が生れて、それを見せて遣つたなら、男も屹度折れて、やさしくなるに違ひないと思つた。お作はまだ男を戀ふて居た。

子は産れた。

産れぬ前と生れた後との事情が丸て變つた。身二つになりさへすれば好いと思つたがそれは誤りであつたことがすぐ解つた。幼いながらも人間の絶えざる要求、乳を求めて日夜に啼く赤兒の聲、抑ゆることの出來ない烈しい母親の愛情、お作は離るべからざる強い覊絆の更に身に纏るを新に覺えた。

過勞と營養不良とて、乳が十日目頃からはつたり留つた。赤兒は火の附いたやうに間斷なしに泣く。それを聞くと、母親といふものは總身の血が戰へるほどに苦しく思ふ相だ。で、お作も其身の食物を求めるよりも先づ赤兒の乳を尋ね廻つた。乳酪を買ふ錢が無いので、隙をつぶして、彼方此方と情深い人の惠を求め歩いた。で、晝は先づ何うやら斯うやら過して行くが、夜が實に辛い。出ぬ乳を宛がつて、疊の足に引懸る一間の中を彼方此方と動物園の虎のやうにして搖つて歩くが、何うしても泣やまぬ時などは、いつそ放り出して了はうかと思ふ程だ。

産褥を早く離れた結果と、營養の不足と、精神の過勞とて、今まで遂いぞ病んだことのないお作も、烈しい頭痛と眩惑とを感じて、路を歩いてもをり〳〵倒れさうになることがある。一日などは、止むなく終日を一室に倒れて居たことなどもあつた。だから、勞働して食を得やうなどゝは思ひも寄らぬ。飢餓と病と心勞と――お作は愈々苦境に陷つた。

一月ほど經つたある日の午後。

お作は起上つた――室は暗く汚い。一隅に小さい葛籠、其傍に近所の人の情で拵へた蒲團に赤兒が繼つぎの衣服を着て寢て居て、其向ふに一箇の圍爐裏、黑い竹の自在鍵に黑猫のやうになつた土瓶が懸つて居て、傍に粥を炊く土鍋が置かれてあるが、幾日にもそれを炊いたやうな跡が見えない。木の燃えさしがだらしなく轉つて居て、疊の黑く焦げたのが際立つて眼に着く。これは祭文讀とお作と喧嘩した時、過まつて取落して燃えたのであつた。戸外は秋の灰色に曇つた日、山の温泉場はやゝ閑て、此の小屋の

前から見ると、低くなつた凹地に二階三階の家屋が連つて、大湯から絶えず立騰る湯の烟は静かに白く靡いて居た。

溪流の瀬の鳴る音が遠くて聞える。

お作は起上つた。二日以來飯を碌々食はぬので、足が妙にふらつく。かう腹が減つては仕方が無い、何でも好いから食へるものを少し探して來やうと思つたのである。と、同時に赤兒が聲を擧げて啼き出した。て、お作はふらつく脚を踏占めながら、先づ抱き上げて、出ぬ乳を吸はせたが、容易に啼き止まうともせぬので、今回は黒砂糖を水に溶して、吸口を宛がつて見た。て、何うやら彼うやら啼止んだので、それを古い帶で背にくゝりつけて、其儘戸外に出た、

灰色の雲は低く垂れて、何となく頭を壓へられるやうな空模樣。お作の小屋は溫泉場の裏の斜坂の中央に當つて居るので、下には先づ疎に茅葺屋根、陸稻大根の青い畑が連つて、其下に溫泉場、二階三階、大湯から出る湯の烟、上を仰ぐと、同じ畠の斜坂の爪先上りになつて居る間に一條の路がうねうねと通して、其向ふは烟るがごとき楢林の灰色の連續。

高い山には炭燒の烟が見える。

お作は家を出て其畠道を歩いた。辛い其身の境遇や、悲しい追懷よりも、餓もじいといふ念が第一に其胸に押寄せて來て、何か畠に食ふものは無いかとあたりを見廻した。陸稻畑、牛蒡畑、大根畑が一面に連り渡つて居たが、不圖、五六間先に葱の白い根を上げた畑が眼に入つた。

われを忘れて、畑の中に入つて、殆ど人の物を盗むなどゝいふ念も起らぬ中に、忽ち一束の葱を取つて、それを揃へて、もとの畠の道に出た。其時、同じ畠道を、一人の男―兼ねて見知つて居る溫泉宿の年寄の番頭が此方に歩いて來た。

葱を一束抱えてお作の立つて居るのを、ふと眼につけて、

『葱かね！』

と言つて笑つて通り過ぎた。

お作はぎよつとして我に返つた。自己の罪跡を見附けられたと思つて、身が地にすくむやうな氣が爲た。烈しい飢餓をも忘れて、茫然として立つて居た。見ると、其年寄の番頭は一歩々々其の細い爪先上りの道を靜かに〳〵歩いて行く。黑い縞のどてらが靑い畑と灰色の森との間をてく〳〵と動く。ふと。林に入らうとする畠から、鋤を荷つた一人の農夫が出て來て、段々と此方へ下りて來たが、前の番頭に出逢ふと、二人は立留つて何事をか語つた。いや、番頭の白い顏がちらと此方を振返つたのが見えた。てつきり其身の罪を告げて居る！とお作は思つた、お作は顏を蒼靑にしてぶる〳〵と戰へた。

* * * * *

一時間後に一事件が起つた。裏の山の林で、嬰兒殺しがあつたといふ噂が溫泉場に知れ渡つた。見て來た男に聞けば、林でおい〳〵泣聲が聞えるから行つて見ると、それは小屋の祭文讀の婦で、自分で緊め殺した赤兒を抱いて聲を擧げて泣いて居たさうな、それから自分も死ぬ積でゝもあつたのか、傍の樹

には細帯が長く吊してあつたとの話。て、駐在所の巡査が二人まで劍をぢやらつかせながら驅けて行く、村の世話役の男が呼吸を切つて飛んで行く、其あとから村の若者、子供、女、赤い蹴出やら、大縞の絆纏やら、時計の鎖を絡ませた縮緬のへこ帶やら、赤鼻緒の黑塗下駄やら、ぞろ〳〵と其の細い畠道は、人が續いて、其向ふの林の中には、巡査の制服、をり〳〵けたゝましく泣く女の聲、灰色の佗しい空が低く垂れた。

（をはり）

蓮の葉に飛んでひつくり蛙かな　一茶

口あいて魂拔けし晝寝かな　霜磧



和歌　采舟選

○ 渡邊甚之助

おなじくばふたり手をとり火の林もゆるほなかも乞ひて走らむ

はれやかに君とかたりし去年の日の春をかへすと鶯の啼く

わかき日のその火をつくし血を冷しつゞかなき身の今をことほぐ

おそろしき力おぼえて君にゆくこゝちに風は野を走るかな

あゝおもひ二十四ときを愛憎の針ふむこゝち晝夜となく

君と居て何ら事なくよろこびしその日のさまに春風の吹く

○ 佐野翠坡

天の國ほのかに見せて夕靄はいまむらさきに花野をこめぬ

君とわが二尺のひまを蝶ふたつもつれ〳〵てさりあへぬかな

薔薇の香われをめぐりぬなつかしき人のおもかげまぼろしにして

湯の谷やけぶりましろに雲つくる木立の上に冬の月しぬ

遠國の君のかをれる髮吹きて來しともおもふはるの風かな

思ふ人琴してあると月の夜を入りぬやなぎに水めぐる里

明けの星薄紅色にさくらさく山の眞上にきらめきて居ぬ

蝶あまためぐるとやうに丘の上の香のひと木の花ぞちりぬる

春の雨うつくし人は金の籠の小鳥に指をつゝかせて居ぬ

芽ざしたる若菜の上にけしきほど春の雪して薄日さすかな

遠國の君が髮の香はこび來とこゝろときめくはるの風かな

天の子らあまた燭とりとばりしてあるとし思ふ

あけぼのゝ雲

○　金子義行

ものはみな青衣着けぬ森越えて夏はきぬらしよき知らせかな

ものおもひ涙にくるゝ君が瞳のさまにも似たりほのかすむ湖

われ近き春の樹の間にしら鳩のかげこそみゆれよろこび滿つ日

死人どもおの／＼手だしひくごとき心ちするかな夕暮の道

○　都成牧郎

湖こえて虹たつ遠の雲に入る鳥こそ見ゆれ春風の郷

眼とづれば胸に小車ひためぐる歌の五とせまぼろしにして

忘れじなうつろ木住のまじものゝ夜鳴聲せし父母の島

連翹や籠の眼白ににげられて足ずり泣きし日をおもふかな

○　鏡ヶ浦人

相見るや磯に夜潮の音たてゝひたうつけはひ胸やすからぬ

靄けぶる中に月して天女あまたうつすとやうの野のしづけさよ

かゝる夜はうつら昔の夢くると云ひにし人をおもふ雨かな

○　佐伯新一郎

灯にそむき小暗みに入ればゆくりなくわが見し人の影見ゆるかな

白象のあまた群れして天上に遊ぶと見ゆるはつ夏の雲

さびしみは幸ある年のいと長き中のひと日に生れしと思ふ

○　小林狂霞

さびしらに君を見る日はかつてなき涙こぼれぬ行く春の街

吾と吾が小さき胸のうたがひに並らべる人をおそれけるかな

○　小木鳥城

かぐはしき花の御息のみなぎりておぼろとなりし山の月かな

櫻ちる峠を越えて行く人の寂しからうよ鐘はつ

かれ

あめの宮へ雲雀(ひばり)朝臣(あそみ)が野の春を奏(さう)する日なり雲
はなやぎぬ

○　　　　　　　　橋田濤聲

旅にして埘はなれし雛鳩のなくらむけはひ故國(くに)
をおもひぬ

夏の森絃(いと)の手白う伶人の奏樂すらし夕暮のあめ

○　　　　　　　　高橋葦水

朧夜や影繪の如き舟一ッ笛吹く人をのせて動き
ぬ

緑り濃き藻草を浸す夕潮に君のひとみとやうに
星照る

○　　　　　　　　鈴木康

月おぼろ蛙なくなる野路にして君をまつ間の長
かりしかな

○　　　　　　　　原田鳴弦樓

夏たつやきづたは今朝の雨にちりて巂子規なく
べくなりぬ

○　　　　　　　　山中白虹

山賤は深き谷間に斧ふりてこだまとかたり今日
も暮しぬ

○　　　　　　　　生田稻香

日記くれば思はれし日とかすかにも文字こそみ
ゆれ涙する眼に

君を得てくらす一日は一日よりなごかになりぬ
わか胸の海

○　　　　　　　　淺野白汀

春潮の君みるときに胸を搏(う)つひゞきのやうに鳴
りわたるかも

わが魘つかれぬうつる美(よ)き人のあまりにおほく
ゆきかよひして

わがわかき胸に小さき巣をつくり鳥は囀くかな
音のさまざまに

同じことおもひてあらむ人あらばとも丘の灯(ひ)を
なつかしむかな

四月きぬ蕾ばかりのさくらより縹(はなた)色なる雲のな
かれて

駿馬して君がゆく野のかたすみを跫音(あのと)ひそかに
ゆく身とおもへ
(森川葵村兄に)

應募和歌は東京小石川區原町一三三尾上柴舟宛の事



芍薬

芍薬や菊の根分けし畑の隅　水圃
芍薬に小雨や寺僧茶に耽る　同
牡丹散つて芍薬に降る小雨かな　同
芍薬に玉井の水を注ぎけり　同
芍薬を切らんとするや蝶來る　草童
芍薬や君が化粧の鏡臺　十湖
芍薬の隣見え透く垣根かな　青瓢
芍薬の散るや人病む枕もと　眞天子
尼寺や芍薬の花皆白き　刀川
芍薬の根に蟻の穴小草かな　蘇坤
芍薬や孔雀も飼ふて庭廣し　姑洗
芍薬やほと／＼歩む白き鳩　除郎
芍薬の中に鶏啼く小庭かな　華外
芍薬のその草の戸をなづかしむ　總子

芍薬や蝶に散りちる花の數　天南生
園古りぬ芍薬つくる醫三代　方外
蟻の巣に芍薬の露こぼれけり　朱朗
芍薬をいけて繪にかく女かな　蓼花
芍薬の鉢もありけり貢船　稚草
芍薬の散るや下葉の枝蛙　夜光
芍薬や庭ぶるまひの莚敷く　骨童
一つ庭に植ゑて芍薬牡丹かな　同
芍薬に女優しき茶の湯かな　青城
芍薬や田舎に古き生薬屋　同
褒似笑ひ芍薬開く朝かな　小魚
芍薬に天の美祿をたゝへけり　同
芍薬や椽の下行く蟻の道　董哉
芍薬に鮓に僑廬記作りけり　同

募集課題
蚊帳　六月十五日締切
灯取蟲　七月十五日締切
應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事



武勳の半面

梧窓子

生死の大問題は平素は如何にいふとも切實に感ずる能はず、何となく皮幾重の隔てある心地止み難きものなりとはいへ、鋒刃篠と亂れ砲火電と閃き、兩軍一合して離るゝ處、伏屍忽ち十里といふ、悲慘なる光景に面する大戰場に在つては生命の危き風前の蜘網の如し、此に於てか如上の問題は始めてヒシと肉身に迫る、迫られて解脱を得ると否とは、直に將卒の勇怯を分ち、施いては全軍の武者振り扨ては大局の勝敗に關するといふ迄もあらず、鋒尖晃として下る處其下直に首級ありとなすことなかれ、砲烟濛として起るところ其裡必ず艦身ありとなすことなかれ、一指の動くも精神なり、一指の搖ぐも精神なり、精神の安固ならざる、そが刀欛に接するにせよ引金に觸るゝにせよ、其處に多大の狂ひを生じて、敵に乘ずべきの機却て敵に乘ぜらるゝの機と化するにも至る、大勇猛は大沈着より來る、大沈着は大安心より來る、大安心は大解脱より來る、而して大解脱は佛といはんも可なり神といはんも可なり、詮ずるところ絶對者の大慈悲に縋る大信念の底より來る、然らば此種の法施者は誰ぞ、是れ吾人が平時もさる事ながら、特に戰時に軍隊布敎者の必要ありと感ずる所以なり、既に然らば百戰功成り振旅して歸るの曉は、その功の幾分は當然此等布敎者の上にも許されざるべからざるなり、譬はゞ一種の電池室にも似たり、一瞬千里の外と語る、吾人は電信機の神秘に驚くと雖も、而かも神秘の籠るところは印字器にあらず、音響器にあらず、幾個の長平瓶裡素燒瓶裏、僅か計りの丹礬と亞鉛銅板とがさる動力の根源にはあらずや、誠に神秘

に驚かんと欲せば先づ此電池室を覗かざるべからず、功の赫奕彼の如きものを解せんと欲せば、一面隱微の一動力たる此布敎者の上にも想及せざるべからざるなり。

而かも赫奕たるものは知られ易く隱微なるものは認められ難し、海には牢艦を碎き陸には堅壘を拔き、長驅して敵を千里の外に縮む、此の如きものゝ功はその最も照明較著なるもの人皆仰いで烈日の光を見る、然かも手に念珠を掛けて戰線に出沒する、圓頂方袍の士は、往々にして人の視聽より遠かり易し、彼は動いて形有り、此は靜にして形無し、此の如きも亦免れずとはいへ、有無元と相依る、有の利をなすは無の以て用をなせばなりとは、既に老聃の道破せしところにあらずや、現れざればとてその功を沒すべからず、現れざるの沒せられ易きを思うて、誠に之を沒せざらんと勉むるこそ當然なれ、

此度聖旨優渥、卅七八年役に於る軍隊布敎並に慰問の功勳に對し、特に敎語を西本願寺法主大谷光瑞師に賜はせらる、吾人は斯かる周密なる聖慮の程を恐察して深く感佩し奉らざるを得ず、

信仰の自由は既に憲法の保證あり、從て何宗にもあれ來るものは拒まれざるの事實ありとはいへ、薰染の久き佛敎思想は最も深く國民の血液に混じ脈管に流る、從て神よりは佛と聞かん方最も親み易く、ペテロ、ポーロよりは阿難迦葉と響かん方最も心に染み易し、耶蘇敎徒亦幾多の信徒を有す、軍隊布敎に慰問に固より盡すべきの當然にして、彼等も亦頗る勉めたるものありしとはいへ、その數の上に於て殆んど全軍の大を掩ふともいふべき佛敎に在つては、布敎に慰問に更に一層の熱誠なかるべからず、光瑞伯は英邁の資能く然り、砲烟彈雨の下直に二連枝を始め二百有餘人の布敎師を送り、卒先して布敎慰問の事に從はる、その功の偉其事の壯實に聖詔に酬ひ奉るの十分なるものあるを認む。

戰爭と宗教

松城生

宗教家は戰爭を語るべからず、彼等は四海同胞を說くにあらずや、慈悲忍辱を教ふるものにあらずや、之と戰爭とは如何に調和すべきぞ、更に况んや自ら戰塵に塗れて全軍の士氣を鼓舞すといふ事や、何の事ぞや、知らずや國家とは大自覺に達せざる奴隷が、偶ま攻守に便ずる團結に過ぎず、一國家は一虎狼のみ、從つて勇將猛虎といふも換言すれば一爪牙のみ、此に於てか戰爭とは單に虎狼の爪牙の大々的發育を遂げしに過ぎざるを、士氣の鼓舞とは何ぞや、偶ま虎狼を驅つてその咆哮怒號を逞うせしむる一の教唆に過ぎざるのみと、彼等の腦裏蓋し思へらく、原始的宗教にて各蕃族各別の守護神あり、人の如く喜怒し愛惡し厭欲し、他の蕃族の守護神と戰ふ、斯の如き性質の神を奉ずるならばいさ知らず、文明の宗教、同一神的の宗教にして、凡ては神の子四海悉く同胞なり、四河海に入つて同一鹹味、人に我他の別あるべからずと信ずるものならば人の血を見るは己の血を見る心地こそすべけれ、何ぞ伏屍山を築き流血杵を漂はすの慘劇を演ずるを爲さん、戰爭は大なる罪惡なり、基督は言はずや汝の隣人を愛せよ、更に言はずや汝の敵をも愛せよと、釋迦は言はずや「若し諸の衆生我身を斫りて手足頭目肢節を截たば當に此人に於て大慈心を生じて深く自ら喜ぶべし」と、又言はずや、「三つには惡しき人と犬猫等の畜生を殺せる罪となり」と、絕對觀よりすれば即ち其人の理想より言へば誠に右の如くなるべし、然れども是れ變通を知らざる論のみ、柱に膠して琴を彈せんと欲するのみ、是れ必ずしも門外漢の俗斷のみにはあらず、教界に生息する者にて猶は往々此種の見を抱くものあり少くも杜翁の如きは之なり、彼は此ゝに說を以て日露戰役當時に否を嘲したり、筆を禿したり、一士卒の徵募に應ずるを捉へて言ふ「汝は戰爭の神意に反くを知りつゝ何が故に滿洲に赴くぞ、赴かざらば峻嚴なる國命の下、必ず死あり、赴けば或は生を偸むを得んとや、愚なるかな汝は、汝戰に赴かば肉に生きても靈に於て死するものなり、赴かざらば肉に死しても靈に於て活くるものなり、若し赴いて銃丸に中らんか靈肉共に死するものにあらずや」と、その卒大に動かされ「我れ赴くとも誓つて日本人の寡婦と孤兒とを作らざらん」と答へぬ、彼が教訓に順けるもの彼の戰爭論中に見えしが如く多かりしや否やは知らず、兎に角此ゝる信仰を養はれて戰陣に臨む、一兵卒として何の働きかある、否あらざるこそ神に從順なるものとして喜ばんも、之れ迷へり、己の欲せざる處を人に施す勿れといふも、己れの欲する處を人に施せといふも、之を窮屈に解すればこそ種々の支障は生じ來れ、其處に變通あることを忘るべからず、昆虫の植物を蝕する、昆虫を殺すは昆虫には不仁なり、然れども之を助くるは植物には不仁なり、强盜の良民を襲ふ、强盜を屠るは强盜には不仁なり、而かも之を助くるは良民には不仁なり、事に權あり物に略あり、己れの欲せざる處を人に施さゞるの念は總て第三者をしても之を對手に加へしめざらんとする念となり、己れの欲する處を人に施さんとの

念は總ては第三者をして之を對手に加へしめんとするの念とならざる能はず、世に有名の戰、膺懲の師といふもの皆此精神の膨大より起るにいふ、吾人は決して人世は弱肉强食なるべきものとは信ぜず、而かも人々進化の絕頂に達し、究竟の自覺を開き、坤圓球上又一人の暴漢を容らざるに至る迄は慈悲の利劍を揮うて淚ながらに邪惡を制すること固より已むべからざる事と信ず、吾人は我國の近き過去に於て、幸に杜翁その人の如き變通を知らざる迂夫の敎界に潛まざりしを喜び、その甘き回想の夢を樂むもの、偶ま一二の狂妄者ありしとするもその聲の餘りに微々として振はざりしを慶するものなり、

竹の聲　　其角

許由の瓢

まだ青し



思想と形式

磯のや

思想と形式とは分りきつたる問題の樣にて、いつも八釜しき問題なり、他の作物を批評するに當つて、彼は惡作なり此は劣作なりと舌打ちして掛る一方に、否、彼は傑作なり、此は佳作なりと笑渦を浮べて襃むるあり、同一作物に對して枘鑿相容れず、氷炭相反するの批評下る、而してその因るところを考うれば、多くは思想を辿るものと、形式に縋るものと、讀者に自ら二樣の種別あるに基くが如し、勿論此かる分類は餘りに粗雜に過ぎ、忽ちさる分類は甚だ幼稚なり、思想とい

ふにも淋しみを主とするあり、暖みを主とするあり、或は社會の裡面を直寫して世に知られぬ痛き刺激を與へんとするあり、或は人心の幽奥を發いてその轉變の妙機を描かんとするあり、或は我知らず淡き感情に弄ばれて愛より生れたる蝶の如き樣を現さんとするあり、形式といふも亦然り、見るがまゝ聞くがまゝを次第に逐寫して一種の寫眞を學ばんとするあり、黒木造りの寢殿の樣、唯現れ出づる想を寫すに急にして手斧も鉋も十分には加へざる如き修辭をなすものあり、或は清麗、姫百合咲ける溪間の水の如きものあり、或は濃艶粉黛の美人寢くたれ髪に纖指を添えて桃咲く椽前、胸元現はに立つ如きものあり、書き續くれば限りもなからん、而して人々各好むところあり、餅は餅好き酒は酒好き千種万樣各々その好みに從つて他を評す、從つてその評も千種万樣なるは元より免かれずと言ふものあらん、之はさるべきことながら、唯だ評家の眼右の如きの差異に止まらば、我は清麗を愛せざれども、清麗としては十分に許すべき價値あり、我は濃艶を喜ばざれども濃艶としては十分に許すべき價値ありと樣に、或は我は左迄に深刻直に胸に砭する如き想を愛せざれども人生の眞を寫すに至つて成功せる作なり、我は唯さへ淡く淋しき鴫立つ澤の夕暮を更に夢より思ひ浮ぶる樣なる此かる作物、涙も迫らねば笑も求めず、唯全體に淡墨の一刷毛根から好かず、されど、これも慥に一つの趣味なりと樣に、取らざる迄にも何處にか許す處あるべき筈なり、然るに世の評論に見ゆるところは何事ぞや、鷺と見るを烏と見る、圓しと見るを四角と見る、宛然色盲と色盲との會談の如きものあり、されば予は思ふ、大きく分ちたる前述の二分類、這般の批評は實は此處より萠ずにあらざるかと、世に筋讀みといひて想の自然不自然或は何處かに一山潜まぬか、全體の焼點は何處ぞやと穿鑿して之にのみ心を碎れ、形の如きは措いて問はざるあり、之に反して形讀みとも言ふべきか、形の調和不調和、此句を此處に置くは惡し、今一句下に持來るべき筈なり、此語樣は相應しからず、斯く言ひ廻はさざるべからず、此處は轉接の

妙を缺く、斯くては乞食の玉廊に立つが如く側の櫻の枝に聽ては麵桶(めんつう)のぶら下らん心地讀むに堪えず、いや之こそは句調流麗而かも流麗の底に含蓄あり、餘韻嫋々として絕えざる縷の如しなどと、斯かる事のみ言ひて想にはトンと關せざるあり、筋讀みは形のみ整へるを見ては植木屋に行きて盆栽を見るが如く唯紅紫撩亂見る目に眩きのみにて何の感じも殘らずと、何か倘ほ物欲しげの樣を見すれば、形讀みは筋のみ六かしきものは頭痛鉢卷刧病に取付かれたる面色して讀まねばならず、文學は娛樂なり眞を味はんとならば哲學書にても繙くべし、百枚折の書帖何處を繙るもパッと見る目に美しく、寢覺めに讀んでも胸元の閊えぬ如きものならねばならずといふ、此處には樣々の主張もあり、チヨックラ言つて定まるべきことにはあらねど、吾人の嗜好より言へば想形兩ながら備はるこそ最もよけれ、若し兼ね得られずば寧ろ後者を捨んで形式の整へるを採らんかな、想は形によつて活く、如何に構想の妙を極むといふとも、描寫巧ならざれば、筋通らず、龍を畫つて大澤に捨てたらん如く、雲を起し雨を呼ぶの妙は又見るべからず、而かも物々しき角やら鱗から毒々しき舌やら醜く匍匐へる樣は二目と見るべからざらん、凡ては程度ものなれど徒らに想のみに拘はりその形を無視するの作は、往々にして想形並び失ふものあり、獨步氏の如きは、想を尊んで形に苦心せずと言ふも氏の作の名あるものは字句の琢錬を思はしむるものあり、形の整へるものは全體を通じて何等の感想の起らざるにせよ、恰も一段の蜀錦を剪裁せし如く、何處を取るも相應の面白みあり、一室に蹲まつて名山に遊び勝地を巡り、或は頑童の腕白遊び、或は田紳のステテコ舞、宛から身その境に臨み、笑ひもし罵りもする樣見えて、局々に床しみあり、三重吉氏の「お三津さん」を國民新聞の批評子は「提灯をさげて闇夜に行くが如し、あたりは常にパッと明るきも過ぎ來し方は暗黑なりと樣に論ぜられしが、予も亦之を許す、而かも技巧も此處に進めばホト、ギス一派の寫生文も亦愛すべきかな、予は今は小說家に、徒に獨步氏等を學んて得ざる、想形

跡方もなきデモ作品を排し、寧ろ後者に與みせんことを切言するものなり、されど理想の極致は玆にあらず想形並に秀てたるものを欲す、蓋し此の如きものは筋讀み側の言ふ如く、讀んで頭の痛きものにはあらず、與に驅られて一氣に讀了したる後、さて考ふれば油然として白雲の晴天に湧くが如く、何處ともなく床しき結構の腦裡に歴然たるものなればなり。

文壇小言

小蚊子

▲「新潮」の三週年紀念號はなか〳〵振つて居る。露伴、天外、風葉、春葉、秋聲、鏡花等の「處女作物語」は歴史的の興味がある丈けてあるが、天外氏の「文壇の流行と作家の覺悟」は氏の氣焔、抱負を見るべく、A、M生のゴルキーの「オルロッフ夫婦」の梗概未完なれども筆力暢達にして見識亦低からず、一讀の價値は充分にある。附錄小說の靈華の「夜」は醫者に讀ませたら、作者を以て神經衰弱の最も極度に達したものといふべく、霜川の「廐の馬」は舊作と聞いたが、成程今日の氏の作に比して甚だ劣る。武津美の「死人の側は」モーパッサンの飜譯だが、嘗て英譯で見たことがあるのだから讀まぬ。此間にあつて獨り眞山青果氏の「南小泉村」は**斷然として傑出したもので近來の佳作といつてよい。**「南小泉村」は七八篇短篇を含んだものださうだが、この號には其二つ丈け出て居る。第一は氏の田舍に對する感情と南小泉村の全景を書いて、後に續く總ての短篇を活動させる舞臺を描いて居る。氏の田舍に對する感情は所謂詩人的空想的にあらずして何處までも、實際的、科學的である。實際的、科學的に叙して居る爲めに少し理屈に過ぎるやうな處もあるが、而かも其間に無限の趣味あるやうに書きこなして居る手際はエライ。第二回は南小泉村に起つた一事件を描いたもので、着眼も描寫も共に凡を拔いて趣味津々として汲めども盡きざるの概がある。氏は久しく默して居たが、今度を手初めとして大々的活動をやる積りださうだ。「讀賣」に出る「彗星」なども確かに讀書界の注目を惹くことであらう。氏は今度書く小說は本誌に寄稿する約束があるから、氏の手腕の我讀者諸君に紹介さるゝ日も餘り遠くはあるまい。

▲「見る」「聞く」「思ふ」「ある」「いふ」「する」などいふ現在で文章（殊に小說）を書くやうになつたのは、ホト、ギス派殊に漱石氏の感化であつて、文章界に於ける一大事件と見て差支なからう。現在で止める文章の功過を具さに調べて見たら少くとも一大論文を草し得るだらうと思ふ。

▲一葉女史逝て以來閨秀作家は誠に振はなくなつた。八千代女史は多く新派のお芝居式のものを書き、楠緒子女史は觀察も鋭く、筆も利いて居るが、時としては少し拵へ過ぎた所もある。此間にあつて今度新たに出て來た野上八重子女史はなか〳〵有望な人で今月の「ホト、ギス」に出

る「七夕さま」の如きは近時稀に見るの傑作ださうだ。來月の本誌に出る全女史の作は其「七夕さま」に決して劣らぬものを書くやうに賴んであるから、讀者自ら全女史の力量を判斷して貰ひたい。

▲最近に起た小說家で最も囑目すべきは佐藤紅綠、眞山青果、鈴木三重吉の三氏で、古くからの作家で未だ左程有名とならずこれから價値の認めらるゝ人は田山花袋氏であらうと僕は窃かに信じて居る。

本號は「故人評論」並に「小說」等に多くの頁數を割きたる爲、勢他欄に影響して少々づゝ縮少するの已むを得ざるに至れり、次號よりは勉めて諸欄を刷新し體裁を完美して讀者に見ゆべし、請ふ諒とせよ。



我輩も猫である（四）

はくや

その內下の方で、先生は居ますかと云ふ聲がする、先生と云ふ敬語に對して、居ますかと不釣合だ、何者だらうと思つたが解らない、背つて苦沙彌君とこの先輩は、書齋の入口迄來て、鏡に向つてあばたの研究をしたり、頰つぺたを膨らして平手で叩いたり、鼻の根を中心にして眼や額や眉を一度にくしや〱とあつめたり、べつかんこうをやつて退けたり、亂抗のやうな髯を一把一とからげに引つ張り上げたりする、主人の藝道を窺ひ乍ら、お三の御多角が手紙を持つて來て、

いきなり臺所へ引き戻して、ハヽヽヽと御釜の蓋へ身をもたして笑つた迄、一時に透見して了つた、誠に重寶な眼だ、エッキス光線よりも重寶だ、尤も苦沙彌先生の書齋の入口は、臺所の入口と隣り合つて居て、先號は其の中央で書齋も臺所も一時に見える好位置に居たのだとすると不思議はない、然しそれては餘り平凡だ、先號は始めの内は、人間に近付いたやうだと喜んて、明らかに自分は人間以下であるやうに云つて居たのが、奈何ぜ人間のする事にろくな事はないとか、眞似をする點に於いて蟬は人間に劣らぬ位馬鹿であるとか、何時のか間に人間以上のものとなり濟して、終には讀心術迄心得て了つた大賢猫であるから、矢張其大賢に光彩を添ふる爲に、多少の奇蹟がある法が可い、即ち其眼はエッキス光線以上なる、一種靈妙不思議なるものとするのが適當てあらう。

平凡な生ひ立つて平凡な生長をした丈けに、我輩は眼も亦平凡なものである、今訪ねて來た人物を見る爲めには、矢張梯子段を下りて行かなければならぬ、然し耳丈けは僅かに人間より發達して居る、聲に依つて着物の柄や頭の格好を知る事は出來ないが、一度聞いた聲であるなら、誰だと云ふ事が解る、今の聲も癌細胞に氣を取られて居なかつたら、始めての來客か奈うか、直ちに解るのであつたが、殘念な事をした、

と妻君が、あら被入しやいと、少し意外だつたと云ふ聲をする、居ますか先生はと又云つた、解つた、紅鹿君が作り聲で押し込んだのだ、續てドカ／＼と上つて來る、大分御勉强だね、と云ひ乍らドン／＼書齋へ這入り込んで、主人の坐布團の上へ大安坐をかく、主人は、ウン一寸今……と云つたまゝ矢張顯微鏡を窺いて居る、少々御診察に預りたいのだがね、と元氣よく煙管をポカリ／＼云はせて居る、病人らしい顏色ではない、一寸待てと云つたが「癌腫でもあゝ云ふ症狀を呈して來る事があるのだから不思議だ」と、獨り言を云ひ乍ら、珍らしくお店をかたつけて、「何處か惡いのか」と這入つて來たが、陣地を占領されて了つたので負けぬ氣て坐敷の隅に重ねてあつた坐布團を、三枚持

つて來てドシリと坐つた、三枚布團も人にこそよれ、何だか木魚のやうで可笑しい。

「僕が惡いのではないがね」と紅鹿君は澄して居る、「誰が惡いのだ」「病人は最う死んで了つたのだ」と妙なことを云ひ出した、「死んで了つたものでは診察する必要はない」と主人も妙に澄してゐ、「それがあるんだよ」「變死でもしたのか」「いや然うぢやないだらう」「ぢや奈何したのだ」「それが解らないのだ」と不得要領な事を眞面目で並べて居る、すると今度は、「君あの片市ね」「何んだ片市とは」「役者の片岡市藏よ、略して片市よ、あれが死んだのを知つてかえ」と愈取り止めのない事を云ひ出した、「ウム知つてる」「何んで死んだのだね」「何んで死んだか主治醫でないから知らんよ」「主治醫でなけりや解らんかね」「解らんよ」「不便なものだね」「だつて君一度も診察した事がなくつて解る筈がないぢやないか、診察したつて解らないのが隨分ある」と僻りのない所を云ふ、「それも然うだね」と紅鹿君もくだらぬ處で感服して了ふ、「君は讀賣を取つて居るか」と又變な事を云ひ出した、「取つて居るが奈何したのさ」と少し面倒だと云ふ風で、「全體何を云つてるのだか取り止めがないぢやないか」と正面から切り付ける、此時紅鹿ちつとも騷がず、「實はね讀賣新聞に片市は、肺キヒで死んだとしてあつたので、國民を見たら肺氣枝とある、どつちが確かなのかね」と始めて質問の意味が解つた、一と口で濟む處を、こんな手間を取り紅鹿君もよく／＼の閑人だ。

「そんな病氣はないよ」と主人は一言の下に却下して了ふ、「だつて新聞にさう出てるぜ」「新聞の記事なんかあてになるものか、醫學の事なんか御存じなしの方が、矢張醫學の事なんか御存じなしの、妻君か何かの話を聞いて來て書くのだもの、聞違つて居るのが當然と云ひたい位のものだ、片市のも多分病名は肺氣腫なのだらうが、肺氣枝になつたり、肺キヒになつたりしたのだらう」、「隨分亂暴だね、その分で行くと職人の親方でもあつたら、ヘイキシにもなり兼ねないね」と好きな事を云つて居る、「それも愛嬌で可いだらう、又

新聞には頓死したものは、多くは腦充血か心臓破裂と、してあるが、實際に於て腦溢血なら頓死するが腦充血は頓死するものぢやない、又心臓麻痺なら比較的數も多いし頓死もするが、心臓破裂は然う矢鱈あるものじやない、然しこれ等は醫師の診斷書があるのだから、確かな事に相違なからうけれど、君新聞の記事は兎に角、小説なんぞにも隨分如何がはしいのがあるぜ、近い例が本年一月の新小説、小山内薫と云ふ人の病友と云ふ小説さね」「ウム、佛蘭西法科の學生が死んだと云ふのを佛法と書いた爲めに、讀賣の忘憂子に佛僧の死んだのを出したのは餘り突飛だと云ふ、批評を頂戴した短篇だね、讀んだよ」「ハ、そんな愉快な評があつか奈何か知らんが、兎に角あの小説にある病名を、一人は口頭血核で一人は非常に惡性な肺腺加答兒、二の病名が書いてあつて二つとも違つて居るのは妙だね、此處で申上げるまでもない、口頭血核は喉頭結核の誤まり、肺腺加答兒は肺尖加答兒の間違ひだ、それにしても喉頭結核が原發性に來る事は稀有と云はねばならぬし、若し在つたとしても疼痛、咳嗽、或は聲音の嗄嘶と云ふやうな症狀がなければならぬ、あの小説には疼痛の事などは少しも書いてない、唯一言（大層咳をする）位では甚だ飽き足らぬ、又肺尖加答兒は即ち肺結核の初期であるから、惡性も良性もありはしない、要するに醫學の智識のない人が書き散らすから、這樣馬鹿々々しい間違ひが落成するのだ」「落成は奇拔過ぎる」と紅鹿君が斧正する、「然し主治醫が患者に心配させぬやうにと、這ふ云ふ病名を附したのを、作者が氣をきかせて其儘書いたのだとならば、其氣のきゝ過ぎた點に感服せざるを得ない、又病名なんか奈何あらうと、そんな下らぬ事は作者たるものゝ眼中にないと云ふなら、我又何をか云はんやと恐れ入るの外はない。

夏目漱石先生の野分にある高柳君なんぞは、肺結核と云ふ誰も知つて居る病氣であるからかも知らんが、實に心切に肺結核の症狀が書いてある、殆んど間然する處がない、僕はあの小説を讀んだ時、文章の如何よ

り、道也先生の演說より、唯眞面目に肺結核を書かれた事が、僕には非常に嬉しかつた、慾には高柳君が脊のひよろ高い人であつたら、猶一層可くはあるまいかと思ふ、どんな物かね。

　僕は甞つてモンクライストを讀んで、矢張病氣て感心した事がある、ヅッと以前に讀んだので名も何も忘れたが、奴と一處に牢屋に這入つて居た何とか云ふ男ね、あれが死んだ病名は明かに狹心症だ、實に能く狹心症の症狀が書いてあつたと思つたよ、日本の小說家も着物の縞柄や髮の格好にばかり觀察を鋭敏がらせて居ないで、たまには病氣の事なんか、知つてる人に聞いて書く位の心切があつても、罰も當るまいと思ふやうな氣がするね、はゝ」と暫時主人の獨り舞臺だ。

新刊批評

▲回光錄

綱島梁川著
金尾文淵堂發行

「病閒錄」の第二編と見るべきものである。僕は梁川氏の文章の愛讀者で、氏の文章の出た時は、如何なる雜誌でも新聞でも必らず買て讀んで居た。だから此篇に集められてあるものは皆一度讀んだものだ。中には二度も三度も繰り返して讀んだのもある――然し今度本になつたのを又繰り返して讀んで見ても矢張り面白い。氏の文章は何時讀んでも幾度讀んでも僕には面白い〱而も恥かしいことには僕には一々其思想や文章を批判評論する程の力がない　只敬服し崇拜するのみである。然し『病閒錄』を讀んだ時と、此篇を讀んだ時との感じを大まかにいうて見ると、前者は熱烈で後者は靜穩、前者は煩悶から一歩を光明の境に踏み込んだ人の叫びで、後者は十歩、百歩、煩悶を後へにして、全身悉く光明の域に在る人の聲と聞き做される。前者には眞理を證明せんと心を碎いて居る態度が見え、後者には眞理を宣傳せんと意を用ひて居る氣味が窺はれる。前者には神を讚美する情が主であつたが、後者では讚美するに止らず、神と共に天地の化育に參せんとする活動的方面にも亘つて居る「神と偕に樂しみ神と偕に働く」は全篇を一貫する信條であつて、僕の見る所にして誤なくんば、この信條は梁川氏の到達し得た最高の眞理で、又恐らくは宗教の極致であらうと思ふ。文章の妙に至ては僕の[illegible]て

本誌に嘆賞した所で、殊に本誌には氏の文章も時々出たことであるから、改めていはなくとも讀者の御承知のことゝ思ふ。若し僕に今少し暇があつたら「病閒錄」と併せて讀み直して、詳しく氏の信仰の逕路を辿て見たいと思ふが、今は暇がないから暇が出る迄見合せる。兎に角「病閒錄」と此書は明治の著述の不朽なるものゝ一つなることを疑ない。體裁は全く「病閒錄」と同じて頁數はあれよりも六十頁ばかり多い。又卷頭に著者の寫眞がある。（哲生）（定價一圓二十錢）

▲文學論

夏目漱石著
大倉書店發行

夏目漱石氏が明治三十六年九月より同三十八年六月に至る二年間、帝國大學に於て論述せるものを訂正して出版したるもの也。編を分つこと五、章を分つこと廿四、主として文學を心理的、社會的方面より研究せるもの也。前半は他人をして書かしめたる爲めか、文稍々冗長にして理亦徹せざるが如く感ぜらるゝ處なきにあらねど、後半は氏の筆に成れる丈け、流石に文理共に整然たり。然れども吾人は何故に氏の最も得意とする言文一致を取らずして、之を文章體にものされたるかを怪む。若し夫れ其内容に至ては氏の哲學的、詩人的、はた學者的頭腦を以て數年の研究によつて成れるもの、一讀して輕々に評し去るの頗る其當を得ざるを信ず、故に今は之をいはず。若し最も世間より慊らずとせらるべき點をいへば其作例多く英文學の範圍に限られ、弘く他の國の文學に及ばざりしことにあれども、人の能力に限りあり、且つ英文學の範圍に於ては氏の如く廣く深く玩味したる人の稀なるべきを思へば、當人さへ眞味を了解したるや否や疑はしき他國文學を引例に出したるものに比して遙かに勝るものといはざるべからず。兎に角此程の書籍にあつて學界未曾有の大著なるべきを疑はず。本誌次號には本書に對する金子筑水氏の精細なる批評掲載せらるべきを以て、本誌の讀者は此書に對する最もオーソリテーチブなる評論に接することを得べし。（定價二圓二十錢）

▲草籠

田山花袋著
服部書店發行

田山花袋氏の小說「梅屋の梅」「自殺」「秋晴」の三篇を集めたものである。花袋氏は所謂自然派の驍將で、其字句には推敲を缺き、其文章には瑕瑾もあるが、寫す所が眞實なる丈けに、吾等にとつては餘程面白く感ぜらるゝ。此篇に收めたものは何れも百頁ばかりのもので、編輯〆切の切迫した忙はしき編輯室では到底精讀して居る譯には行かぬ。自分は其中に所謂自然派の作物について少し論じて見たいと思うて居る。依てこゝには以上の粗雜な批評を下して精細な評論は最う少し暇になつてからに讓る。（定價は此本について居らぬので、いくらかわからぬ。近來本に定價を附けなかつたり、頁數を附けながつたりするとが流行して來た。わるいことだ。こんな實際に不便なことを佳だとか、品がよいとか思うて居るらしき本屋は氣の毒なものと思ふ。）

▲小說 はるさめ集

幸田露伴著
東亞堂發行

露伴氏の明治二十二三年頃の作「一口劍」「風流佛」「未練」の三篇を收

めたり。「未練」は未だ讀みたることなかりしかど、他の二篇は當時に最も名高く、僕等は田舍に居て敬服しつゝ讀みたるもの也。當時より今日に至るまで文壇の形勢幾變遷し、描寫の形式などには如何はしく思はるゝ處なきにあらねど、露伴氏の作には形式以外、千古に亘つて眞なるものを捉へ得たるが如き趣あり。此等の篇の如き氏の最も氣鋭なる時代の作とて惰夫をして起たしむるが如き意氣の壯なるものあり。古きもの漸く姿をかくして容易に坊間に求め難くなれる今日、かく美々しき表裝の下に世に出でしは讀書界の爲めに賀すべし。（定價七十五錢）

▲地震學講話　大森房吉著　開成館發行

新世紀叢話叢書の一編にして大森理學博士の著也。博士の地震學に於ける、啻に日本のオーソリチーたるのみならず、實に世界のオーソリチーたり。此書博士の五年計畫に成り、日本內地の地震の調査は勿論、前後五回、印度、米國、臺灣等の大地震に出張して觀察したる所を材料としたれば、素より充分の根據ある議論にして決して吾人門外漢の容喙を許さず。殊に博士が地震國の名ある日本に住する我等をして地震の何物たるかを知らしめんと欲し、勉めて通俗にして分り易き講話體を取られたるは、頗る讀者に向て忠實なるものといふべし。製本亦頗るよし。（定價二圓）

▲西詞餘情　石川秋骨著　左久良書房發行

秋骨氏の譯文八篇美文三篇を集めたるもの也。中にあつて稍々長きものはゾラの「大藏大臣」とハーデーの「悪縁」にして他は極めて短きもの也。氏は最も早くモーパッサン、ハーデー等を飜譯したる一人にして譯文界に於ては元老株の一人といふべきも、此譯は忠實なるを外にして餘り巧妙なりとはいふべからず。予はむしろ近來氏が取りつゝある文明批評家的態度に於ける氏に最も重きを置かんとするもの也。然れども原作が何れも大家の筆に成れる丈け、面白き所少からず、又譯も極めて忠實なるを以て、今日無名人が試むるいかゞはしき飜譯などに優ること萬々なりといふべし。（定價六十錢）

▲見神論評　宇佐美英太郎編輯　金尾文淵堂發行

綱島梁川氏の見神に對して新聞雜誌にあらはれたる評論の主なるものを集めたるもの也。見神を研究する人にとつては極めて便利なるもの也。（定價六十錢）

▲おのが縛　徳田秋聲著　春陽堂發行

「萬朝報」に連載せられて好評ありし小說也。秋聲氏の小說は現今の文壇にあつて最も清新にして穩健に、巧みに人生の或物に觸れたるものなることは世已に定評あれば、くど／＼しくいふの要なし。此篇氏の最も得意とする短篇の或物に比しては見劣りせらるゝ點もあれど、又流石に氏の苦心經營、氏の力量特徵を充分にあらはしたる所も少からず。近時の佳作の一に數ふべし。（定價六十五錢）

▲嫁が淵　小笠原白也著　金尾文淵堂發行

「大阪毎日新聞」の懸賞小說第一等に入選したるものである。書き方は少し古い厭味な所があるが、趣向、結構は一般の讀者に面白さうに出來て居る。新聞小說に興味を持て居る讀者には歡迎さるゝことであらう。製本はなか〱よく出來て居る。（定價六十五錢）

▲有情無情　小栗風葉著　隆文館發行

地方新聞へ連載されたものとかで、一寸風葉の筆とは受取れぬ所がある。筋にはなか〱變化があつて、俗受けのものらしいが今の風葉の作物を喜ぶ讀者には恐らく喜ばれまい。然し世は廣く、人は多い、或は此方が「天才」よりも面白いなどゝいふ人がないとも限らぬ。（定價六十五錢）

▲佛教人生觀　前田慧雲著　大樹園發行

前田博士は今の佛教學者中最も頭腦が明瞭で、一番に學者らしい人だと聞て居る。道理で此書も所說極めて明瞭で吾々にとつても極て分り易く說いて居る。宗教や人生問題に心を潜むる人には極めて便利な書である。（定價四十五錢）

▲ひとり者　柳川春葉著　左久良書房發行

やさしい、情合のある小說である。書き方もなか〱振つて居る。讀み初めると終り迄一息に讀み畢らせる手際は流石に老功である。家庭の讀み物として上乘のものである。左久良書房の例の癖で頁數を附けてないから分らぬが二三十頁を超えぬものだ。製本に凝て居るがそれに定價七十錢では少し高いやうに思ふ。（定價七十錢）

▲戀愛と藝術と天才と　角田浩々歌客編　隆文館發行

哲學者として文章家として稀世の天才ショーペンハウエルの「戀愛の哲理」「婦人論」「藝術の本質」「美術談片」「詩歌の審美論」及び天才論を評述したものである。ショ氏の直覺的詩人的で、極めてサツセシチブであるから氏の書いたものを讀めば、よし其說に反對の人でもただ益を得るのである。此書は哲學及び文學を好む人には非常に面白い。（定價六十錢）

▲田舍人の見たる東京の商業　黑光女史著　中村屋發行

一風變つた奇拔なる觀察も少からざる書也（定價三十錢）

▲日本民謠全集　前田林外選訂　本郷書院發行

「白百合」の社友及び其他の有志が其地方〱の民謠を報導したるを集めたるもの也。民謠の文字的價値の少ならざることは極めて明瞭のことにして、ゲーテ、ハイネ等の天才も謠より利益を受けしことの大なるは文字史の證明した所也。此書が果して民謠の最も佳純なるものを集め得たるか否かは深き研究を要することなるも、兎に角最も必要なる事業に着手したるものといふべし。附錄「日本の子供の頭」は故小泉八雲氏の文を譯せしものにして一讀の價値あり。（定價五十錢）

氏の自費出版にして氏の前著が世に顧みられざりしに發憤して書せるもの也。（定價四十錢）

▲俳句研究

沼波瓊音著
東亞學堂藏版

初に俳句の初心者の爲に、自己の經路をおめず臆せずさらけ出して、如何にして俳趣を解し得べきかを示し、次には俳句評釋を試みて古今人の秀句を拾ひ、最後に俳句の趣味と和歌、漢詩、並に小說との趣味との異同を辨じたもの斯道に心掛くるもの丶座右に置くべきものであらう、取分けその俳句評釋には一種の特色がある、俳句ばかりでは無く總體詩趣といふものは單に現れた文の字面で面倒な注釋などを試みても何にもならぬものだ、文學は唯連想を呼起す材料でほかないから、眞に趣味を傳へ樣とならば、それに現れる周圍の空氣を明瞭に描かればならぬ、此著は之を勉めて十分に成功して居る、讀んで縹緲の世界に釣込まれる文章もある、その方からも一讀の價値は十分にある。(定價金四十錢)

▲女湯の卷

海賀變哲著
大倉書店發行

新浮世風呂と銘打つて居る、明治の三馬とオツに出たのであらう、昨年男湯の卷が出て居る、本篇の價値も大概それから宛が付かう、差配のお新道長屋の嬶の、い殊勝らしい軍人の奧三あれば撥れつ返りの女學生あり、その他下女の子守の義太夫の御師匠樣のと樣々の氣質、飲め並べた硝子鏡の湯陰りを、タオルの端で一寸、拭へば、人樣々の御面相と共に露窟々と現れて見える湯屋を描くは儘に浮世を描くのであるが、著者の筆は可笑味を主として餘りに浮いて居る、世相を畫かうとならば今少しシンミリと有りたい、その內に力ある可笑味も流り得樣と思ふ、之は前後兩卷に對する我儕の注文である。(正價金六十五錢)

▲トルストイ短篇集

百島冷泉譯述
內外出版協會

杜翁の小作品の中十一篇、だけを擇んで譯したものだ文章はスラ〳〵とした難の無い筆で、能く原意を明瞭に傳へて居る、が慾をいへば、元來が飜譯物だらう仕方がないとしても、對話だけには今少しバタの臭味を取つて欲しいと思ふ、他の作家と違つて杜翁の短篇ものは筋の何のと沙汰すべきでない、唯翁の信念を軟い文字に含めただけのものだが、實際血肉に混じた精神の現れてあるから、讀んで身に應へる、之を傍に置いて品性を養ふべきである。(定價金三十錢)

▲鉢かつぎ姫

坪內逍遙著
彩雲閣發行

御伽草紙にある鉢かつき姫の筋を歌劇に作り換えた作で著者一流の清潤の文字、宛轉の聲調で、昔覺ゆる幽婉な情致を描いたもので、之に添ふるに俄仙人の一篇がある、之も在來の物語の筋を取つたのだが、多少は換骨してある、大內山の花の宴に人妻の袖を引いて恥を晒して、浮世がふつに厭になり俄修行の仙人姿、その久米仙人贋の男贋の女打群れての歡樂の賑ひに空を飛行の途次偶と下界を見樣として、輿を踏外して墜ちたとなつて居る、之は暖い暢やかな空氣に充ちたものである。(定價金六十錢)

▲尙ほ▲福音書大觀▲管絃▲樂天主義▲歎異鈔講義▲信仰▲修養▲銀島田▲から騷ぎ▲富美子夫人▲黃金山風と俳諧一口噺▲五十二次草鞋日記▲富と愛▲煩悶記▲現代青年論▲勝利▲マセッパ▲樹寫生文集▲慶應義塾五十二年史等他數冊は次號に紹介すべし。